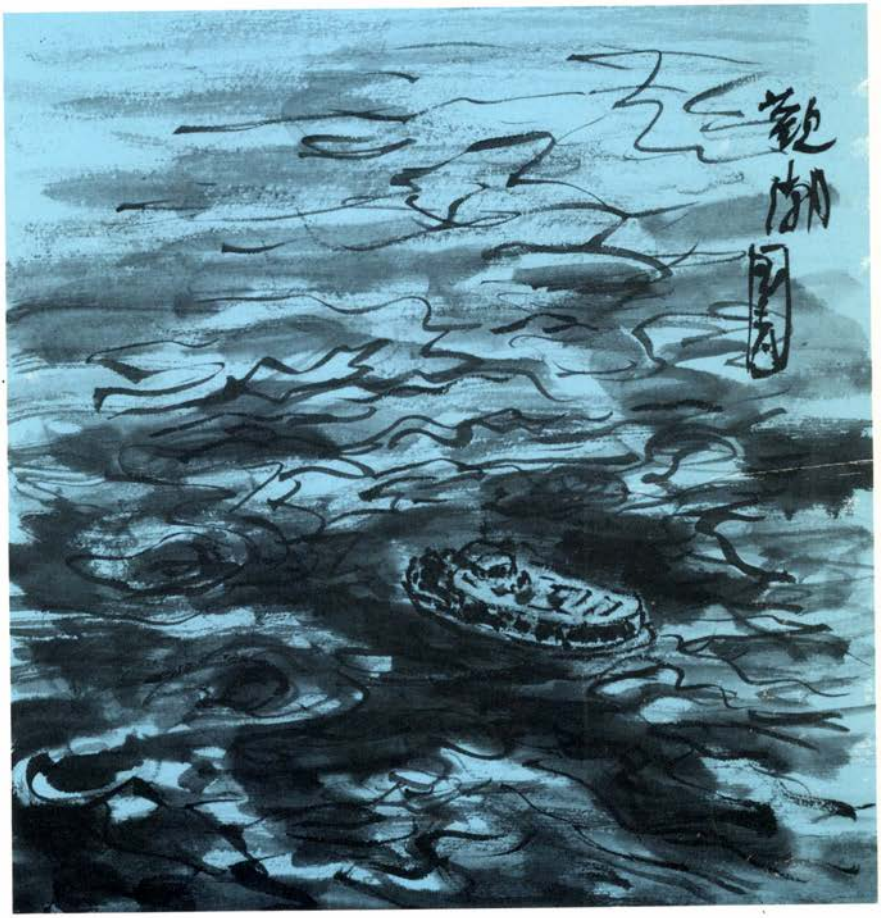
川柳塔

昭和四一年一月九日 第三種郵便物認可
平成三年三月二五日 印刷
平成三年四月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻七六七号



日川協加盟

No.767

四月号

第15回全日本川柳愛知大会

日　時　6月9日（日）午前10時開場
会　場　名古屋市公会堂（昭和区鶴舞公園内）
会　費　3000円（昼食・記念品代共）
宿題　第一部（事前投句・5月10日締切）
「探　す」　青木晴嵐選
「瓶　」　定本広文選
「本　心」　山崎鮮紅選
3・5×18センチの句箋1枚に1句ずつ記入。各題2句、無記名、封筒に住所氏名を明記し、投句料1000円（定額小為替、現金書留）同封のうえ、左記へ。
投句先　〒542　大阪市中央区谷町7丁目1―39
新谷町第2ビル206
日本川柳協会大会係あて
宿題　第二部（当日出句・締切正午）
「学　ぶ」　山本翠公選
「風　景」　藤本静港子選
「緑（みどり）」　鈴木寛六選
「信　仰」　坂本雨山選
各題2句・各部の各題とも未発表作品に限る
前夜祭　6月8日（土）午後6時～8時
会　場　名古屋クラウンホテル
費　用　8000円

西宮北口川柳会
「きたぐち」二百号記念句会

と　き　5月13日（月）午後0時　開場
同　1時　締切
ところ　西宮市立中央公民館
（阪急「西宮北口」駅南出口徒歩5分）
あいさつ　黒川紫香
祝　辞　野村太茂津氏
兼　題
「牧　場」　橘高薫風選
「慕　う」　小出智子選
「友　達」　墨作二郎選
「爽やか」　和田光代選
「女　」　香川水声選
「音　楽」　森中恵美子選
「人　間」　西尾栞選
＊各題2句（席題なし）
会　費　1000円（軽食・記念品呈）
投　句　5月10日までに62円切手8枚同封、4cm×20cmのの句箋1枚に1句ずつ記入して左記へ
〒663　西宮市高木東町9―4　西口いわを
西宮北口川柳会

軍事評論家

西尾　栞

湾岸戦争の始まった頃、テレビをつけると軍事評論家という人達が次から次へと出てきて、こんな評論家が居ったのかと驚きの目で見、愕きの耳できいたものである。軍事評論家というと、太平洋戦争に出陣した、戦争経験者かと思っていたが、戦後成人した許りのお若い方達の仲々卓越した話であった。

この平和な時代に、こんな職業があるのか、平素は何をしておられるのかと思うていると、三月六日のＵＳＯ放送の欄に

停　戦

経済評論家にバトンタッチしました

軍事評論家

（京都徒然草）

この間、八尾の文化会館で、永六輔さんの講演があった。日本人の平均寿命は男七十六歳、女八十一歳であるが、地区別にすると東京は全国五位だが、大阪は四十六位で大阪の方が短命である。「大阪の食い倒れ」などという言葉が微妙に影響しているのである。長寿県一位は沖縄県と島根県とがいつも争っていて、両県の食生活は伝統食が中心である。グルメから言えば慎ましく貧しくみえる食事が、実は長寿食として豊かなのである。男と女の差の七十六対八十一の五年差は昔から変っていない。昭和三十年、女の平均寿命が六十歳になった時、男は五十五歳であった。

昔の学者は、「女は馬鹿だから長生きなのだ」と明快な理由づけをしたが、今は思っても口に出して言うてはならない。

今の学者は、「女はストレスの解消が上手だから、その分寿命が長くなる」と言うている。男がストレス解消を酒やギャンブル、またはグルメに求めると、ストレスは解消されるが、生命を縮めるのである。

最近では、サラリーマンのストレスに給料の銀行振込があることがわかった。日本のサラリーマンの八七パーセントが奥さんから小遣を受け取っているのである。自分の稼いだ金が銀行経由で奥さんの財布へ。それを頭を下げてもらうストレスが問題になっている。したがってこの五年差はひろがることがあっても、縮まることがないと言う。だから毎年平均寿命が延びたと言うても、お目出度いように報道するのはおかしい。「寿命」というのも「生命」であるべきで、長く生きることが「寿」とは言いきれない。「美しく老いる」と言うのは、いやな言葉である。「ひたむきに生きる」とそれが結果的に美しいのである。上手にストレスを解消して、人さんに迷惑をかけず長生きをして、辞世の川柳の一句でも吐いて、悔いなき人生を終りましょう。

座右の句　台所覗いて帰る里の母　（宵明）

私の句　考える蛙ポカンと浮いてみる　矢野佳雲

川柳塔四月号目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■**巻頭言**　軍事評論家……西尾栞（1）
「平和」……西田柳宏子（2）
川柳塔（同人吟）……西尾栞選（4）
自選集……（34）
川柳の群像　長谷川鮮山……東野大八（38）
■**古川柳**　柳籠裏三篇研究（七丁）……（40）
水煙抄……黒川紫香選（42）
秀句鑑賞「同人吟……金井文秋（63）
　　「水煙抄……小林妻子（64）
大空のこころ(4)……橘高薫風（65）
選の周辺……正本水客（66）
■**川柳こぼれ話**　閑話休題……田中正坊（67）

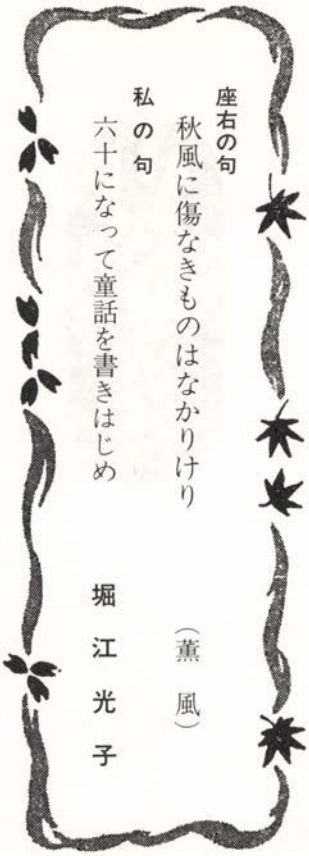
「平和」

西田柳宏子

全世界注視の中の中東湾岸戦争も米国を主体にした多国籍軍の怒涛の進撃に、世界最強と豪語していたイラク精鋭部隊もなす所なく敗走して、呆気ない幕切れとなり、一応、中東和平の道が開かれたことは、遠く離れた日本の国民も一様にホッとしたことだろうと思われる。

過去に敗戦の経験をもつ我々には、若い世代と違った感慨を覚える。まして今回は戦場を遠く離れ、第三国的立場から両者夫々の大本営発表的報道に苦笑を禁じ得ない所もあった。平和は戻りつつあるが、中東諸国の戦禍に見舞われた国々の人民達の戦後は、まだまだ酷しいものだろう。日本が焼土の中から復興へ立上って二十年、三十年の苦闘の戦後があったこと以上に、今後のイラクを初め中近東の人々は苦しむことだろう。ただ日本と違って、多国籍軍、国連の支援により、世界中からの救いの手が延べられるであろうことは明るいものを感じさせられる。

銀河系……河内天笑選……(68)
■女性コーナー　茴香の花……小出智子選……(72)
初歩教室……辻　白渓子……(74)
「記　念」……松川芳子選……(76)
一路集「技　術」……北山悟郎選……(76)
「郵　便」……児島与呂志選……(77)
平成二年度　一　路　賞受賞作品・受賞のことば……(78)
平成二年度　各地柳壇賞受賞作品・受賞のことば……(79)
各地柳壇（佳句地十選／松川杜的）……(80)
本社三月句会……(94)
柳界展望……(98)
四月各地句会案内……(99)
■編集後記……田中正坊・宮園射月芳・西出楓楽……(100)



座右の句

秋風に傷なきものはなかりけり　（薫　風）

私の句

六十になって童話を書きはじめ　堀江光子

考えてみると戦争といっても、個人の喧嘩とかわらないものだなあと、考えさせれることも多かった。原油流出の暴挙、油井破壊炎上の大被害、真っ黒な原油に自由を奪われた海鳥の悲しい姿、もとの海に戻るのに三十年かかるとか、百年かかるとか言われるが、自然の威大な力は、もっと短時間に復旧してくれるだろう。原爆で広島、長崎は、二度と草木も生えぬ荒廃から立直れないだろうと言われたことを想い出す。自然はいつの間にか雑草を伸ばし、復興への意欲を励ましてくれた。湾岸の荒廃も、恐らくいつの間にか元の姿を取り戻すだろうことを切に祈りたい。

何より幸いだったことは、多国籍軍の迅速な処置が、核、化学兵器使用の最悪ケースを招かなかったことであろう。

これからの平和のため、日本はますます苦しい援助も要請されると思うが、二た言目には「憲法違反だ」の一つ覚えで政府の対外援助寄与にケチをつける与、野党のかけひきが、日本の真の平和希望の姿がどんなに世界の目に歪んで受け取られているかを考え、戦争継続に何ら協力の実を挙げ得ず、「日本は何しているのか」と非難されていたことを思い併せて、早急に対策を立て、実行に移すことにもっと努力し、国民も声を大にすべきだと思う。

九条に身動き出来ぬ自衛隊
世界から顰蹙日本の金余り

川柳塔

西尾栞選

岡山県　矢内寿恵子

献血へはたちの腕はまっすぐに
愛と憎　有象無象の万華鏡
鍋みがく忘れ上手に生き上手
七回忌まださよならが言い切れぬ
仮の世の仮の命の数え唄
四捨五入四捨に情けがたんとある

寝屋川市　江口度

見る人が見ればわかってくれる手間
黄門のひげは風になびかない
目立たない所で花を咲かせよう
顔にしわ増えても心にしわはない
水煙の先から春が降りてくる
春だなあ少しゆっくり灯がともる

大阪市　板東倫子

税務調査三日目敵も疲れてる
戦争はいやと炬燵から叫ぶ
ジョークでもブラックユーモアでもない笑い
亡き母と同じかたちで座る姉
湯の華で昨日雲仙今日は下呂
もぐら叩きのもぐらのような男の座

広島県　田村新造

シベリア回想

寒月へシベリアのことまた想い
望郷の想いで泣いた柵の中
ラーゲルの夜を切り裂く起床鐘
明日もまた生かせと祈る北斗星
アムールが凍って逃げる策を練り
凍てついた屍に春はまだ遠い

熊本市　永田俊子

何色にも染まぬ覚悟の墨衣
少しばかりの幸せでいい納豆汁
人の世や数によろこび数に泣き
定年の父が苦手なお世辞言う

み仏の思し召しかも二度童子
吊皮に下がる惰性で生きている

松原市　谷垣史好

病葉に露一滴が重い朝
天地左右測ったような日がつづく
ニュースが全裸死体と言うてたぞ
煩悩や酸素少ない血が騒ぐ
帰りなん胸の谷間のふるさとへ
平和平和と誰もコタツを出たがらぬ

竹原市　小島蘭幸

雛飾る　気になることがありまして
洗っても洗ってもいくさの匂いする帽子
暗闇で咳をしているのは　亡父だ
みんな眠ってひとりぽっちの咳をする
ぼくよりも自信をもっている雅号
ライバルのやさしい言葉には負けぬ

西宮市　林はつ絵

仲なおりパッと電気が点きました
規格外れの物指しも持っている
ノーと言う貧しいわたしとは思う
ぼろを着て誇りを一つもっている
自慢ばなし既に墓標の下にいる
稼げないので清貧と言うておく

美禰市　安平次弘道

招待状やっぱり地獄からでした
但し書に軽いジョークが盛ってある
シナリオのとおりに打てぬ句読点
プライドを捨てて造花に妥協する
副作用にふれぬある日の糖衣錠
自画自賛詩人のペンは折れ易し

今治市　矢野佳雲

立てるより腹はかかえて笑うもの
何着ても夫がほめたことがない
くじ引きの応募名前は妻にする
男勝りにならねばならぬわけがあり
お若いと言う嘘だけは信じよう
帯封を信じ銀行から帰り

大阪市　西出楓楽

不言実行父には父のダンディズム
忙中閑本屋のはしごでもするか
心当りあってくしゃみが二つ出る
ブランド指向男も服も持物も
自販機の声がいらいらつのらせる
女ごころは不可解でよし冬銀河

和歌山市　西山幸

躓いて顔を落してきたらしい
四つ角でわたしに声をかけてやる
戦争は何故終わらない紙兜
鉄橋を毎日渡る旅つづく
遠くなる理想よきり絵ちぎり絵よ
現実に戻してくれる四月馬鹿

和歌山市　堀端三男

半世紀前の日本とイラクだぶらせる
糊塗ばかり上手になって老いてゆく
花時計ひと足早い春となる
この時と陳情にゆく地方選
磯の香が匂う駅舎のひとり旅
照明煌々あれはローンの広告だ

名古屋市　越村枯梢

春光に日時計大きく背伸びする
古里と親は日増しに遠くなり
目の上の瘤だよ妻は読書好き
惚け二人ぼけの深さを笑い合う
大笑い神事俺も一度はしてみたい
秒針にある日妥協を申し出る

堺市　河内月子

チョコレート軽い気持であげたのに
光る石せんでも君の手はきれい
ふたりとも保険嫌いで仲も良い
フセインもブッシュも息子出しなはれ
気の強いとこしっかりと譲り受け
ノックして入る息子が他人めき

岡山県　嘉数兆代賀

手招きの指から春の使者が来る
踏まれる位置とは知らずタンポポ春を咲き
ざるの目をこぼれた米のひとりごと
もう逢えぬことには触れず風の駅
さまざまな風をくぐって来た余生
なぐさめの言葉は要らぬ寒椿

倉敷市　田辺灸六

親馬鹿の愚痴につまずくのも絆
愛情を小出しにくれる樹の温み
子の針路点から線となる入試
恥一つ耐えてひとつの知恵重ね
友の訃を聞いて七十路の冬木立
いらだちを押えて神の声を聞く

米子市　林荒介

塗り替えた壁に指紋が甦る
結び皺　帯の疲れも癒さねば
なまなかなことでは越せぬ川の中
冬涸れの川だ彼岸を見ておこう
輪の中の風を宥めてばかりいる
この頃の玩具遊びは面白い

松原市　佐藤奏月

司会者の席さざ波がおしよせる
思いあまってりんごは膝をころげ落ち
愛情は揺ぎなきもの梅が咲く
戦争論争夫婦微妙に食い違う
砂嵐春の鏡は曇りがち
バベルの塔　夫婦は縄を綯いつづけ

倉敷市　小野克枝

自問自答の彩を探して自閉症
途中下車したい日もあり蟻夫婦

天寿労わりつ今宵の飯を炊く
片方の目玉が欲しい老け達磨
未熟さは言うまい軽い傷を撫で
バーゲンが春の財布を慌てさせ

松原市　玉置重人

水虫も春の気配を知っている
昼の月なんとかアホになれました
ライバルの怖さ知ってるコシヒカリ
時々は遅れる時計欲しくなる
ウインドの毛皮戦争を知らぬまま
かみ合わぬ朝パン好きとごはん好き

松江市　舟木与根一

大根が主役家族の鍋温し
嫁く気などなくて一輪ざしが好き
コーヒーで大人の恋をしています
名刺裏へまでお節介つづいてる
寝たふりも収穫なくて寝てしまう
義理チョコと営業用ばかりです

鳥取県　松下たつみ

宝籤遊び心の夢を買う
いい刺激あたえてくれた神の罰
前向きに生きると笑顔ついてくる
薪でめし炊いて都会に懲りました
春一番蕗のとうから呼び出され
いやだとは一度も言わぬなで仏

豊中市　田中正坊

時時刻刻　破局が迫る砂あらし
シナリオのとおりにボタン押す戦
砂漠いまハイテク兵器実験場
ミサイルは正確なれば血が流れ
ゼネラルの戦果を語るしたり顔
いくさせぬ国にも軍事評論家

奈良市　宮口笛生

春ですね女が太い足を出し
夕やけこやけ鴉の帰る山がない
よう忘れて忘れてと妻呆けてくる
時計など要らぬ自由の老夫婦
外人も祈る神様英語ご存知か
寂しさをつくづく白い髭を剃る

尼崎市　春城武庫坊

がんじがらめに母屋しばっている絆
各停の電車で春を出迎えに
敗者復活まだ人間に遠くいる
誤算続きで雑兵らしく生きている
冬の水車は情けかくしたまま眠る
春爛漫　王将ねらう歩が並ぶ

藤井寺市　吉岡美房

フセインの強気を計る髭の艶
フセインも悪いしかしという世論
神様の喧嘩へ祈る神がない
いじめられない為金を出す話
元気よく起きたら何故か建国日

梅咲いて桜待つ間の薄情け

八尾市　宮西弥生

一枚の辞令をもろうて酔いつぶれ
だまされていよう満月出るまでは
ターコイズブルーで春の夜が明ける
ウソすこし入れて春の夜を派手に
現役のつづく限りの眉を引く
納得の給料でといでいるお米

和歌山市　福本英子

いつものことで節分過ぎに胃が治る
さりげなく触れても来ないチョコレート
棘のある文字が嫌いなモンブラン
二次会へ開き直ってゆく財布
千体仏朽ちて真赤なよだれ掛け
立て札に資金不足とお首仏

寝屋川市　岸野あやめ

三味の音を嫌いぬいてる芸妓の子
津軽三味吹雪怒涛の響きする
三味線の音締めがゆるい京の昼
溜息の重さ軽さの羽根布団
春寒し老いの話題がかみ合わぬ
中流の意識　鍋焼き注文し

下関市　石川侃流洞

死火山の父にもあった炎の日
楽茶碗少し歪んだ芸術味
踏絵残酷　脆い心をもてあそぶ
冷暖房で暮らし怠惰の日が長い
もがくだけ藁一本が逃げていく

倉吉市　奥谷弘朗

振り袖にはたちの笑顔こぼれそう
熱血漢だから感激倍になる
損得があって防ぐに手間が要り
真実を写す鏡の怖さ知る
訛るから身近な人に成って見え

笠岡市　松本忠三

食うて寝てこれが第二の人生か
解釈の相違良いとも悪いとも
身の程を知らぬ反省しています
ちゃっかりの妻に財布を任される
責任の一端なんて残酷な

米子市　林瑞枝

明日の絵に知足の椅子をふたつ置く
少しおどけた恋人もいる父の書架
花茣蓙を敷いて倖せ売っている
手洗いから本屋に回った夫を待ち
イヤリングした猫と会う銀座裏

島根県　堀江正朗

見えずとも恵みの深さ春を知る
妻もどる頃と灯りを手さぐりに
音々を文化と思う盲人記
失明の苦労を分つ血の温み
咲いて散り争うことを知らぬ花

島根県　堀江芳子

声だけで僕の妻だと信じられ
おてんとさま拝んでいると桜咲く
眼球移植ああ夢でしたいい寝顔
おまえだけ　おまえだけはと頼られて
梅咲いてほどよい燗も昼の酒

鳥取県　土橋螢

生理かな恋に揺れたり止まったり
うれしさをまあるく揉んだ雪つぶて
友だちのとこに泊ったことにする
板の間に母の磨いた跡がある
春の月澄んで平和な天地人

鳥取県　新家完司

刑務所を出ても追われてばかりいる
耳の形すこしも進歩していない
煙草すう人が来たので窓開ける
雪が降る汚れた音を吸うように
けもの等と同じかたちをして眠る

尼崎市　春城年代

生真面目に生きて夫婦の鬼やらい
辛抱がたいせつ春はもう近い
そこまでは止めておきなと古希が言う
春嵐庭の椿が三つ咲く
シャボン玉飛ばそう春の雲の上

松江市　恒松叮紅

子離れの日からアクセル踏むパート
同い年の訃がまた届く雪模様
いまどきの見合い男の失語症
病院の受付造花にだまされる
同窓会　元級長が惚けはじめ

寝屋川市　稲葉冬葉

湾岸戦争　無声映画か幻か
七十五日　水に流せぬこともある
素人相手になんきん玉すだれ
帳尻が合う人生でものたりぬ
こともあろうに娘と競う美容院

大阪市　河井庸佑

身内から反論が出てあわて出し
一応は筋を通してから妥協
裏の裏もうひとつ裏を読めという
要領の良さ見習えとささやかれ
義理人情絡み判断取り違え

廿日市市　林野甦光

平気な顔してるが一緒に死ねますか
春風の誘いに洩れた雪だるま
隣からいつも嫁さん泣きに来る
遍歴の数だけ鈴を持ってます
仮出所しばらく駅の渦に合う

岡山県　小林妻子

年金で賄う策を練っている
百姓は無策のままで春の音
新築へ金策だけが足を踏む

親と子の策で回っている水車
万策が尽きた欠伸でけりがつき

京都市　都倉求芽

食卓も暖冬に合わせる市場籠
それなりに四季の風吹くビル谷間
重体の地球月に附き添われ
わが家では滅多に茶碗割れませぬ
幸せを団地の窓が比べ合い

米子市　小西雄々

いつか来た道を歩いて詩拾う
スタミナへ人間臭い風が好き
いつか虹つかむ軍手を信じたい
玉乗りの夫へ他人は手を貸さず
悪知恵で白い鴉にしてしまい

今治市　越智一水

よい人はきれいに骨まで焼けている
よく騒ぐ世だなと　とんび輪をえがき
春一番　遊び心の服を着る
ジーパンが似合う夫婦で羨まれ
陽を背にうけ年金の幸を知る

高槻市　川島諷云児

いまここで怒ると傷が深くなる
灯を消して少し淫らな夢を追う
叱られる予感に膝が崩せない
足し算の出来る暮らしがありがたい
めくじらを立てる程でもない遺産

倉敷市　稲田豊作

生半可な奴が滔々主義を説く
足並を揃えて仲間老いてゆく
思い出や嗚呼忘恩の我と知る
生活のため口惜しさを嚥み下ろす
おさみしいでしょうと孫をあてがわれ

大阪市　本間満津子

お不動さんきいて下さる顔でなし
その人が聞けば冗談では済まぬ
そややそやと言わない人は放っとかれ
その訳を言えば傷つく人が有り
がらくたを捨ててすっきり寒い部屋

大阪市　藤田頂留子

電車降り駅前通してもらうビラ
定員を守らぬ如月エレベーター
喝采を浴びる紙治の頬かむり
信貴山もうつらうつらの春がすみ
二月はやチョコレートから雛あられ

大阪市　江城修史

生きるだけ生きよう二つとない命
渇く街逢いたい絆を遠くする
生き別れ死に別れての幾山河
生かされている喜びって何だろう
ちぎれ雲故里捨てたわけじゃない

豊中市　安藤寿美子

夕雀　通天閣が灯される

遠景に塔　白梅が咲いている
妻死ぬな先へ死ぬなと勝手なり
お見舞にミンクのコートは嵩だかし
食物は一人で食べるものでない

西宮市　門谷たず子

嫁姑スープのさめる時もある
そんな日がすこしまぶしい珈琲館
こちらから電話をしたら負けそうで
結婚記念日毎年届く蘭の鉢
新築の子の家に寝て落着かず

島根県　小砂白汀

ペルシャ湾ハイテク兵器の試験場
せめて君耳鳴りぐらい聴かせてよ
総くずれドミノは詩篇持たざりき
演壇へ衿を正して鉢の松
虎落笛吹いてくれるな築地松

玉野市　小谷仙山

私にはわたしの絵がある詩がある
含蓄と言う結末でだまされる
余命まだ明日あしたと石を積む
凡夫婦猫七匹がつきまとい
余りもの位で猫も承知せず

連作「酒の記録」

岸和田市　福浦勝晴

ああ酒酒何度失態しても酒
酒に呑まれるなとは酒に書いてない
自販機で充電のようワンカップ
雨シトシト酒をこころの妻として
酔うほどに本音を出してほっとかれ

西条市　片上明水

戦争のニュースへ黙る老夫婦
後ろから歩けば前に叱られる
ポケットの拳が堅くなる話
上り線ばかりでみかん積出され
カルチャーと釣りに分かれて夫婦出る

奈良市　天正千梢

ペンがすべり背のびしてしまい
等身大の自分を出したくて
母子の対話「勉強しなさい」の続発で
失恋の歳月ちょっぴり哲学者
賢く見せたくて重箱の隅つついてる

東大阪市　森下愛諭

もう開く桜へとどく春霞
満開の桜へジャンプする若さ
雪の日は鹿も焚火へ寄って来る
重い程歳を背負って日向ぼこ
豊作の案山子は派手な服を着る

堺市　高橋千万子

鬼に舌抜かれる程のウソをつき
薄化粧　梅一りんが開きかけ
旧正の仕事　立春という暦
裏　表　上下　左右を紙にきく

流行に縁ない我が家はやり風邪
松江市　柳楽鶴丸

国会はあいまいな言葉の殿堂で
空財布雪しんしんと降っている
真っ白い雪が童謡の中で降る
日本は打出の小槌でありません
片仮名語新語珍語流行語
宇部市　平田実男

権利より義務嫁の手が温かい
拝まれて貸しておがんで貰って来
開発は怖し過疎化はなお怖し
恥も言う口八丁で憎めない
ずる休み同士気付かぬ振りをする
倉吉市　渡辺独歩

幸せのリボンを用意致さねば
流し目という妖術に弱かった
赤紙が来そうな風だ戸を閉める
流出の油　地球の喉に巻く
長寿国　新聞活字太らせる
加古川市　吐田公一

父を越す歩幅に少し期待もつ
童心がそのまま残る父の詩
間を置いた叱り上手な母のコツ
座りだこ母はまだまだ明治の気
大志抱く絵馬は風雨に耐えている
柳井市　弘津柳慶

戦争のニュースで一日暮れかかり
騒がしい世間に墓場静かなり
年とらぬままに遺影の笑い顔
大臣の資産真面目に受け取らず
大風呂敷ひろげて話がはずんでる
神戸市　中村ゆきを

行間を読む花びらが添えてあり
人手難手足あるから採ってくれ
総会でうちにも解任したい人
あまりにも似てはるついに噴き出した
占いに行く妻神社で手をあわせ
富山市　舟渡杏花

唯一の芸ウソとホントを差し替える
手切金しぶる男の飯を炊く
更に念押され抗う曲り角
美しい波紋へ溺れてみたくなる
深なさけから脱出のまっしぐら
奈良県　上田翠光

まだ燃える情熱があり喜寿近し
内助の功勲記は妻の手に貰い
点滴の滴の先にある命
胃三分残して余命たくしとく
手術四度金婚式へたどりつき
島根県　西村早苗

ベランダで苗育ててる野菜好き
やり直しして見なさいと風が押す

出来心ではすまされぬ猫の恋
学歴に触れることなく二度の職
見送りは三毛にまかせた口げんか

大阪市　津守柳伸

青い鳥探す六十路の身繕い
還暦を祝う童女のきれいな目
むりするな無理をするなと居職の灯
海岸線走る南紀の早い春
働いた分豪遊も中くらい

守口市　羽原静歩

第九条　難攻不落の城であれ

幼稚園（二句）

入園式ワンマンショーの母ばかり
ブランコもジャングルジムも春の風
地球にも運命線がありそうで
水車コトコト企みなどはなし

唐津市　田口虹汀

西暦で建国祭という暦
まだ役に立ってますよと鯨尺
母に似た雲と親父に似た雲と
花嫁が舟で来そうな今日の雲
遠くから人が観てます鏡山

唐津市　久保正敏

唇づけをしてから女のもろい壁
ジイチャンはナウイと五歳に褒められる
子離れが済むと亭主がへばりつく
ねずみ取り歳入達成して終る
ミサイルも女も落すテクニック

唐津市　仁部四郎

数えられたくない羊やはりいる
純毛の手編みが愛のプレリュード
大社長夫婦そろって未年
名僧はただ偶然の未年
長寿国　迷う羊の数がふえ

唐津市　浜本ちよ

何にも言わぬずるい息子に裁かれる
三下り半現今は女が書いて去り
薬のみに頼り暴飲続ける愚
目が見えぬと言いつ手術怖れてる
ほどほどに呑んだ夫の御仏顔（ほとけ）

米子市　石垣花子

追いついた辻から石の道つづく
白足袋にアイロン利かせ一周忌
戒壇の位牌絆の香煙にむせ
包むもの包めば本堂暖かい
喪の帯を解いて立春むかえます

米子市　菅井とも子

手のひらに載せて一匹蟹をよる
丸見えの窓でカーテンしてあげる
陽の当る坂で転げてばかりいる
途中までは楽に登れた父の梯子
帰らない覚悟でくにの墓移す

米子市　田中亜弥

膝笑う坂はまだまだ続くなり
おもちゃ屋の窓にバンビが跳ねている
偶然の糸を引くのは神さまか
あせっても身動きとれぬ歳となり
次の世へ椿あっさり落ちてやり

米子市　野坂なみ

一つずつ花屋がふえて春の辻
大正へやっと出番の資源保護
一人占め大事なものが逃げてゆく
善人で小さな悪に憧れる
峠こえた辺り仲裁待っている

米子市　政岡日枝子

凄い夢持っているので突っ走る
術を使って人形の心盗ってくる
腹の虫おさまらなくてガラス拭く
世渡りの術なりバラを切り落とす
もう何も入っていない旅カバン

米子市　沢田千春

椿ふくらむ亡父が案じて来てくれる
横糸のもつれがとけぬ冬の雨
皿二つ揃えて心安らぎぬ
ふところに秘密を抱いて橋渡る
一眠りすれば流れも変わるだろ

大阪市　黒田真砂

未だ少し生きねばならぬ朝の米
コーヒーがうまい定休日の喫茶
振り向けば夫いる安堵冬の月
反論はすまい二人の夕の膳
ボランティアの笑顔が温い車椅子

和歌山市　内芝登志代

目出度い色歓びのいろ赤が好き
正直に書くのに勇気いる日記
老いてなお子に頼られる母でいる
神様から可愛いえくぼ授けられ
知った顔一人もいない人の波

寝屋川市　柴田英壬子

すんなりと着る老境の鮫小紋
退屈な夫婦の居間に猫が居る
弁当箱まだ働ける市民税
花冷えの町でただ逢うだけの恋
春一番だったそうだナのっぺ汁

和歌山市　松原寿子

句に逃げて本音で衝いてみるもよし
名文句うかばぬままに髪を梳く
落し蓋なれど個性は崩さない
微かな隙あたえるゆとり持っている
魚座から夢おおらかに降ってくる

奈良県　田中紀美代

火葬場が新築なるまで生き抜こう
ほっとして膝がゆるんでいた車中
母さんのオペラ　舞台は台所

オペラ観て大きなしぐさ二三日
千両も万両も伸び円が無い　高知県　赤川菊野

おれに似よおれに似るなとランドセル
落人の歴史を語る千枚田
平和呆け他人の痛みを忘れさせ
定食のような男でもの足らず
人生も二毛作時代になるこわさ　西宮市　奥田みつ子

ビール一本黙って添えた仲直り
挫折して声なき声に耳すます
負けた目に山茶花の白淋しすぎ
母よりはうまく出来ないにぎり飯
癌だとは思いたくない胃をさする　八尾市　高杉千歩

春のおんなと五色豆買いにいこ
春眠を貪るちぐはぐ老いの膳
身内では出世頭という名刺
どこにでもある名産に迷わされ
祖母馬鹿を自認編針眠らない　大和高田市　岸本豊平次

湾岸戦争　大本営を思い出す
裏道を歩けば温い風に逢う
大根炊きうちの鍋では出せぬ味
子育ての苦労も忘れ孫の世話
紀元節　畝傍の松に甦る　高石市　浅野房子

意地張った私ばかりを攻める風
鉾おさめ黙って猫を抱いている
一泊の旅へ山程家事こなす
人質の目に故郷の山河あり
唐突に女を変えたある事情　大阪市　大塚節子

はんなりと黒みすにのる成駒屋
人質は必ず助かるサスペンス
痩身で癌と闘うただ寡黙
看取る人看取られる人夫婦です
梅が香に木瓜ひっそりと裁判所　箕面市　坪田紅葉

七草がゆ福寿草も開きかけ
新築の田舎の駅のしめかざり
もめたけどまだ脈があり鍋かこむ
句の友は深いきずなの上にいる
松のみどり父のおはこに膝そろえ　姫路市　大原葉香

回転いすきしみ決断まだつかぬ
神さまの死角で生きる車いす
一円貨拾う気になる消費税
はりつけの刑にされてる蛸日干し
一点がとれぬドラマに酔う野球　姫路市　丁坪サワ子

均等法男のエプロン歎く姑

訪う人も電話も嫁となって冬
振込みのサラリー威厳また殺がれ
伯母訪えば傘寿とみえぬ貌の艶
ここだけの話へ乗って火傷する

姫路市　中塚遊峰

老大院卒へ孤独の影がしのびよる
クラス会ジュースの端唄見直され
カプセルと錠剤四色待つ食後
自認した脇役目立つ紅生姜
旅立った後から祝う叙位叙勲

和歌山市　桜井千秀

ゼロの数小声で読んで後ずさり
ただ拍手するだけの席最後まで
くすんだら旗手の役目がつとまらぬ
シナリオをからりと変えた春嵐
春風邪に物憂いままの昼下がり

和歌山市　木本朱夏

淋しさに茶碗ひとつを買い替える
立春大吉北向きの窓開け放つ
愛別離苦椿は覚悟して燃える
謀りごと好きな真赤な靴がある
もう誰も待ってはいない橋の上

和歌山市　福井桂香

虹に会い雪景色に逢い旅たのし
赤い橋だから渡ってみたくなる
わたくしの足音冬の美術館
予感的中　腐っていたメロン
まず頭下げて勝ったなと思う

島根県　榊原秀子

くじ運のいい子がうちにひとりいる
ストッキングひっぱる小さい爪の傷
美しい手つき意識のみかんむく
節分祭私も春へ向く構え
一芸のないこととてもつらいこと

島根県　栂みどり

バレンタイン亡夫に供えるチョコを買う
受験部屋　静かに苺おいて来る
旅話し楽しくつまむ五色豆
娘にゆずる指輪私のドラマ秘め
立春へまだまだ若い気髪を染め

有田市　松井かなめ

言い勝ってあと味悪く朝むかえ
家計簿に明細　額に嘘もあり
椿と木瓜で冬枯れの庭引立てる
いらいらも悔しさも捨て有田川
五欲の中で食欲だけが残ってる

京都市　松川芳子

身だしなみ程度は夫目をつむり
子の影を見失わずについて行く
片隅で孤独の鬼を飼うている
思い出の写真ふつふつたぎるもの
思い出の鍵を沢山ふところに

羽曳野市　吉川寿美

身の裡に仏と鬼が同居する
子離れの十指広げてつくづくと
神さまにもらった嬉し涙です
箸箱で何時も律儀な夫婦箸
叱ってくれる人がまだいる掌(たなごころ)

羽曳野市　榎本吐来

テレビを前にここにもアラブ通二人
脇役が嫌いな奴と居る疲れ
水撒いてリッチな昼の月といる
朝を発つしがないドラマ追うバイク
春愁や言うより言わぬ方を撰る

尼崎市　奥山美智子

ため息の出そうな話目が醒める
冗談を本気にされてくる怖さ
予期できぬ人生ゲーム面白い
待つ人を待って港がたそがれる
慎ましく一輪ざしが活けてある

神戸市　山口美穂

つめたさが衿から入る冬陽落つ
バーゲンセールなぜかいそいそと出かけ
春一番　夢を運んで紅梅も咲く
佗助の一輪茶室にある気品
本心ではない相槌をうっている

松原市　小池しげお

正解であったと思う帽子掛け
高笑いして反撃を鈍らせる
裏長屋いい職人が住んでいる
息子より若い巡査に叱られて
思い切り幹事の靴を蹴ってくる

羽曳野市　田中透太

乗越しの切符を持った春の駅
手の届く所においてある情け
お茶だけで別れたくない人と居る
鍵握る女が裏で待っている
六感の冴えた女が横に居る

鳥取県　林露杖

春立つやわが誕生日凡々と
春立つ日頭が痛い花粉症
ゴルバチョフ日本の花見予約する
枯木立みの虫揺れるイヤリング
戦力を試したかろうに自衛隊

七尾市　松高秀峰

諦めて切腹の刑受ける父
下手な嘘正直者とすぐわかる
ローソクを灯すと仏壇らしくなる
人脈も金脈もなく散る男
負け越しの四十四年の職を退く

堺市　楊井二南

以下同文では褒められた甲斐が無い
席順にこだわりの有る役どころ
上役の頭ごなしは案の定

転嫁する相手が欲しいスキャンダル
大袈裟に言わねば前兆らしくない　宝塚市　丸山よし津

短命と易者に言われ喜寿祝い
来る者ににっこり春の自動ドア
戦雲に世界地図張る子供部屋
突然の訃報喪服のたたみ皺
言い訳をする程人は気にしてぬ　和歌山市　内田結実

球根を抱いて冬越えする火鉢
雪のせいでしょうか嘘が美しい
月並みのくどき文句に酔う朧
ゆっくりと闇濃くなってくる別れ
おんなですもの焦がれもしよう辻が花　岸和田市　岩佐ダン吉

湾岸戦争を怒る

終章も戦火で飾る二十世紀
軍事評論家が跋こする世は悲しいね
ガスマスクの売れる地球はさみしいね
いいかげん止めろとアラーもキリストも
油まみれの鵜の目何やら言うてます　大阪市　神夏磯典子

カラオケのようにはゆかぬ花見酒
五色豆　暗い話は出来ませぬ
間を置かず返答をした真実味
どっかりと腰据えてきた女紋

目標を達したあとに油断する　八尾市　宮崎シマ子

善人の内緒の声が高すぎる
噛みしめる電車の中にいる孤独
内縁にはあらず別姓夫婦です
食減って明日の米はいつも有る
ねぎ坊主冬の油断の間にのびて　八尾市　鷲見章

君が代にまだ気を付けの癖残る
信徒にはあらずクルスのイヤリング
塾の子にタイマー合わす炊飯器
ボール箱仕切って妻と常備薬
寝酒一合羊数える事もなく　大阪市　北勝美

諦誉勝道授かり煩悩断ち切れず
瓔珞をつけず裸足の如来にある悟り
建国記念日春一番の吹く嵐
借地法変り借家住いにある不安
二上山万葉人の見た夕日　守口市　野呂右近

春は老いにもポンポコリンを口ずさむ
正論を吐いてひとときの肩落とし
旱天に慈雨にも似たる電話聞く
当りさわり無い返事して妻は編む
いい朝だが何所かで戦人が死ぬ

偶然の一致を縁とも思い
戦争はすでに忘れた団子汁
トンネルを抜けるときっと春景色
ジレンマの中で見つけた突破口
可能性秘め少年の荒けずり

竹原市　森井菁居

二ん月が逃げるここらで妥協する
雑魚だから網を洩れても気付かない
わたしより上手に着こなす同じ服
裏を読むことにも長じ四面楚歌
今一つ成果上がらぬダイエット

出雲市　園山多賀子

行き先を聞いて下さる人がいる
暖かい言葉に風邪をひきそうだ
ジェット音消えたところに立ちつくす
背負った荷の重さを人とみくらべる
しがらみを解けば淋しくなってくる

島根県　松本文子

春ごよみわたくしだけの予定表
雪しんしんサービスシール貼ってます
花かんざしかごめの輪からぬけられず
すごろくの振り出しばかりの目に出会う
水面下いつか暴徒となるだろう

出雲市　吉岡きみえ

日めくりの後から春が従いてくる

香川県　松村迷観子

旬の字がゆっくり座る席がない
右翼でも左翼でもない初日の出
美男美女だけが倖せとも言えず
肩書の方へ笑顔を向けておく

岡山県　荻野鮫虎狼

強引な葱で途中が折れて居る
退院日看護婦の顔皆奇麗
熟年の知恵発言を後にする
一生を軍手で通し娘が育ち
ボイラーマン元機関士という誇り

岡山市　井上柳五郎

野暮でない聞き捨てならぬアンケート
注意書き飲んだ後から読むくすり
底抜けに明るい方が不眠症
老化だと聞いても病気だと思い
欲深い年金貰いまだ勤め

和泉市　西岡洛酔

ポンポコリン平成の世を踊り出る
愚痴ひとつ神の試練と聞きゃ軽し
背の筋を伸ばして六十路の音を聞く
朝霜に生きがいを見る歩の軽さ
各停の隅に座っている安堵

河内長野市　井上喜酔

故郷を離れて育つ伸び盛り
蠟梅の香り静かな早春賦
無器用で嘘の言えないお人好し

楽になるはずが色々ありまして
切り札へ寝耳に水と肩すかし

和歌山市　垂井千寿子

○×で私の本性さらけ出す
三文の得に出合った軽い汗
コケットな妖精潜む髪の艶
淋しさと気楽さもろて代替り
雛壇の前を通った聴診器

大阪府　坂口公子

勲章が何　亡兄の青春真っぷたつ
聖戦をうたい文句の鬼子母神
兎に角に追い越して見る好奇心
はげしくて直ぐ白黒をつけたがる
叱られて脈があったと言う安堵

倉吉市　渡辺菩句

人格をころりと変える北の風
外は冬甘たれ猫の抱かれ癖
これは嘘バックミラーの中の雹
こがらしがうら声で歌っているぞ
年末の診察を待つ立って待つ

岸和田市　芳地狸村

梅の道まっすぐ登る神まいり
神於山季節外れで二人きり
絵馬札にパチンコ好きと書く乙女
殿様の墓が淋しい彼岸花
猫四匹住むからゆけぬ母の部屋

弘前市　真喜内實

この人のよいところだけ見てみよう
かげひなたなくおめでたくなってます
忘れてた蓋はだまってしておこう
靴下の穴ストレスの逃げる道
ひがんでる頬は両手に包むべし

奈良県　長谷川春蘭

飽食の世を焼芋のよく売れて
ホッチキス冷たき肌も冬ながら
日向ぼこ何か半端の日曜日
音もなく降る雪に大根煮えている
偏屈を通すも生甲斐　河豚料理

堺市　柿花紀美女

波立てぬ余生へ反旗もう振らぬ
寒風に耐えてる老いの葱畑
期待した天声人語も揺れている
動き出した街にぼんやり昼の月
書きぞめに「平和な国」と子等祈り

岸和田市　島崎冨志子

ドアチェーン掛けたまんまで粘られる
上席で気疲ればかりで食べ終る
目も耳も達者身体が冬眠す
同居する娘夫婦で羨まれ
計算に強いが余命など読めず

西宮市　西口いわゑ

水仙のやさしさと居る外科医院

幼稚園宝を見せて仲なおり
何もかも許したくなる夕日なり
雨の音と静かに本を読んでいる
留袖の手前しずしず飲んでいる

町田市　竹内紫錆

訃報まで同じ写真で社内報
日程をひと月延ばす風邪情報
シルバーパス余生の足を鍛えつつ
開戦は女性通訳にも試練
社宅ありき　夫人ら帯を結び合う

寝屋川市　平松かすみ

いい人へ高野豆腐を煮含める
ありがとう二人三脚した月日
奥様のやさしい手編み着て傘寿
受話器からだまされそうな声の艶
タイムカプセル開ける楽しみだけでよし

出雲市　小白金房子

会いたくて心がわりの回り道
三姉妹個性を生かす絵の具皿
牛の糞運ぶ嫁御の赤い頬
親の胸かりて元朝四股を踏む（身内より高田川部屋へ）
子の門出トンビ大きく輪をかいた

守口市　森川まさお

一個所でとまる聴診器の寒さ
葬式に行って日当りすすめられ
蓑虫や女が見に行く武家屋敷
竹林の冬は素描のように見え
寒の水　父の大きな喉仏

高知市　北川竹萌

陽の温み包む寝床がありがたい
深く剪り柿若返らすも一苦労
海軍の毎朝剃りで八十も尚
句を読んで逢うたことない思う顔
梅褒めてもらい熱燗一つ出す

富田林市　松本今日子

企んだ私がいない車座に
寝たきりになるかも知れぬベッド買う
席ゆずる　母を見舞に行く車中
取られると無念と思う札がある
婚礼の荷出すおとなり人が死ぬ

和歌山市　青枝鉄治

母さんの温みが残る走り書き
はやり風邪だけは素早くもろてくる
堂々とマンガ読んでる合格日
講演のメモ見つからぬ五分前
寒行の僧には派手な猫の恋

大阪市　桝本蕗児

いさぎよく散るは男の妄想だ
オトナの論理ナァナァで済ましとく
一葉忌今更ながら女とは
裏長屋住めば人間好きになる
嘘ついて肩がだんだん重くなる

豊中市　一瀬福一

昭和かと聞かれ大正の顔笑い
砲弾のように寒鰤並ぶ市
死にたいと言いつつ飯は三度食い
下手な字でうどん値上げと書いてある
理想論言っては居れぬ年になり

鳥取県　谷口次男

この頃は山という山削る癖
のほほんとしているようで耳は利く
懐かしや中年太りのタコ焼屋
ゴキブリを真似て体操しています
肝心なことは言わずにおいとまし

和歌山市　岩崎瑞穂

風邪引いて十日戎が初詣
石段へ振り袖なびく初詣
風邪気味へ妻の嬉しい吉野葛
デートから帰り風邪ひきこじらせる
卵酒楽しむ程の風邪をひき

出雲市　板垣夢酔

言うだけは言ったぞ後は嵐待つ
おおらかな気分に金がしてくれる
この俺に聞かすつもりで猫に言い
いまにみろ自立出来たら離婚する
別れたい別れられないのも事実

出雲市　小玉満江

藍染めの水が冷たい高瀬川
夕陽背に島の仏の顔やさし
囲炉裏火を消せば出て来る雪女
紀子さまも微笑み給う緋もうせん
十二月だけ手伝うと皿洗い

鳥取県　江原とみお

福袋買いにでたまま帰らない
裏通りで裏のはなしを聞いてきた
思惑があるから敬語使ってます
表向きの貌しかみせぬ和尚さん
冬夕焼溺れてみたくなってきた

大阪市　井上白峰

乾杯のあと物足らぬ紙コップ
自立の芽過保護の親が摘んでいる
自惚れが自己採点に蹴躓く
意地張って退く潮時を見失う
温泉の湯よりやっぱり我が家の灯

海南市　三宅保州

葬式でひとり笑っている故人
健康のために歩いて医者通い
戦友の輪が会うたびに小さなる
正論は丸い器に納まらぬ
角のある石にも使い道がある

岸和田市　高須賀金太

退職を考えだした窓の月
同情はいや痩せてても男です
絹糸も通してみたい木綿針

春雨に濡れて湾岸ふと思い
隣国のうわさを乗せてきた黄砂

静岡県　薗田　獏沓

温泉の火山列島旅をする
誕生日孫が歩いて餅を搗く
冬物のバーゲンセール春近し
水量が増し川霧の古に戻る
約束を果せど月の寒い道

和歌山市　山田高夫

傍にいる妻が一番騙しよい
合掌で終るページを埋めてゆく
おふくろの味で家風のなめこめし
平和論　一歩進んで二歩下る
石女の妻満ち足りぬもの一つ

静岡市　安本晃授

切り札を信じ過ぎてた手の驕り
やわらかい台詞の中にある小骨
ことさらに幸せと書く春日記
うかつにも吐いた本音が舞いもどる
幸せを孵化する神の尊い掌

松江市　竹内すみこ

躓いて人の情けの裏表
銀行はぬくし税金納める日
標的にされたと気付く冬の薔薇
指輪のない指ころころと白々と
やり直しまだまだ出来る路の臺

守口市　結城君子

波はうつり気　昨日の風は意にとめぬ
展望台　他人のような大阪に
桃子のおねがいなんて今更言えますか
太陽のしっぺ返しを恐るべし

京都市　山本規不風

悲鳴だなおやおや俺の咽喉仏
馬酔木咲く忘れし恋を喜寿の坂
約束が延びて短い爪を切る
バレンタイン婆ちゃん薬と間違える

堺市　藤井一二三

バレンタインのチョコへ素直にありがとう
すぐには直りませんと五十肩へ医師
漢方薬を提げて友情見舞われる
犬とパン分け合い朝の箸を置く

岡山県　川端柳子

心からお慕い申し住む辺鄙
父さんもまーるくなれよ世の移り
いみじくもも一つの貌見てしまい
もう四月痛いとこ痛いとことんでいけ

神戸市　仲どんたく

頭蓋骨あらわに撫でている八十路
お迎えが近くなったを笑い合い
好況の裏には不況のかくし味
地球儀をまわせば煙たつ歴史

風は女　洗濯物に八つ当り
傘寿ですテレビ見てます美容術
うす化粧せめてきれいに終りたい
外は寒雀よゆっくり寝るがいい

寝屋川市　宮尾あいき

極楽にまだ憧れる齢でない
逝くときは妻よ誘うていいだろか
子の巣立ち妻よ膝栗毛とゆこう
長男離婚さっぱりとした顔してる

呉市　槇田英詩

忠犬は慰安日もなくて主を守り
再会は六十年目の語り合い
若き日の面影も消えて萎みけり
難聴の友の多くて声かれる

姫路市　人見翠記

元気だと今日も一日面白い
嫌や嫌やと言うだけ目は惚れている
血を辿る昔ダービー取った父
医長も冗談言うて注射打つ

大阪市　寺井東雲

春風に心許した花粉症
心経も十人十色の声で和す
おじいちゃん孫嫁からのチョコレート
友見舞う帰りは足も気も軽く

岸和田市　原さよ子

子や孫に書きとめて置くあれやこれ
私を迎え小鳥が来て歌い
講演会昨日だったかボケ進む
寄ればすぐ故事の出てくる時鳥

岡山県　二宗吟平

朝の皿割って弛みを引きしめる
惚けてから風邪もひかなくなりまして
野良犬に吠えたてられている気持ち
這いまわる虫は蹟くこともない

和歌山市　若宮武雄

バイパスが山と海から攻めてくる
石一つ名護屋飛脚の墓碑と訊く
人生へ愛着今日も薬飲む
言葉など要らぬ夫婦の眼の動き

唐津市　浜本義美

万歩計　氏神様へ初詣
空白のページが続く日記帳
まずまずの一日でした日記帳
年甲斐もなく茶柱へはずんでる

東大阪市　崎山美子

裏表知った男が走り出し
芸達者目薬でない涙みせ
ニュース聞き常識おくれ知った俺
叱られたうらみ忘れて囲む会

加賀市　細呂木魯木

大田市　藤田軒太楼

いい顔が出来て茶の間を春にする
厚着して冬場の街ゆく老いみじめ
とまどいはあるが派手さに手を通す
馥郁と古梅の香り展示会

貝塚市　行天千代

父母の年齢はるかに越えて我は生き
万歩計付けて医者からデパートへ
補聴器へ一ばん苦手でんわ鳴る
老人会休めば病気かたずねられ

静岡市　渥美弧秀

点滴の友は知るまい宿る癌
暁の思考暮しのヒント生む
流れ雲逝った姉弟へ数珠の冷え
夫婦の樹余命ふくらむ趣味に生き

仙台市　川村映輝

妻も子もいるから勤続賞うける
寿命のび国の重荷になるばかり
春近し花粉症に怯えてる
贅沢は公害を生み罪を生む

和歌山市　細川稚代

勧誘員鉢の一つも賞めて去に
騙されてだまして暮す虫がいる
ワンテンポ遅れる癖がまだとれぬ
立春へまだまだ解けぬ結び文

和歌山県　天満三千代

寺参り口実つくる旅が好き
梅咲いて里の地蔵へゆく小径
七十年見様見真似で生きている
まとまらぬ思案眼鏡を拭いてみる

倉吉市　野中御前

愛してるよと夫にいわれたことがない
赤ワインわたしひとりの誕生日
残照のなかでひとりの飯を炊く
種あかしされても真似ができません

倉吉市　淡路ゆり子

決心がついて夜中に腹が減る
赤い傘忘れて帰る夫の客
ボケはじめ実家の井戸を恋しがり
嫁が来て隠密に事運ばれる

岸和田市　古野ひで

不自由な耳をつくろういい笑顔
ひと言が言えず大事な糸もつれ
ふぞろいのうちの林檎は親思い
一沫の淋しさ抱いて老いている

岸和田市　清野こう

節分の豆では追えぬ鬼がふえ
老いもまだ衣料の欲は捨て切れず
太っ腹話題に恩師の三回忌
細々と暮して寡婦の手内職

弘前市　小寺花峯

研修を終えた浴衣の旅気分

万歳をすると無防備指摘され
物言わぬ喧嘩が長びく倦怠期
目的がつかめぬままの胡桃割り

十和田市　斉藤　劦

送る歌もう飽きました村の橋
じゃっぱ汁囲みふるさとしています
仔牛売る話はよそう子の寝顔
雪だるま消えて一人の家になる

五所川原市　加藤　彩人

福寿草津軽の春へラッパ吹く
絢爛たる春ふところにある若さ
孫と行く山　太陽と歌がある
意地ひとつ秘めて二度目の首を売る

十和田市　阿部　進

美しく老いよと無理なこと言われ
いくつものハードル越えて古稀迎え
義理欠いた嫁が姑に諭される
耕耘機　嫁がこなくてすねて居る

黒石市　相馬　一花

露天風呂　隣の柿は美味しそう
金持になっても貧乏ゆすりする
占い師なぜ宝くじ買わないの
地獄耳わが町内に一人居る

豊中市　辻川　慶子

一言が多くて花が枯れてくる
鏡だけ私の心お見通し
週刊誌買ってわたしも旅人に
娘に負けずわたしも友と長電話

豊中市　吉田　あずき

踏み出せば空は茫々　海は洋々
初雪とわかって心ほぐれ出し
処女雪にわが足跡の不様なり
雪降って京都が京都らしくなり

米子市　川上　より子

葉の表葉の裏椿と冬過ごす
絆たしかめに行く髪洗い上げる

母急逝

つくし摘む約束忘れ逝き給う
場外ホームランのように母逝き給う

米子市　新　正子

あっさりと裸になれる僕の部屋
七癖があって僕だと言うあなた
裏口で太いしっぽを見てしまう
ふる里の土に生きたい種を蒔く

米子市　茂理　高代

夫の掌にのらなくなった老いた猫
あの場所が好きで見にゆく山桜
結び目を解けば野心見えてくる
石の心を動かす技術練ってみる

米子市　金山　夕子

弟よときどき背中押してくれ
落ちこむとぬくめてくれる兄がいる

名物の風に揉まれて逆上がり
ほっといて下さい高所恐怖症　米子市　小村てい子

慌てるとつくり笑いをして終う
流れ着く毬の初恋きいたげる
終章の絵には灯りをひとつ入れ
目の毒が好きで毒みる予定表　米子市　木村冨美子

傷むけど小さな秘密持ち歩く
酒の量へると体に気を使う
大切な時に勇気が出て来ない
一粒の麦が主張をゆずらない　米子市　白根ふみ

暖冬や厳しきものがみな失せる
一月の海　発狂の詩がある
白椿　雪に埋もれている本気
行きづまること恐れない鑿の先　出雲市　園山良子

仲人が帰ってくしゃみひどくなり
ついて来る味方は年金　影法師
出合いからもう温もりを分ち合い
喜びは旗日にあった幼い日　出雲市　久谷まこと

知らぬ顔するのもつらい義理がある
吉報を待ってる耳に風さわぐ
風便り女のさがが輪をひろげ
燃え尽きた養老院の車椅子　出雲市　石倉芙佐子

横笛に合わせて舞うて春うらら
女はもう千人針などさしはせぬ
深追いをしては渡れぬ川がある
気くばりが過ぎても隣すみにくい　出雲市　金村青湖

お湯しんしん茶の間は遅い父を待つ
指白く細く他人の距離にいる
春炬燵まだ強がりの父がいる
春が来て春の約束してしまう　出雲市　竹治ちかし

死にかけた話を持って生きている
時効にはならない罪を負って生き
眼をつむり貴方を一人じめにする
鯉の名を捨てれば跳ねることも出来　鳥取県　土橋はるお

高枕で賽銭の音聞いている
水車コトコト春告げ鳥が鳴いている
豆腐に鎹　母さんが打ちにくる
数字には弱いが銭は溜めている　鳥取県　津村八重子

ジャンプ傘短気なおれとうまが合い
老いらくの恋はほんのりあたたかい
白っぽい鳥にならぬようにする
恋しい女がシャンシャン傘の列にいた

鳥取県　さえき　やえ

春のコントを畑で毎日描いている
若い友と歩く背すじが伸びてくる
移し忘れたアロエに花が咲きました
反戦歌うたう広場の人となる

鳥取市　小谷　美っ千

傷ついた同士なさけを重ね合う
無に還る惑うことなき落ち椿
朝日好き夕日が好きよ生きている
恋をした乳房に邪念などはない

竹原市　信本　博子

始発ホーム罐コーヒーが暖かい
思い出の押し葉に残る春の彩
空気の重さへ寡黙春ごたつ
秘密の扉の前で鳴る土鈴

竹原市　岩本　笑子

顔だけがブランド品でない鏡
おしゃれとは別に私という匂い
画竜点晴　愛に生きている女
通過駅　裏口に咲く花である

竹原市　岡本　清水

苦の中に楽が産れる人生譜
なくなればそれそれなりの事が出来
生きている自分をいつか忘れかけ
蕗の薹　誰より先に春賛歌

島根県　藤原　鈴江

憎むこと知らないままに年をとり
黄水仙　小首かしげて陽を仰ぎ
寄せ書きに目出度く喜寿を戴きぬ
うたた春浮かれる心持ちあぐみ

島根県　松本　はるみ

とぼけよう貴方がそれでいいのなら
そうですよ歳はとっても女です
仮面には仮面のやさしさ花ごろも
青い空解答欄が見つからぬ

岡山県　山本　玉恵

泥舟に乗るお相手と茶をすする
問わず語りが土鍋の底にこげている
ときめきを覚えて眉を丸う画く
地下足袋がいち早く知る春の音

岡山県　千原　理瑛

飾られた人形春の夢を見る
食いはぐればかりしているあかんたれ
健気にも一寸の虫立ち向う
願望は決して捨てぬかたつむり

岡山県　松本　元江

反省をしては徒労をくり返す
本音吐く場所がないまま胃にためる
日だまりに皆んないい顔しています
物干しも華やぎ見せる新学期

岡山県　花田　たけ志

幸せは五重の塔が見える部屋

小学校以来の賀状が二枚ある
おのが敷くレールの曲りは気にならず
別姓になれば不倫が大手振る
大阪市　渡部さと美

春一番吹いて命ののびる音
格言の今日一日は守れそう
春眠をむさぼる黄金の褥
よく回るのははじかれた方の独楽
大阪市　北山悟郎

雑草の根性を僕も持ってます
些事ばかり夫婦の話題睦まじく
生きる道面子を大事に飾り度い
男なり命を賭ける修羅に生き
大阪市　岡田ふみ

役人上りの夫で待つこと馴らされる
心丸い夫でCM信じきり
おでんやで赤い気炎のおやじギャル
いつも母何かごそごそ探してる
大阪市　冨岡温子

張り合う気なくせば楽なおつきあい
テリトリー人間だって持って生き
言う程もない一日がまた暮れる
今だから亡母に挑戦し度い味
大阪市　塩田新一郎

引っ込めた一つの意地でみんな解け
もう春の作句か今朝の初氷

寂しさは左様ならから話しだし
極意発見　妻にはゴマをするとしよ
奈良県　中原比呂志

ここからは無口ひとりになる切符
目をそらすことは出来ない靴の位置
証明に役立つペーパードライバー
本当の値段はいくら日本橋
奈良市　米田恭昌

妻の檄磨いた靴が揃えられ
自己嫌悪　鏡を磨きすぎたかな
赴任地で寒々ときく雪の音
月の砂漠に戦車の響き無粋なり
吹田市　栗谷春子

一病に鬼よりこわい寒の風
蟷螂は斧のもろさをもう知った
買おうかと一瞬迷う石焼いも
誕生日お粥梅ぼしせんもなし
茨木市　堀良江

お目当てを入れてカメラはご機嫌さん
一瞬のざわめき開演五分前
よその子なら泣いてる気持よくわかる
白血球プラスと猫の尿検査
吹田市　井上照子

めぐり合い地酒と鍋で朝になる
誘いの手拒否はしませんでも年ね
告白はよそういい年笑われる

深刻な手紙へ返事機を逸す　和歌山市　坂部紀久子

絶景をこわすカラオケバス旅行
ただ笑うそんな哀しい時もある
錯覚を強いられいちご赤くなる
拍手される側で小さくなっている　和歌山市　田中輝子

末っ子に貸したタクトが戻らない
突き離す覚悟ができて貝になる
これからが大変だ娘よおめでとう
星になり風にもなって娘を離す　和歌山県　寺田裕美

春の川君と乗りたい笹の舟
尾が取れてやっと蛙の子は信じ
欲の手で握ると鍬が重くなる
地下足袋をはくと運命の土ふまず　唐津市　山口高明

作るのも早い壊れるのも早い
南極の氷浮べて乾杯し
岩に付く鬼の手形に掌を重ね
子の寝顔見つめて揺らぐ女の火　八尾市　山下美津留

白い花咲かせて柚子の佳い香り
古里は寒いが母のぬくい味
階段で足いやいやをして困り
最後まで下積みで居て和に生きる　羽咋市　三宅ろ亭

定連の一人が休み気を揉ませ
真っ直ぐに攻めると敵の視野に入る
フードピア会頭法被姿で食べ
天平の薹孔子と令名残り　高知県　小澤幸泉

カラオケの父は陽気で泣き虫で
終章がやっと書け出す共白髪
父親の小言いつでも酔っている
ある余生ゲートボールは振り向かず　川西市　松本ただし

ヤジロベー首をかしげた支援金
妻が居てくれると声が高くなる
魂の置き場と決めて出た故郷
渓流に咲けばひとしお冴える百合　広島県　藤解静風

横道に外れた話へ妻が来る
美しい恋だけにする吃水線
美しい声で言うから断れぬ
情のない夫でスタスタ先へ行く　富田林市　片岡智恵子

六十路には六十路に合うたネジを巻く
冬木立に砂色の月ひっかかる
是にもなり非にもなったりがん告知
まさに梅いち輪春の一歩くる

伊丹市　山崎君子

病床で入学祝待ってます
院長の回診を待つ薄化粧
叮嚀なおじぎが寒い花畠
花時計待っているのは兄ですよ

藤井寺市　福元みのる

子の作文母は出るけど父は出ぬ
神の名のいくさに神もまた迷う
学者博士だから呆けぬと限らない
老後より老いる以前にある不安

和泉市　岡井やすお

稼いでも稼いでも皆弾になり
ごきぶりは賢い殺し合いはせず
「君が代」を歌えぬ学校ある日本
3Kの仕事は中高年用に

西宮市　秋元てる

何時の間に貰う身分のポチ袋
喪主の席　足袋の白さに支えられ
水道がポタポタ「誰か居らんのか」
ヘイヘイホー与作に伐る木はあと僅か

寝屋川市　堀江光子

カレンダー新しくして同じ位置
温泉へつかりに寒いローカル線
拾い主分らぬ礼を投書欄
母を知る人の死をきく寂しい日

境港市　細木歳栄

白銀の雪さえ染める朝茜
雪ぞ降る春のあしたを待ちかねて
降りしきる雪よあなたとさようなら
仏頂面春の空には合いませぬ

今治市　野村京子

待つことに馴れて耐えてる火打ち石
手鏡に女の業をのぞかれる
罪ひとつ消えて行きそう花の寺
いいドラマでしたね今日の幕を引く

倉敷市　井上富子

他人妻とくじ運のいいバス旅行
何色の風に出逢うか赤い靴
年金の範囲でとんでいる蛙
マンションの塩瀬の帯が気にかかり

西宮市　瀬尾六郎太

入閣かもしやまさかでソワソワと
イラク戦評論評論はびこって
焼きつくす全ての悪を奈良の山

岡山県　岩道博友

愛の色質素な性がよく似合う
老いの足春風の中人を恋う
家庭菜園少し増やして夫婦独楽

岡山県　池田半仙

諺もアラブと日本大違い
まだ半分惚けてないのが救い
四十年医者と無縁の有難さ

大阪市　町田達子

ポンポコリン踊るはたちに呑まれてる
早春の雲間から聞く師のお声（弘生先生）
受験子へ祖母の気持もさわぎ出す

大阪市　清水利武

もうそこに春が来てます二月堂
役員の中にチャランポランが一人いる
雨後のように出て来た軍事評論家

大阪市　神保拓生

口論で勝ってはみたがまずい酒
毎日が日曜暇なループタイ
仏とも神とも思う白い杖

大阪市　橋元美恵

綾とりの大きな手から小さな手
泥んこの世代が終る痴呆症
悪役で通した父が懐しい

鳥取県　羽津川公乃

天気図のあちこち春が生まれてる
ささやかな還付に春の靴を選る
後継者決まらぬままに植林す

鳥取県　田村きみ子

三日月に恋のゲームを裁かれる
悪い評判たっても愛は離さない
ライバルに敬語を使う椅子がある

鳥取県　乾喜与志

減食に馴れない腹のさびしさよ
万歩計の道に凍った月残る
雑草の芽がたくましく勢ぞろい

鳥取県　幸家單車

影武者の呪文で辞令横に降る
お歳暮も無駄でなかった椅子の位置
熟年の恋が離婚を考える

豊中市　上田登志実

啓蟄だ旅行計画樹てようか
共稼ぎたまのデートは乙なもの
テレビつけ春の炬燵の昼寝よし

豊中市　江口明光

お祈りも爆撃もするアラブの掌
茶柱が立ったと今日は赤い靴
いい人が多いのに悪いのが目立つ

島根県　北川民子

衣脱いで坊さんいそいそパチンコ屋
青い空　雲の子供も遊んでいる
目の高さ変えればこだわることでなし

島根県　小田川智重子

右こ左べんしているうちに曲り角
キッチンに男が立つと狭くなる
三人の生活二人が咳をする

島根県　高野律子

いまに春　病の母を慰める
調法な口はきれいな嘘もつく
ああ平和炬燵の上で西瓜切る

守銭奴とまではゆかぬが金が好き　箕面市　椎江清芳
カルテ書く医者も咳する寒の入り
上げ底に鎮座している五色豆　弘前市　村田善保
発展の途上に置いてある踏み絵
発展の道へ妥協の無い闘志
耳鳴りの底で明日への鈴が鳴る　河内長野市　植村喜代
ご無沙汰は母に心配掛けぬよう
自分のことだけ考える程若くない
いいとこを見よう見ようと来たけれど　岸和田市　三輪通彦
逆境に育ちピンチに動じない
野心など持たぬ同士で仲が良い
糸切れたマリオネットになる余生　竹原市　石原淑子
気ばってもかすみ草はかすみ草
我が娘にはピアス反対論者です
ほのぼのと老母と二人の美術館　出雲市　河原恵美子
ホーホケキョ優柔不断でもないし
朝採りのトマトに似ている女がいる
春一番ゆるめたままのネクタイも　米子市　光井玲子
お茶漬けのリズム今更崩されぬ

善人で勇気ないのが玉にきず
妹の恋の相手が気にかかり　尼崎市　住谷石舟
金貯めて疑い深くなって老い
女ごころ計れるメジャーなら買おう
歓心を買う空振りが多すぎる　唐津市　筒井朴竜
幼な恋こころ交わしたさくら貝
大臣が出た記念碑の除幕式
夕凪で郵便船は離島着　諫早市　原田メイシュン
落選が雨で泣いてる顔写真
寄り道もたまにはしたい給料日
横道にそれて母の愛を知る　和歌山市　西口忠雄
中流の中だよ大ビン飲んでいる
腰低いばかりに母の背が曲る
すくな目に話す女に底がある　岡山県　直原七面山
妻と来て法話聞き
職辞して古稀迎え
生きる為に味方売り　堺市　荒川磯子
決めといて父が門限守らない
優しさと人情ばなし薄くなり
たんぽぽも陽気につられ顔を出し

自選集

過去形で話して心のぞかせる
戯れに言った例えを覚えられ
ミサイルへ落石注意では済まず
喉元をすぎ泥沼とは知っている
伏線のある言葉だと心得る

正本水客

一散に走って戻る児の使い
過疎の駅空いっぱいの碧さかな
草も木も生き生き僕も旅仕度
キッスした妻は冥土へ行ったきり
老婦人と話がはずむ露天風呂

黒川紫香

お立ち酒　丹波篠山　ヒゲの無鬼
和の色紙双楽さんの悲願なり
おとこはんですか潮花のおんな舞
編集後記で和子さんから来たかしわ
白い杖あの世の闇を斬る亜鈍

高杉鬼遊

酌ぐだけで一つも芸のない男
クラス会愚痴言う人に変ってた
学歴はないが庶務課の生字引
飼い主の歩幅盲導犬が知る
肩の凝る人と別れた戎橋

辻白渓子

心とも住んでにっぽんこくという
鶯と梅のえくぼと春淡く
横顔に妻のドラマをたしかめる
追伸で母上さまという無心
すがる手を払う力を抜いている

水粉千翁

時々は一心寺に居る父母に会う
突然の便りにとまどうことも無い
冬越してセーター出来て妻の春
気まぐれは夫婦で茶づけで済ます昼
政治家の勝手で馬鹿にされたまま

児島与呂志

戦況画像　大本営はワシントン
四十年抱く爆弾の吐けどころ
日本へご主人さまが無理をいう
国連で金を出す時物が言え
アメリカのフィルターごしに見るテレビ

大矢十郎

泣いているかもゴルビーの平和賞
「聖戦」はどこかの国もやりました
初めからみな「分からない」アンケート
朝夕に四弘誓願を読みは読み
すばらしい夢をもったいなく忘れ

工藤甲吉

裏切ってからひょっとこの面冠る
報われぬ文士消ゴム酷使する
子が叛く部下が従う訳がない
寝たきりも併せた平均寿命です
回り道したので逢った蕗の薹

月原宵明

ポケットの握り拳は悔いだろう
夜汽車コトコト行方知れずの影法師
私の名を軽くしたのは藁の馬
ひとり泣く女の傷は深くなる
生かされる私と動いている空気

岩本雀踊子

ほんの少し春をちらして今朝の粥
椿のふくらみをよすがに冬を越す
衣擦れの音はひそかに訪う春か
春は浅くして気管支にはまだ届かない
桜通りも椿通りも行きどまり

八木千代

朝に祈り夕べに祈って母卒寿
古鏡に似て水仙の黄いが好き
ベレー帽被るたんびに見る鏡
艶のでるとこまでもたぬ夫婦箸
愛鳥の声鮮やかにテープ蘇る

松川杜的

仕事への情熱川柳と共に生く
人間味忘れ平和におぼれてる
夢多きわたし歳の事忘れ
口止めをしたのに妻のお人好し
さくら咲くぱっと酔いたい花吹雪

藤井明朗

西方浄土ひとり旅立つ娘をおくる
骨壺の短い袢を抱きしめる
娘を偲ぶ涸れて溢れる涙壺
合掌の涙へ遺影明かるすぎ
溜め涙窓を開いてからこぼし

藤村〆女

水泡になってもなっても善意積み
一輪の梅が茶席を春にする
婆ちゃんの財布は孫らにねらわれる
無作法なとこが取柄で親しまれ
滝の音に磨き抜かれた石の艶

本田恵二朗

北風になかなか進まぬ車椅子
後遺症は右　神経痛は左足
しばらくの余寒に耐える後遺症
言い訳を考えておく盗み酒
選挙戦わが家にも来た怪文書

野田素身郎

つるし柿どの子も街へ出たまんま
ふる里の山河恋しい土踏まず
熱帯魚太鼓が鳴ると躍りそう
ひまわりが回る地球が回ってる
日の丸が揚がると風が起きて来る

遠山可住

押し迫る老化に負けず押し返す
もうすぐの八十路へ足を鍛えとこ
挨拶にいつも風邪ひきなはんなや
リズムが違い聞きとれぬ老いの耳
ばか正直な鏡が深い皺を見せ

金井文秋

春帽子遠くミサイル飛び交わす
毒気抜かれて戦のテレビ面白し
放心の因は戦と癇の虫
戦場へ征くな来るなと白昼夢
過去を問う生命拾うた俺が問う

野村太茂津

ふんわりと僕を包んだ師の教え
気に染まぬはなし瞼が重くなる
焦っても地球の自転とめられぬ
この歳でドンキホーテにもなれず
脳みそを詰めこむ襞はまだ残り

久家代仕男

レコードの空転そんな日が暮れる
男には美味いが女に苦い酒
或る時は罪をかくしてくれる雪
雪と住み雪の温さを知っている
鉄鉢の雪がとけない般若経

有働芳仙

確執がとけぬ二月の吹き溜り
葛藤がよじれよじれてゆく髪ぞ
不死鳥のように目覚めてゆく軍歌
兄弟の深い澱みの中にいる
作務衣着て在家得度をしてみたし

波多野五楽庵

年一度ゆく税務署へ靴みがく
悪い芽も春風待って伸びはじめ
朝ぶろと朝酒旅の夢に盛る
酒買いに走った過去もある内助
大学へ行かせる資金繰りをする

小林由多香

幸せも不幸も母に繋がらぬ
母は今夜も小銭数えてから眠る
ぽつねんと母が待つのはなんだろう
女同士ではないか　母よ
予定表母をこころの隅に置き

小出智子

黄色一面行く秋おしむ詩をつづる（第22回日展を見て）
月が出ていよいよ黒い森の影
丹頂二羽バックは希望をそえる色
雪に耐える山は一筋立つ煙
春の海に居眠りしてるような船

阿萬萬的

旅人へ突如夕陽が罷り出る
風も念仏石も念仏恐山
いちまいの旅信が持っている炎
翔ぶためにわたしを整理しています
肚からの友とわがまま許し合う

河内天笑

春一番吹いて寒波を呼び戻し
惜しまれて去るとは馘のことかいな
金借りてからはプッツリ来なくなり
すぐ倍になるよな口で借りに来る
粗供養のテレカ故人へかかるかな

西田柳宏子

死ぬときの顔まだ出来ぬ老女優
高須賀金太さんへ
夫婦傘しぐれて雫梅雨のしずく
山内静水さんを悼む
静水と号したぎりに滾る水

橘高薫風

山内静水氏

川柳塔社参与・竹原川柳社会長　山内静水氏は昨春以来、病気療養中であったが、三月五日、肺がんのため死去、七十五歳。告別式は同七日、白寿会館で行われ、本社から西尾栞主幹が弔辞を捧げ、通夜に橘高薫風理事長が弔問した。自宅は竹原市竹原町田中　謹哀悼

辞世句

死に様はどうあろうとも南無阿弥陀仏

（平成二年四月十八日作）

川柳太平記（155）

川柳の群像

長谷川鮮山

東野大八

私（可香）と鮮山君との交友は昭和3年に始まり、斎藤旭映のとりなしで、私のやっていた川柳紫会の『紫』に彼を迎えたのは昭和7年であった。（中略）爾後、旭映さんと鮮山君と僕とは、どこへ行くのも一緒であった。

昭和8年3月旭映さん中心に、現名古屋川柳社の前身なごや吟社を創立した。（中略）彼は川柳一筋に打ち込んで後輩を慈しみ、誰彼となく慈父のように慕われていた。僕が名古屋川柳社の二代目主幹、彼が三代目を継いでよく川柳社の面倒をみた。名古屋川柳社50余年をともによく苦労した。

彼は愛知県海部郡佐屋町の出身で、当初は松坂屋の食堂部につとめていたが、その折、食堂内で川柳の同志をつくり、大東亜戦争の苛烈さの中で三菱の軍需工場内でも川柳の同志を育てていた。純然たる名古屋弁で、ソレデヨウ、ヤットカメダナモが彼の口癖でみんなから親しまれた。彼は達筆家で、各吟社や会合の表彰状や感謝状はほとんど彼一人で書いている。彼との交友は実に六十年近い歳月がたっている（『川柳なごや』鈴木可香悼文要約）。

名古屋中心の川柳の草分けは、明治43年大曽根大吉、岡本映糸らが作った中京川柳社の川柳誌『柳』が発刊されたのにはじまる。これが大正元年『鯱鉾』と改題されて、正統川柳の普及と古川柳研究で、日本各地の川柳人間を風靡したものである。名古屋の川柳人は、すべてこの柳誌から生れ育ったのであった。

しかし、この名門柳誌も大吉の死去により昭和七年二十周年記念号を出して休刊。この時点で可香の『紫』が昭和三年から九年まで円羽のぼるの『草薙』が昭和九年から同十六年まで、加藤彩草の『あかつき』が昭和二十一年から同二十六年まで出ており、名古屋柳界の発展に貢献したが、もともとこれらは傍流で名古屋川柳界の嫡流は『鯱鉾』休刊のあと旭映・可香らによって生まれた名古屋川柳社の『川柳なごや』がそれであった。

この正統川柳の他には、革新川柳で全国のトップを切った森田一二の『新生』が大正十一年に出たが続かなかった。この他には大阪の番傘系柳人による名古屋番傘や、中日柳壇から発展した中日川柳がいずれも戦後にスタートしている。

こうした名古屋川柳会の草分けの一人、鮮山は、大正十二年『中京詩戦』というガリ版刷りを発行しているのだから面白い。22歳、本名長谷川源吉、明治35年4月23日生れで、十代から詩を志し、ガリ版詩集のかたわら、『蠟人形』『若草』『現代文芸』の詩壇に熱中したが、次第に投稿先の幅を広げ、俳句、短歌、川柳などに片っ端から投句、結局、鈴木可香に川柳を兄事することになった。

「おかざき川柳社五周年大会当時である。川上三太郎先生をはじめとして、名古屋では旭映、可香、鮮山、上田市の金子春風の諸先

生が、あたかもキラ星のように見えたものである。

傍へ行って声をかけるのも恐れ多いように思われ、遠くから披講を拝聴したものである。考えてみれば、それは今から三十余年もむかしのこと、各先生方に約三十年を差し引けば、今の私（一譜）よりも若い。五十代のそれこそ実年の方達ばかりである。鮮山師も五十三歳。実に歯切れのよい、腹の底から出る美声の名披講に、殊更に川柳の良さを嚙みしめたものである。

春秋二回のおかざき川柳大会には必ず出席して御指導を仰いだ先生であるが、私の還暦を期しての句文集『空っ風』の序文を進んで執筆して戴いたこと、稲吉佳晶遺句集『五万石』（注・本誌で紹介すみ）に至っては、原稿半分を選句、清書して頂いたご苦労は何んとしても忘れ難い。『川柳は人なり』私の大好きな言葉である。これを実践して私たちに示してくださった先輩とも思っている」（『川柳なごや』梶川一譜悼文）

「鮮山のお名前は、満州時代から知っていた。満州の柳誌に鮮山の名前はどこにでも載っていたからである。外地で暮らしていて、郷里名古屋という字がなつかしいまま、すぐその名を覚えてしまった。（中略）

鮮山氏は温厚篤実という言葉がぴったりの人柄でありながら、人の適材適所をうまく生かして使うことの上手な人であったと思う。

鮮山さんについて忘れられないのは、披講のすばらしさである。正に名調子であった。それにもう一つ、それは一部の者しか知らないと思うが、安来節のうまいことである。これはまさに絶品といえるものであった。私などは、一度あまりのすばらしさにつられて下手くそなどじょうすくいを踊ってしまい、以来どこへ行っても仙波のどじょうすくいといわれて閉口したものである。それもいまはなつかしい思い出である」（『川柳なごや』原仙波悼文）。

戦前大陸から出ていた数多の柳誌の常連寄稿家のトップは可香、つづいて星野兄兄に長谷川鮮山であった。

「朝鮮人の川柳人がいるとはまことに愉快である」

といったのは石原青竜刀で、鮮山を指してのご托宣であった。根は一途ではやのみこみの当方は、終戦後引揚げてきて、名古屋の土地で鮮山老人にじかにあうまで、この人物は半島出身とばかり思い込んでいたのだから世話はない。

この人との初対面は、仙波の案内によるもので、二十年あまりも昔になる。小さいトンカツ屋さんで、首まである白いカッポウ着姿なので、この人特有のナゴヤ弁が出るまで韓国人とばかり信じていたほどの念の入れようであった。

昭和61年1月20日死去。享年83。釈了源。

「川柳塔の貴方の書かれる群像は、全部切り抜いてスクラップしてあります。私如き者も昇天すればこのリストに入りますかな」といわれた晩年の言葉を奉じてここに書く。

洒落一つにも貫禄のある言葉　鮮山
人欺すことも商売上手下手　〃
捨台詞あとから礼に来るという　〃

この三句は『句集奈加川』（昭和41年刊）の鮮山作品の中からで、「洒落一つ…」は彼の染筆の一頁を埋めた句である。

この句集のアンケートの中でこんなことを書いている。

〈好きなもの…胃はあまり丈夫でないくせに、中華料理、天ぷら、刺身のトロ。スポーツは野球、サッカーなど運動と名のつくものはなんでも好き。嫌いなものは酒、杯一、二ハイ。酔っぱらいの醜態エトセトラ。

▼次号は「**森紫苑荘**」

柳籠裏三篇研究（七丁）

佐藤要人・八木敬一・七久保博
岩田秀行・紀内恒久・西原　亮
大野温干・青木迷朗
鈴木倉之助　故岡田　甫

114　**急度した菓子屋ミせには何もなし**

佐藤＝上野黒門町の菓子処「うさぎ屋」などもそうであった。格子作りの戸が何時も閉まっていて、暖簾がなければ、しもたやかと思うほどである。江戸時代の老舗には、こうした見世も多かったのであろう。

青木＝礎稿に賛。暖簾をほこる商人のプライドが感ぜられますが、庶民には縁がうすく、駄菓子の方に親しみが持てる。

岡田＝賛。

115　**さんまをむしり村の娘ほめられる**

佐藤＝これも田舎を嘲笑した句であろう。秋刀魚は、今日でこそ高価で大衆魚ではなくなったが、昔は下等の部に入る魚であった。焼き秋刀魚は頭と中骨を外すのが手際で、むしるのに要領がいるのである。魚などは秋刀魚といえども、めったに口にすることがなかったであろう。農村では、秋刀魚を上手に処理できるのは、一つの手柄として認められたに違いない。所詮、江戸っ子からは蔑視される生活水準だったのであろう。

村の娘今戸のでくでひなまつり　二〇2
（今もある今戸の土偶人形）

八木＝賛。サンマは長いので箸で扱うより手でむしって食った方がずっと食いやすいことと関係があるのではなかろうか。

西原＝さんまの焼き方が上手でほめられたのであろう。

青木＝嘲笑したのではなくて、頭と骨と尾だけを残してきれいに食べた農家出の嫁を姑が感心して誉めたのだと思います。

岡田＝田舎の人は、安魚だから骨ごとガブリと食ったのであろう。

116　**御不勝手しやぼんのやふな玉が落ち**

佐藤＝通り句であるが、「玉落」の本義は意外に知られていないという。

これは鈴木倉之助先生が明解を出されている。それを簡単にいえば、でんすけ賭博よろしく、丸めた紙玉を、穴のある柄杓からふるい落とすので、それで玉落というそうである。「穴のある柄杓」を用いたとする傍証が鈴木先生の新発見であった。

幕府の禄を食んでいた旗本などはすべて蔵前の札差から、来年、再来年と前借したもので、実際に玉が落ちた時は、前借や利子を払うと、いくらも手許に入らなかった。それで「しゃぼんのような玉」と表現したのであろう。

玉落チにきとかたるナと御不勝手　三五10
（僧正遍照の歌の文句取り。借金取りの押し寄せるのがこわいので）

武士を柄杓にいれる御蔵前　東月・宝一一春2

七久保＝賛。礎稿の「穴のある柄杓」とは知りませんでした。小生は漠然と「穴のあいた箱」と覚えていました。**岡田**＝賛。

117　**臘月ハてふちんで餅春ィて居る**

佐藤＝臘月は師走のこと。「提灯で餅をつく」とは、老人の交接にたとえられる俚諺で、「思うようにならぬ」意が本義という。しかし、一般には老耄者の一儀をいうのが江戸時代の通念であったと思われる。主題句は、暮の餅つきは夜にかかることが多く、これは本当に提灯のあかりで餅を搗く仕儀と相成る。そのことを、俚諺の滑稽さを利かせて上手に詠んだ句である。

提灯で搗けば隠居ののかと聞き　拾一24

（近所の人の戯言）

嫁取った晩提灯で餅をつき　末三28

（刺激されて）

八木＝「てふちんで餅」はやはり老人のバレに解したい。若い者は本当の餅をつき、老人は「てふちんで餅」をついている。

七久保＝本句はあまりバレの意にこだわらぬのがよい。

西原＝礎稿に賛。十二月は日没が早い。

青木＝礎稿に賛。バレではなく暮の餅。賃餅または引摺餅。暮も十五日を過ぎると早朝から夜遅くまで搗かねば間に合わぬので、その照明に提灯を用いた。

岡田＝礎稿賛。

118　**三太郎の親夜ひとい立ッている**

佐藤＝この三太郎は「迷子の迷子の三太郎やあい」の三太郎で、迷子の擬人名である。さんざん捜したが、近所に見当たらず、夜になってしまった。もしや帰って来はせぬかと、おろおろしながら、寝もやらず門口に立っているのも悲しい親心。雑俳では、こういう場合の親心を「夜の鶴」と表現しており、川柳にもままある。

七久保＝佐藤氏説賛。

青木＝じっと味わっていると、自然に涙を催すような情味豊かな「川柳」ならではの句。

岡田＝同。

119　**ひだるくハないかと供へ安ス礼者**

佐藤＝一日で多くを回ろうとする安イ手合いの年礼。けだし供も日雇の供であろう。出来るだけ多く回れば、三日かかるところは二日で済み、それだけ日雇賃が節約されるわけで、それだけ飲まず食わずでかけ回ることになる。腹ぺこで泣き出しそうになる子供の供をふりかえりながら、「もう一ふんばりだ。腹がへったろなア」と、それでも同情の言葉をかけるだけまだまし、というもの。子供の供も、日雇賃の手前、多少やせ我慢を見せなければならないだろう。

道の損得嘶してく安礼者　萩2

（近道をすれば一軒多く回れると）

下戸の礼四ツ谷赤坂かうじ町　拾一11

（「四ツ谷赤坂麹町」は当時の通言）

八木＝賛。ただし、子供と断定する要なきかとかんがえるが。

七久保＝賛。この安礼者は酒の飲めぬ下戸なのであろう。だから家数だけこなし、道順を考慮して遠い所からかたづけてと、

下戸の礼片っ端からたたきつけ　五40

日の出より日の入迄に下戸の礼　一三6

となる。

西原＝賛。とても飲む礼者ではだめ。ところで供の風態は、

若松染の綿入れで礼の供　二六41

岡田＝呑める者も呑めぬ者も、「まあお雑煮をいっぱい」の言葉も断るから。

五濁抄

黒川紫香選

砂川市　大橋政良

身銭切ることなら欠伸しておれぬ
貧乏な奴から助けにやってくる
中流に汚染をされた妻になる
肩ぽんと叩いた風が如才ない
嫌味ないおとぼけうまいなと思う

鳥取県　西浦小鹿

砂浜に穴掘る事をやっている
サイコロの上がりは海の見える丘
日の丸が小さな手から振られてる
日めくりをめくる汚れた手の位置で
輪になって神様のこと話し出す

静岡市　沢田きん

眼を閉じて楽しい過去を描いてる
孤独でも仏が付いて居てくれる
こっそりと母へ握らす紙包み
春風へ急に逢いたくなって来る
も一人の私を責める深い欲

出雲市　原章峰

落花生の殻と戦争甘く観る
使い捨てた兵かも知れぬ人面魚
戸籍課で私の信用状を買う
遮断機をくぐっていった春一番
かげろうになるまでもえる雪おんな

大阪市　上田柳影

待つことが苦にはならない戎ばし
面白い話つめてる旅鞄
一泊を二泊に富士が美しい
エープリルフール不倫を考える
また減ったバレンタインのチョコの数

大阪市　新井朋子

聞こえませんか　歴史は語っているのです
どんな夢見たのか枕がしめってる
立ち止まることさえ許されない街で
ひゅうひゅるるちいさな穴が埋まらない
あなたの瞳に私がうつる日を待とう

長旅に疲れましたと貨車の雪
好きな子を泣かせてしまう雪礫
地下鉄で恋を囁く人もいる
騒音を撒いて集める古新聞
切り出したことばにいつか酔うている

摂津市　木下道子

ピカピカで出番待ってる春の靴
生活のリズムも軽く春になる
ポッケから春する話あふれそう
春の風　気持やさしくしてくれる
春風を亡父の服にも入れてやる

米子市　足立由美子

菜を洗う妻ハミングと水の音
控室の父が一番落ち着かず
追っかけてくるから逃げてみたくなる
鮮やかなサヨナラだった揚羽蝶
そして地球にだあれも居なくなりそうな

藤井寺市　高田美代子

夢いろのおめかし花のある故郷
親離れ子離れドラマ春の駅
準備万端妻手ぎわよく行くパート
春はる春財布の悲鳴聞いてます
演技派の友が豆の木登るとさ

佐賀県　寺中三枝子

冬の無風　森は力を蓄える
甘党の店で別れ話など
捨てられた粗大ゴミにもあるドラマ
身構えたのは冬　春風に油断
笑顔をひとつ落した冬の駅

富田林市　池森子

灯ともし頃にはみんな優しい窓となる
嘘でしょうゆうべ話した友が逝き
携帯電話でつぎつぎ矢印が届く
花言葉撒いて多忙なキューピッド
並ばせておいて閻魔は煙草吸う

名古屋市　藤井高子

慟哭と哄笑の一芸人を討つ
一国の挽歌　汚れたままの旗飾る
妻老いて私も老いて狸と狐
時々は妻とワルツを踊ろうか
三月のハミング　ツンツンつくしんぼ

柏原市　大峠可動

青空をいつも見ている襟ぼくろ
春の陽を待って越冬の万歩計
神詣でいくさ鎮める絵馬がない
女とは聖母マリアに似て甘く
嘘入れて愛の深さをたしかめる

尼崎市　的場十四郎

尼崎市　尾宮弘治

きついこと叱って単車買うてやる
碁敵が蕾のランを褒めにくる
藁つかむ思いで急ぐ事故現場
化粧代ばかり嵩んで出ぬいろ気
ギコチない他人行儀で里帰り

藤井寺市　中島志洋

お喋りと無口がなぜか馬が合い
走り去る車を睨む雨上り
若作りいつも噂の風の中
虫のよい話にのった欲の皮
いたずらな風に晴着の手が慌て

松山市　白石春嶺

分校にさくら入学式がない
泳ぐのが下手で冷やめし組にいる
逢えるかも知れぬ未練のペンを取る
かみそりを持てば無口になる床屋
はれものに触れる思いで子を諫め

熊本県　大川幸子

つぎはぎの堪忍袋は父のもの
寝たふりで待つとしようか午前様
漫画のヒーローおぼえて孫のいい相手
みの虫も風の温みを感じ取り
畦ごしは市内の野菜目立つ青

広島市　流奈美子

草笛に誘われてゆく里の春
野よ川よ風よ旅情をありがとう
眠ってはおれぬ地球が毀される
返答に困り微笑を返しとく

尼崎市　児玉歌子

和解して酒のピッチが早くなる
耳朶を染める女でまだ丸い
盲点をきれいに突いて来てる耳
束の間を惜しんで回る毛糸玉

今治市　渡辺南奉

助けたい人はすがってなど来ない
花の名を徐々に覚える万歩計
花と蝶　花は相手を選べない
花の芽を見てる少女の瞳で見てる

熊本市　宇野昭代

石垣に去年のすみれが顔を出す
ハッピーエンドのドラマに安心して眠り
物入りの手始めとなる初節句
私には過ぎた子叱るほろ苦さ

熊本県　岩切康子

約束の素敵な明日に身構える
スーパーの駐車場借りひと眠り
直送の鰯ペダルを漕いで来る
留守悟り犬は黙して小屋に入る

尼崎市　森安夢之助

風邪引きを妻に譲って粥を煮る
朝帰り玄関の戸が重たくて
看護婦の明るい声で動く朝
背のびして故郷を覗く汽車の窓

尼崎市　野瀬昌子

ゆっくりとテレビ見ている雨の午後
音一つしない故郷で熟睡し
歴史にはのらぬ夫婦の五十年
旅の駅故郷の母に似る老婆

久留米市　鶴久百万両

出逢いから魔女のトリコになる予感
保護色の好きな男の絵は描けぬ
エチケットの見本チンドン屋のお猿
夢花火を見ようね花の街に着く

芦屋市　黒田能子

暇々に習った事が生き甲斐に
病床に母は童女の涼しい目
孫の笑みどんな事でも許せそう
親心積み婚札の荷が走る

兵庫県　森脇和子

来る来ない花びらが散る峠茶屋
手話二人小さな疵を温め合う
逃げ腰を笑う易の灯吉と出る
ティータイム確かな愛の匙加減

兵庫県　酒井靖子

雑談の中でわが身の幸を知る
尋ねれば風がまるく丸く吹く
五線譜へ余分な怒りふり落とす
衣食住足りて孤独という皮肉

鳥取県　大角幸代

春をさがしにあなたと二人旅に出る
この川を越えて花言葉をおくる
定位置を決めて靴ひも結んでる
幸せが袋に少しずつたまる

和歌山市　山口三千子

言いかけた時に信号青になり
まだ炎えるものあり迷う女坂
離縁状叩きつけたい時もある
眼を嚙んで死ねとは無理な事を言う

和歌山市　堀畑靖子

筆不精のあなたがくれた春の文
受験生かかえた冬の立話
健康であることもまた妻の義務
子のために歌っています応援歌

酒田市　永澤裕子

戦乱のニュース悪夢が蘇り
一軒の家でもめてる平和論
潮時と逃げる会議の靴の音
自分史の余白部厚く取って置き

只酒は飲まぬ小さな意地がある
話し相手やっぱり欲しい一人旅
閑僚の資産溜息のんで聞く
着ぶくれの姑に薄着を気遣われ

東予市　小山悠泉

気まぐれなダルマ転んだままでいる
散る位置に来たと男が考える
山ひとつ越えれば春の陽と出逢う
無職なる暮らし男が小さくなる

鳥取市　大坪天涯

酔うほどに時の流れを遡り
笑い話にするのは少し先になる
ほうれん草食べてもポパイにはなれず
噫無情月の砂漠よつわものよ

八尾市　片上英一

旅終えてもとの孤独が深くなる
過去を消す顔へホクロを描き添える
ゴミ文化鴉も街を志す
笑ってはいけない時に出る笑い

旭川市　朝倉大柏

本当の事を言うては誤解され
重患にしんどい嘘をつきました
平和なり笑い上戸の嫁姑
野良猫に鰯とちくわ買うて来る

大阪市　亀井円女

ほっといて下さい私が渡る橋
継ぎ足しての字に結ぶ母の糸
私を無口にさせる風に会う
日記書くまたも脚色してしまう

出雲市　岸桂子

湾岸にすまぬと思う炬燵酒
冬木立男の顔が描いてある
戯れが過ぎはしないか初春の使者
大寒へなんとおしゃまな蕗の薹

鳥取市　西村黙光

帆をかけた舟だが走らないことに
ビール一本飲めるぞ病癒えし宵
それからは忙しさをも分け合って
太いのが去って二人の席があく

堺市　神原文

筋道を通せば頑固だと言われ
サクラメール春らんまんを呼び寄せる
どんな娘や親父はそっと尋ね出す
国立をパスせよ親も頑張れる

鳴門市　八木芳水

音のない狭間で手話の恋実る
バンザイへだるまも両手くれと言う
口下手の挨拶はすぐ握手する
老いの絵に少しピンクが欲しくなる

鳥取県　石谷美恵子

鳥取県　黒田くに子

安全地帯へ置いてやりたい血の絆
ピンチに遭う度故郷の夢を見る
熱い茶が愚痴言う口を封じ込む
冬の絵の中へ邪念をみな捨てる

鳥取県　太田幸枝

無駄の無い親の意見が後で効く
コーヒーで見合いをしたり別れたり
野の香りぷんぷんにおう地蔵さま
色いろと評判された頃が花

鳥取県　石尾かつ乃

手に負えぬ孫が野の花摘んでくる
人がらがにじむ封書をもらう幸
一人旅風に同情される日も
親の引く線から逃げて翔んでいる

鳥取市　美田旋風

湾岸へ平和の鳩を飛ばしたい
おだてにはすぐ乗る財布軽くなる
意地張って生きた話が愚痴になる
年寄りの話聞くのも思いやり

枚方市　中山おさむ

着膨れて無駄な時間を持て余す
手の届くとこに消しゴム置いてある
二階バス緑の中を抜けて行く
死語ばかり使うて老いの輪が弾む

米子市　小塩智加恵

観光地　試飲ワインがよく売れる
異動時期小さな声に響く耳
胃薬に疑いかけて辞典引く
お隣に嘘もちょっぴり自慢する

和歌山市　森茜

春近しまあるく風が撫でていく
ひっかけた小さな嘘がでて慌て
おぼろ月少し詩人になるこころ
絵の中でかばいきれない童話の子

尼崎市　佐野六浦

出窓にも四季の植木が置いてある
桜木並木も今は新芽の通り道
制服になって背丈が母を抜く
親も子も硝子張りだという家庭

尼崎市　長浜澄子

佗助の一輪に合う雪が降る
一言が言えずコーヒー掻き回す
控えめな女話題の中に居る
悪運が尽き結婚の招待状

寝屋川市　宮崎菜月

どこへやら消えてしもうたきれい好き
いたいほどキャッチボールして夫婦
ショートケーキ乙女の域を未だ出ず
辛い時やっぱりやさしい夫です

姫路市　松本一郎

路地奥に通が旨いと言うそば屋
まだ若い夢一杯の日記書く
老妻と旅に出ようと春を待つ
ずっしりと無口の父の一言が

尼崎市　鈴木良征

いくさの好きなオッチョコチョイが旗を振る
どさくさにまぎれて拳振り上げる
自己主張持たぬ男の派兵論
短期決戦と皆が信じていた誤算

尼崎市　吉永伊三郎

気にかかる息子の部屋にある電話
細やかな幸せ酒がまだ旨い
ウインクをされて隣の人が立ち
高齢化男に残る狭いイス

貝塚市　池田寿美子

ベストセラーの帯に誘惑されている
人の不幸がチャンスとなって立上る
情報も一緒に食べるグルメ味
時雨来て鞍馬へ誘うそばの味

熊本県　高野宵草

病院でジッと待つ児がいじらしき
友情が口約束で貸してくれ
初孫に逢いたい空を飛んでいる（初孫誕生）
孫の名の候補並べる辞書を繰る

静岡市　永倉柳華

お茶の間で戦果見て居る春炬燵
どの部屋も灯りが点いて悲しい夜
健康の秘訣笑ってばかりいる
独り身の自由寂しい夜のしじま

高槻市　芦田静江

雪がこい絵で見るような寒ぼたん
縄文土器に心を戻す国の富
雪像の芸術春をよんで来る
着ぶくれて女が抱いた不発弾

広島市　名和喜一郎

捨てられたわけを知らない粗大ごみ
趣味でなく義理で見に行く展示会
攻撃はできぬが壁にならなれる
単身に充分すぎる片手鍋

岡山県　清水悠貴女

大根切る平和な夕餉あるように
福袋積んでホイホイ孫の舟
その慕情書き切れぬまま切手貼る
小春日を吸うて欠伸の蕗のとう

岐阜市　渡辺杏村

花の下わめいて走る救急車
ハンカチの名前が読めた園児服
タクシーに花一輪のなごやかさ
地下鉄の風にも春を知った朝

正直いって君が妻なら草臥れる
バレンタイン妻に内緒のチョコもあり
どういう意味冗句へ絡む嫌な酒
一癖のありそな人に気に入られ

和歌山市　田中みね

棒読みの原稿になる新社長
カーテンのゆれる何処かの隙間風
約束を念押して来る電話口
沈黙がまだ続いてる痴話喧嘩

熊本市　北川一進

結婚式ハワイに飛んだと知らせくる
障子貼り静かな日和パパの役
冷えますと明日をおどかす予報官
芋焼いて戦時の話孫にする

尼崎市　山田保蔵

襟元の奇麗な女にだまされる
想い出の襟章だけの戦艦
久しぶり逢った戦友まだ元気
大学に通い始めて孫化粧

尼崎市　木下義嗣

寒い日は妻という名が重くなる
救援機野党あまりにヒステリー
宇宙から青い地球を救う指示
平和ボケ孫を相手の銃撃戦

大阪市　小糸昭子

春立って袋の種が騒がしい
久々に去った職場の椅子にかけ
生はんか哲学かじり病んでいる

和歌山市　谷口信子

水仙に正座されてて崩されず
ここまでの話を風が聞いていた
百円が拾ってくれと光ってる

島根県　菅田かつ子

カルテみる医師の笑顔に救われる
ほどほどのセンスの良さが占める椅子
えんぴつがまことしやかに嘘を書く

出雲市　富田蘭水

入学の朝だボクちゃん起きなさい
いい夢を詰めてやりたいランドセル
春の陽に小さな傘を干している

鳥取県　鈴木公弘

三界に家なし女たくましい
深入りは互いにしない紙コップ
鉄砲玉の男みこしの上に乗せ

松山市　宮尾みのり

聞く耳を持たぬか天の笑い声
わが国を「どこかの国」としらじらし
まだ目から鱗が落ちぬ我ながら

熊本市　黒田緑

羽曳野市　芦田絢子

ポスト取り替え春の便りを待ってます
酔っぱらいの隣の席が空いている
振袖で戦争のニュース見ています

尼崎市　明壁敏之

襟の紅　妻が三日も口きかん
野良犬が後ついてきて帰らない
合格の番号を追うおや子づれ

尼崎市　中澤向西

お年玉貰う時だけお世辞言う
終電車駅にはわたし一人だけ
入学祈願絵馬が並んで駆け出そう

尼崎市　前田いわお

明日は能登雪の出迎え受けそうだ
人間を輪切りで覗く科学の眼
写真より富士のお山は素晴らしい

出雲市　森山健歩

人生と共に帽子もくたびれる
皮肉な矢　太郎冠者には当たらない
無視されて途方にくれる太郎冠者

鳥取県　山本正光

言いなりになってくれない妻といる
由緒ある寺で坊さん威張ってる
息切れのするほど走り乗り遅れ

吹田市　山本希久子

ふと覚める真昼の夢も旅の中
ひっそりとのれん息づく京の路地
蓋をとる楽しみもあり京料理

鳥取市　前田一枝

コーヒーの追加頼んで待って見る
賽銭にするには惜しく札たたむ
地球儀をまわし湾岸たしかめる

兵庫県　奥野テル

亡母よりも生きて亡母より小さい影
弾んでる笑くぼパチリとコンパクト
かしら文字ばかりで埋める恋日記

岡山県　江口有一朗

妥協せぬ時計の音を聞くしじま
労りの言葉に心くすぐられ
画家の手に触れれば自然も艶を増し

大阪狭山市　桜井荘次

引っ込みがつかなくなった鬼の面
男気を捨てると椅子が丸くなる
お喋りな火種は深く埋めておく

鳥取県　大角正道

赤飯を炊くのが好きなお母さん
男は顔じゃない妻がそう言った
ふりむくと女神涙をふいていた

堺市　宮本かりん

お父さんのきまり文句がまた出そう
ドアの音ママの気持が荒れている
ハイウェーのびて日本せまくなり

佐賀市　古川一徳

うっかりと吐いた本音が仇となる
旅帰り茶漬が欲しい胃の疲れ
カメラアイ自信に満ちた子の笑顔

泉佐野市　真崎浪速子

学歴のこれがラストを飾る椅子
賞められる手筋美し舞扇
旧姓へ呼ばれる会へ妻の紅

京都市　小林英子

いつしかに穏やかな愛自覚する
雪づりも手持ちぶさたな温い冬（金沢湯涌の旅）
和紙の里たのしく紙を漉いてくる

和歌山市　北山好笑

針供養あしたからまた縫い地獄
雛舟に引かれ流れる千羽鶴
情報を集めさえずる鳥の群れ

京都市　本荘福子

飲めないがしみじみ語り合える友
雪の日に砂漠の嵐見る茶の間
飽食のための胃薬売っている

豊中市　三宅つえ子

楽しみを捜しては日を送る父
テレビで聞く警報の音哀しげに
ベルが鳴ると思いつづけて油断する

十和田市　阿部喜久江

金髪のあの娘は英語話せない
真心も添えてもてなす小商い
商売のうまい主人は聞き上手

香川県　工藤吟笑

同行の鈴で四国の春おこし（四国霊場巡拝）
肩書が増えるたんびに腹が出る
バラの花痛くとも手を出したがり

河内長野市　大西文次

不自由はさせないと言うプロポーズ
居眠りと欠伸仲のよい夫婦
休診と書いて先生二日酔い

枚方市　山崎彩子

朽ちたのか鶯張りとなる廊下
付け焼刃イスラム教にキリスト教
フセインに似た目のヒヨが庭にいる

島根県　加本義良

不公平雪の降る国降らぬ国
もう春が足元に来た散歩道
思い出の丘で昔を呼んで見る

寝屋川市　河合時弘

ジンクスを笑いとばせぬ気の弱さ
道草をしてるとつむじ風に遇う
人妻があっけらかんととび回る

広島県　森川抜智

正月の挨拶鹿からお辞儀され
三度目の妻生命保険がふえて来た
目が覚めて頭も冴える午前四時

京都市　山海友熙

盆梅が呼ぶ長浜に舟が着く
番犬の声も出さない人がくる
京に住み優しくなった棘を持つ

鳥取県　西原艶子

桃の花生けて孤独に耐えてみる
いい助言する友がいて迷います
待つことに慣れて女の城守る

西宮市　菊池トミエ

草もちが旅の話を盛り上げる
声かけて雪掻き払う父の墓
雪吊の夜も照らされさむざむと

広島市　中村要

年金が入ると財布おごりだす
肩書きという足枷をかけられる
老夫婦パントマイムでこと足りる

和歌山県　森三枝子

一輪挿しへ甘い言葉が活けてある
気の合ったグループで行く小旅行
太陽の匂い知らない紙オムツ

十和田市　小笠原敏夫

豆まいて鬼の行方を案じてる
福は内本気で呼びたい時がある
春などと暦ばかりが先走り

米子市　小西五十鈴

コーヒーで商談まとめマイペース
粒選りの集まる塾で遊べない
栄養のことも考え豆腐食う

静岡市　宇佐美寿美

古手帖涙のあとの字が悲し
夢ひとつやっと嚙み合いフルムーン
大吉を探し未来に腕磨く

大阪府　籾山隆

決断の心をくれた影法師
少年は紙芝居から夢を見た
自由とは柵で飼われる羊かも

岡山県　杉本伊久栄

ストレスの解消デパート一巡り
コマーシャル程には利かぬ風邪ぐすり
音痴でも聞く耳は持つ安来節

人がいて自動改札という無人
ジャンケンポン納得をするルールです
解説もつけてあなたへ花言葉

千葉県　上鈴木　春枝

さり気なく貰う親切身に沁みる
細ごまと気のつく友が一人いる
女正月一寸ぜいたくしてみよう

唐津市　山口　ふさ子

注意する警官逆におどされる
胃カメラに医者の言葉を待つ永さ
落選のダルマ片眼で寝てしまい

鳥取市　岩原　喬水

用足しに雑魚寝のどこをどうまたぐ
衝動で買ってひと晩枕元
先生が意外なとこにいて噂

島根県　佐々木　芳正

あたたかい返事欲しくて手紙書く
もみじ手もまじったとんどよく弾む
倖せが煮こぼれている趣味の窓

兵庫県　西井　つや子

脚の裏から春を知る街に住み
楽書の恋もいつしか破れ傘
満洲にいましたという日向ぼこ

大阪市　尾崎　黄紅

給油だと思う点滴春の鬱
年金で中流などと自己欺瞞
待遇が話と違う二度の職

堺市　井上　たかし

花の名は知らないけれど好きな花
肩に手を置かれる話気がもめる
鉛筆を全部削って書き始め

静岡市　浅子　まつゑ

似たような話きき耳たてている
横文字が多いと父がボヤいてる
足音へ話題は別のことを言い

大阪市　今西　静子

今日もまた足取かるいローカル線
古時計　時には子守唄になる
一人ですコーヒータイムも一人きり

島根県　渡部　好栄

やがて傘寿恥じない言葉模索する
三寒四温　四温をアテに旅誘う
黄水仙　大寒に耐え春を呼ぶ

寝屋川市　井上　すみれ

方言を無理に使ってとけ込めず
犬好きは吠えない犬と言うけれど
うまい事言うた祝詞をほめてつぐ

新潟県　高野　不二

夕暮れは水平線の向うから
歩道まではみだす花屋にくめない
着る服がまだ決まらないああ女

今治市　和田　宏

死ぬ日まで夢を見るのが取柄です
ハンドルはまかせて文句だけを言う
小さくとも私に夢をくれる種子

米子市　中井ゆき

所在なきてのひら湯呑温める
鼻薬効く上役に恵まれる
魔女の出る小箱少女が持っている

熊本市　遠山夏生

湾岸戦争茶の間でみかんむきながら
雪しきり仏を飾る花買いに
過疎守る新成人にある決意

出雲市　伊藤寿美

泣きに来た里で老母を慰める
会うたびに小さくなって行く老母で
庇い合う夫婦で明日の詩がある

岡山県　土居ひでの

巫山戯てる処をカメラ摑みおり
面影を喪中のはがきで偲びおり
毒舌を肴に呑める友のあり

宝塚市　末次　真

ブレーキのきかぬ若者多すぎる
世の中を気ままに過す自由主義
三歳児母追う足の速いこと

静岡市　大石たき

法廷の庭より恐い弁護料
黒幕の表の顔は実業家
棒グラフ余白残してああ期末

羽曳野市　山本たけし

切り札を使い果した風の向き
盾ついたことばに刺さる今日のうつ
偶然を待って夢見る女文字

兵庫県　北川とみ子

戦争に口は出さぬが金は出す
乗り換えて座れたけれど忘れもの
女房と別れた夢を見ています

豊中市　滝北博史

徳利を五本倒すと浮かれだす
それぞれの賀状に遠き日の記憶
アルバムに二等兵の顔風化する

吹田市　西岡　豊

小春日和彼女の心冷えたまま
自由化を承知で買った耕耘機
故郷の山恋しくさせた花便り

寝屋川市　北岡波留吉

芦屋市　根来　敬

何を言いに首ふって来る窓に鳩
流れついた海の広さに安堵する
縄のれん本音もグチも聞き流す

茨木市　藤井正雄

旅馴れた鞄の底の朱印帖
トンネルを境に違う雪模様
ゲートボール駅弁がくる主催側

岡山県　大石あすなろ

平成を歩くたしかな呱々の声
学力は平均点よりちょっと上
ライバルに知恵授かった処世術

鳥取県　乾　隆風

どの顔もやさしい羊お出迎え
うれしくて手の置き場所をさがしてる
一線を引くと義理人情が泣く

枚方市　森本節子

借本のページこぼれる季の押葉
湾岸に明日という日が分からない
空き椅子に座れば故人のくせが出る

広島市　森田　文

廃船へ絵筆が集う瀬戸の浜
あっさりが好きと素うどんばかり食べ
おだやかに一日過ぎて物足らず

富田林市　浦田トシヱ

咳一つ愛児取り巻くパパとママ
縁側で戦争忘れ日向ぼこ
眼醒めれば湾岸戦争気にかかる

静岡市　小木久子

古日記記憶の糸をたぐりよせ
何となく似てくる仲のよい夫婦
根まわしをすませそ知らぬ顔でくる

香川県　川崎　光

大海の恐さを知らぬメダカ達
迷うのは覚悟の上でカゴを出る
騒音を包んで眠る夜の街

八尾市　向井しづ子

陽の匂う布団に忘れた口喧嘩
きびしさに耐えて花咲く泡立草
風花をうまく咲かせて冬並木

大阪市　家村高雄

満洲の話がわかる友が逝き
外商にどなりつけてる俄成金
またかいな自慢話は鼻につく

神戸市　木村貴代子

流行が何よ私の好きな服
ただ今の声音きき分けて顔をよむ
子にかけた夢の袋がしぼみ出す

岡山県　福原辰江

しきたりをどっさりつめた倉の中
衣ずれの裏に気品しのばせて
回り道した分心が広くなり

箕面市　岩津ようじ

次々に口止めをして裏話
追いかけてくる親切に悩まされ
丹念に読む誤って来た葉書

大阪市　川原章久

父と娘が互いに責める長電話
折り紙の折り目に隠す恋心
落葉掻く音に目覚めた旅の宿

藤井寺市　武部敦子

句のヒント考えてるとベルが鳴る
それなりに暮らして生きる爪の伸び
下心ないからチョコを買っておく

広島県　岸田武

本物の怖さレンズは覗けない
よく見れば髭で調和のとれた顔
どうしてもママの首すじ見てしまう

鳥取県　美浦美代子

花婿の父挨拶で見直され
嘘ついた亡母を許せる齢になる
気を引いて見るため途中背を向ける

岡山県　後安ふさえ

欲のない孫が福引当てて来る
小さい鬼囲み茶の間の笑い声

香川県　木村明人

紀子さんのような嫁さんさがしてる
日脚伸び牡丹の覆い少し開け

鳥取県　今本早苗

太陽が西に沈んでひとり言
好きですとささやき月もかくれんぼ

宇部市　野田豊子

趣味一つ幸せ色になる余生
才能を信じて選ぶ志望校

相生市　中塚礎石

失敗を許してくれた二十歳の日
信頼は無言のままの父である

泉佐野市　大工静子

何もかも許し仏壇拝むだけ
江戸っ子で始め里言葉で終り

今治市　越智青園

肩パット少し自信が出来てくる
結論を急いだ方が負けになる

青森県　荒田つる

まだ株の動き気になる寝たっきり
わたしだけ食ってるような肥えっぷり

唐津市　浜本治幸

ストレスを吐き出している縄のれん
あれこれと夢ばかり見て時は過ぎ

大阪市　清水絹子

事故多発目にのこるのも白い花
焼き芋の匂いに負けた老姉妹

宇部市　中村三良

千大根揺れてる軒の陽の静か
目玉だけが光る笑いのない街で

岡山県　後安江山

神よりの宝授かり初曽孫
曽孫の鼻が先祖をつれてきた

鳥取市　中居武士

選ぶ気はないが相手がみつからぬ
バーゲンは混めば混むほど客が寄り

島根県　岩田三和

お姉ちゃん大人になってつまらない
モーニングサービス妻の味でよし

大阪市　山北三三三

吸えば出る咳に煙草は止められず
泣きに来た金に笑って帰る金

米子市　服部朗子

天窓がブルーに染まり朝が来た
膝直し言いたいことを皆並べ

岡山県　福原悦子

夢ひとつつぶして春を待っている
出直すと決めて夜空の星光り

静岡市　片平静代

赤字です一言多い妻の愚痴
静岡を誇れる一つ富士の山

姫路市　谷清柳

絵に描いた餅の話に乗せられる
おさまりがつかぬ女の虚栄心

今治市　藤本のぶ夫

どの花も俺に向って咲いてるよ
おとこ独り隣の朝音聞きながら

岡山県　牧野秀香

ぬり立てのコンクリートに猫の恋
朝靄に動く墨絵の画布を見る

奈良市　米田芳子

どの靴も家路へ急ぐ歩幅です
あきもせず夜毎夜毎の鍋料理

姫路市　山崎おさむ

平和馴れ中東の危機対岸視
うたたねの夢見が良いと籤を買う

鳥取県　伊吹富恵

もう年だ年だと言いつ鍬捨てぬ
戦えば傷つく人の多かりき

手袋を編んであげたい人がいる　鳥取市　谷口侑里

北の海流氷がきて春を待つ　鳥取市　萩原美雪

泣く場所を心得ている女です

泣き真似の上手な人でだまされる　今治市　渡邊伊津志

母とならゆっくり歩くのが楽し

火事跡に水道管の水が漏る　鳥取市　松本伊都子

自分なりの世界があって平和です

寂しいとみんな詩人になりたがる　大阪市　平井露芳

尊氏のよさを見直す太平記

いい夢を見たとせっせとくじを買い　島根県　松本聖子

うろうろと帰省する子を待ちわびる

ストレスへお喋りクスリになりました　唐津市　野田旭恒

土産物抱えて降りる北の駅

親子づれ餌をねだりに来た狸　熊本県　増田一乗

湾岸は宗教と経済もつれあい

入試パス温和な顔になった孫　藤井寺市　楠昭子

正直に写る鏡で気に入らず

目立つことばかり心が飢えている　鳥取市　武田帆雀

和紙店に親しみやすいお上さん

ストーブに程よい燗で囲碁を見る　南国市　窪田圭風

先頭の姿が見えている粘り

机上論ばかり人質飢えている　青森県　波ただお

お通夜の帰りは月と路急ぐ

雪のない屋根で雀がジャレている　藤井寺市　菊地繁男

今日もまた鰯焼いてる老夫婦

たこ焼きは脱サラ夫婦で息が合い　岡山県　富坂志重

盃がコップに変り本音出る

青年の茶わんに若さはね返り　静岡市　青柳金吾

俺よりは高いペットの美容代

ミサイルの名前憶えるこの悲劇　岡山県　森下正子

生涯の苦楽歩いたこの素顔

しきたりを破って世間の矢が刺さる

何のため化粧するかと鏡問い
泉南市　坂根流水

気がつけば故郷の駅に佇っており
唐津市　福島紀一

佗助が咲いては落ちる冬最中
寒椿ぽたりと落ちてそれだけよ
寝屋川市　坂上高栄

一人居の母を案じる雪囲い
銀の鞍ラクダの夢に装甲車
東大阪市　松山隆

千羽鶴ご苦労さんとあける窓
デートから戻ると父が渋い顔
岡山県　伏見すみれ

立ち聞きの不覚くしゃみが出てしまい
親と子の対話とだえた夜の酒
東大阪市　大平太一郎

白雪に天下晴れての冬謳歌
雪景色人それぞれのロマン持つ
和歌山県　三原三究

常連が今日も残った流れ解散
門限をきめた親父が先ず破り
香川県　辻上よしみ

ふと見ると小さくなった父の影
存在がなくなる淋しさ身にしみる
米子市　寺沢典子

ゆとりある余生に赤がよく似合う
幸せな出会いドラマたのしませ
鳥取県　野口重富

何もかも捨てた気でいて日記書く
放心の顔で盆栽ながめてる
鳥取県　上田俊路

肩書きのとれた名刺にある余白
背信の帽子目深くかぶってる
和歌山市　山田博章

そのなかで暮らせるような絵が好きだ
波に乗るコツ心得て堅い椅子
富田林市　山原昭水

生徒より新任教師緊張し
楠公さん出番ですよー太平記
兵庫県　倉垣恵美

味わいの優しいことばが消えてゆく
祝還暦うやうやしくも受けている
静岡市　三浦つね

謝らぬ子の言訳も聞いてやり
大寒を必死で耐える庭椿
静岡市　増田扶美

夢くれた駄菓子屋さんも店を閉じ
数々の訛りききつつ初参り（伊勢詣り）

仏壇に詫びて三日の留守をする　八尾市　吉村一風

こすり合う流氷の音に襟をたて　大阪市　乾哲静

自分史に書けぬ妻への内緒ごと
貴方には負けたと妻のあきれ顔　弘前市　肥後和香子

集団の中で二人は自閉症
会いたさに答えてくれぬ花の闇　橿原市　西本保夫

ふるさとの味も昔の夢と消え
絵心がある顔をする美術館　静岡市　中西雅

成人をむかえた孫のエル草履
割箸を使わぬそばはたべにくい　唐津市　池田遊女

今年こそ一念発起も三ヶ日
権力と欲が油に火をつけた　鳥取県　浜田民子

自立する余力を溜めて靴をはく
気の合った友が身近で死に急ぐ　松江市　佐野木みえ

面影を追いかけている夢の中
佗助の人知れず咲き散る運命　静岡市　大村正雄

長い目で見れば幸運だったかも
先客と聞けばペットと話す声　池田市　木村一笛

ご無沙汰は一筆詫びて事はすみ
愚痴になる嫁と姑の意地の張り　姫路市　福本好花

口下手が一生損でつきまとう
宝物だった恋文みな焼いた　奈良市　井上大

家計簿のまず筆おろしお年玉
朝シャンの自粛娘に言いつける　鳥取県　中藤俊子

たまに留守あれもこれもと何もせず
作業帽よく似合う禿頭　神戸市　岩田信義

ファスナーの造反ズボンが辞職する
父と子が黙って注ぎ合う置炬燵　大阪市　森崎忠禄

お目出たの早さ気になる若夫婦
引出しの写真見ている深い皺　池田市　岡本吉太郎

暦見て決めた日妻は自信持つ
議員さんもさすが株にて損してる

糟糠の妻と苦労を語り合い
自粛だときめた人から贈りもの　島根県　福間博利

近況を年賀ハガキに添え書きし
父が居てにぎやかになる子等の声　和歌山県　上岡正直

燃やしてはならぬ炎に焦がされる
こよいあたり一つに溶けよ雪女　和歌山市　榎原公子

豆ごはん春の息吹がプツプツと
別名を便利屋という人がいて　松江市　松浦登志子

求人欄俺は呼ばない齢なのか
インターホン　ヒステリックな女の声　唐津市　入江喜久亭

麻酔から覚めた個室の安堵感
雑学のご機嫌ビールを追加する　大阪市　藤森小雅子

あくせくと神のうてなで賽を振る
人形の等身大に嚇かされ　鳥取県　木村はるえ

御即位を三代拝し黄泉路旅
紀子さまの赤ちゃんマスコミ待ちわびる　大阪市　武田昌三

暖冬で花の順位が狂い出す
万単位一寸手の出ぬ松葉蟹　松江市　原長三

精一パイ与えて受けたい彼の愛
鬼ころし飛驒酒にまるい香りある　姫路市　福島姫女

ポンポコリン孫が一番先覚え
逢いに行く背を南の風が押す　鳥取市　近藤秋星

ここに居る私を示す咳一つ
内緒だと言えば走っていく内緒　羽曳野市　徳山みつこ

句会にも辞書を離さず持ち歩く
三次会出世の顔が見当たらず　静岡市　柳沢たま

夫婦旅続く限りの雪景色
長男と車の話でウマが合い　八尾市　松本芙美子

元気ですか業務用の電話鳴る
しっくりと居座る指輪贈られる　東京都　山口新子

寄せ鍋へ豆腐とせりに春はそこ
零囲気へ飲まない私酔いしれる　鳥取市　中西智恵子

尾ひれ付け地獄耳はよく喋る　鳥取県　橋谷静江

嘘のない暮しへ貧乏つきまとい　藤井寺市　田中孝子

美しい嘘病める夫への思いやり

句稿ポスト老いに明るい春の音　唐津市　山下剛司

湾岸の情報過多でまどわされ

義理チョコで後のおかえし馬鹿ならず　摂津市　もちづき遊美

ニホン増税させ自国増税せずに済み

イスラエル問題英米原因棚に上げ　吹田市　廣屋利通

はなむけの言葉がどもり顔まっ赤

油断する夫は自信に満ちてます　和歌山県　吉田武治

六十五時計のねじを巻き直す

見え過ぎて困る鏡が怖くなる　唐津市　野崎ハル

勝力士くずれた髪に幼な微笑

刻々と過去となりゆく命なり　島根県　今川三津江

山桜峰寺山にも春がきた

岩清水苔も美味しい笹柄杓

赤いシャツ着ても明治がのぞいてる

宅急便開けてとびだす里の春　大阪市　岡田一枝

観察する老女へ背から温い声

参加するよろこび聞いてこころよい　岡山県　三村美恵子

温かい部屋にしている孫の芸

便利よく使いこなして六十年　岡山県　平田たけよ

◈ジュニアーの部

雪がとけエスエルはしる春の朝　堺市　土谷充（小四）

家原寺に梅が咲いたよきれいだな

お願い

最近、投句や投稿の遅延が目立っております。川柳塔・水煙抄・銀河系・茴香の花・課題吟（一路集）・初歩教室の締切日は、いずれも**毎月15日**です。これが著しく乱れますと選句に不都合が生じ、ひいては編集・印刷にも支障を来たします。今後は締切日以後に到着したものは、原則として掲載しないことといたしますので、ご協力のほどお願いいたします。

川柳塔社 編集部

—同人吟

秀句鑑賞

—三月号から

金井文秋

ひとことが不足だったり余ったり
西出楓楽

日々の暮しの中で、言い過ぎてあと味の悪い思いをしたり、言葉足らずが誤解の元になったりはありがちなことです。そんな人生だからこそ、退屈しないんですよ。

聞き役のはいといいえが難しい
西山幸

相槌を打たねば悪いし、打てば同志と思われても迷惑。そこの綱さばきは、人生経験や教養の深さがものを言うことになるんです。

タイムリミットまでは笑っておりました
小島蘭幸

まだ日があるからとおっとり構えていたら締切近くなって用事が重なり、泡を食うことがよくあるんです。頼まれた仕事は早い目に片付けておきましょう。

大胆なポーズ連想する自由
西村早苗

連想するだけならこんな楽しい事はない。そのポーズで、モデルになってくれと言われたら、とてもお受けいたしかねますけど。

つぎつぎと産声あげるシクラメン
江口度

土の中から、つぎつぎと頭をもたげていくシクラメンの姿を、産声をあげるとは、うまい表現の仕方だと思う。

花束へ少しこだわる花言葉
安平次弘道

花言葉はこう言う意味だなんて考えずに、お互いに幸せごっこを楽しんでおればいいと思いますよ。

美人画の前でつくづく目鼻立ち
松川芳子

この美人画のモデルになった人はどんな人なんでしょう。うらやましいが、私はわたしなりの良いところを生かしていきましょう。

豪華だが花屋の花よ倖せか
内海幸生

馥郁とした香りを失ってしまった温室育ち、花はなんにも言わないけれど、自然の山野に帰りたいと、思っているのかも知れません。

珍しい病気で医者のモルモット
吐田公一

モルモットであろうが、施療患者にならねば医療費が払えない場合がある。大学病院なども教材としての珍しい病気が必要らしい。臓器移植などもやりたい医者が沢山いる。

雑音を濾過する年でありがたい
寺沢みどり

さまざまな世評を、脳のこやしにするものごみとして捨て去るもの、それができるようになるのも、長い人生経験ですよ。

よそいきの言葉でないからあたたかい
越智一水

親切に言葉を飾る必要はない。下心などないから、真心に感じるものがあるんです。

冗談にまぎらしている口悔しさも
堀江芳子

相手の顔色の変ったのを見て、冗談々々と打ち消してはいたが、きついこと言いよったな、言い返してやりたいんだが、言葉がうまく出て来ない。くやしい。

花柄の花瓶が花の気に入らぬ
矢野佳雲

お見合に年頃の美人が付き添って行くようなことは誰もしませんね。花を生かす花瓶はやはり地味がいいようです。花柄の花瓶にはそれなりの役どころがきっとありますよ。

猪の妻へ引かない虎の嫁
平田実男

寅年の嫁でなくとも、近年、嫁は強くなりました。結局、どちらかが折れねば、別居ということになってしまいますが。

めりはりをはっきりつけて妥協する
森下愛論

はっきり付け過ぎると、また決裂ですよ。

—水煙抄

秀句鑑賞

—三月号から

小林妻子

嫁は娘でないと聞かせる愛の距離

高杉千歩

娘を持った母の心は痛い程お見通し。里帰りすれば何時までも寝ていられるが、嫁ぐと親と同居でなくとも、張りつめた心の連続だと思う。〝愛の距離〟に敬服。

鉢の水涸らして恋に溺れてる

児玉歌子

老いらくの恋と推察いたします。何はともあれ恋をする人に年齢はなく、若さを保つ唯一の方法かも知れません。

土に生きるとてもむつかしなりました

倉垣恵美

百姓でなければこんな句はできないですね。自分が作って他人に値段を決めてもらい、よしあしも他人まかせ、買うものはみんな人まかせ、割に合わないから後継者などあるはずがない。それでも生きて行かねばならぬ。

愚痴を連れはるばる里の母が来る

森安夢之助

毎日一緒にいると不平不満は溜まるもの。親は親なり子は子なりの意見もあり、時々は町に住む次男を訪れ、愚痴もこぼしてご馳走になり、すっきりとしてお帰りになる。

敗者にも藁を一本投げてやろ

鶴久百万両

全没だったの。今日の選者は若いね。東大入試よりはるかに入選率低かったものね。

髪染めて女の見栄をまだ捨てず

上田柳影

とは言うものの、一緒におればきれいに越したことはない。女はあかぎれのかかとや二段腹のことはあきらめても、髪と衣服にだけは余念がない。笑ってはいけません。晩酌やお小遣いに影響が出ないようになさいませ。

亡母の忌が無沙汰の顔を皆集め

松本一郎

母が亡くなってからは嫁いだ姉も弟も墓参くらいにしか帰って来ない。そこで古里を守る長男の号令で五月の四連休に亡母の法事をするという通知。

ためらいを聞いてはくれぬ自動ドア

池田寿美子

道を聞いても親切に教えてくれないくらい忙しい世の中、自分のことで精一杯という時代です。我慢しましょう。

味噌汁も言い訳を聞く朝の膳

三宅つえ子

「昨夜は二次会が少し長びいたんや」と言訳する夫を朝っぱらからツンツンせずに、知らん顔して送り出すいい奥さん。

心臓の病を武器にしたおんな

山根八重

少しは悪いのでしょうが、何か頼んだり、役でも持って行くと、病気をたてに人の世話をしたがらぬ人がいるものですね。〝武器にした女〟とうまくまとめましたね。

とぼけてもやらねば嫁の座がもたぬ

古川一徳

大家族の中でないと、実感が湧かないと思います。八人家族で大波小波、キリキリ舞いの嫁さんにケチをつけては立つ瀬がない。うまくとぼけるのも年の功。ご立派。

脛かじる方が外車を乗り回し

大西文次

ちぐはぐな敬語で初対面をする

乾隆風

長生きを済まなく思う薬づけ

久野野草

麻生路郎の作品とその周辺

大空のこころ (4)

橘高薫風

花粉に塗みる、死が襲ひ来た
まあいいさ　まあいいさ　眠むる
待て　待て　待て　と白がいふ

大正14年1月3日作の路郎のこれらの句は暗い。句集『旅人』にも掲載されず、かつて誰も取り上げることのなかった句だが、私は注目したい。路郎は新年の巻頭で、創刊後の一年を顧みて、「過去一年は私にとって、いい意味の悪戦であり、苦闘でもあった。同人の多くは微力な私を援けて川柳雑誌の完成へと鞭韃をおしまなかったが、ある同人は創立当時の熱を加速度で失って、同人たるの責任さえも忘れたような顔をしていた。」に始まる一文で、経営の苦労を縷縷述べている。いつの時にも仲間でありながら、仲間を陰険な手で（「煽動」と表現）叩き落す人間はいるものだ。前年秋に健康を害したこともあって、新年早早こころ慰まなかったのであろう。

一方、朗報もあった。

君見たまへ　菠薐草が伸びてゐる

が、俳句界の大家、永尾宋斤氏により絶大の評価を得たのである。ただ一句の鑑賞解説に川柳雑誌5頁近くが占められている。要旨は興味中心の川柳（そこに川柳としての面白さはあった）をあき足らぬとして、思想的に深入りし、生活に直面してくる一面をこの句は持っている。つまり、創作としての川柳の向上が時代と共に進展する事実、作家としての意気を賞揚した文章なのである。これもまたいつの時も「作家の生命は作品にあり」を如実に示すもので、路郎も快哉を叫んだに違いない。

また、路郎にとって喜ばしいことは、先にいち早く新進気鋭の黒木莢豆が同人に参加していたが、堺の大浜潮湯の貴賓室で開催された忘年句会に林田馬行、井上刀三らの出席を得たことで、馬行は新年号の一般雑詠にも出句し、二月から同人に加わった。番傘を離脱して川上日車らと革新の境地を開拓し、雑誌『雪』や『土団子』『葉柳』などを刊行した実績が実を結びはじめたのである。

母親の顔を思はす日が続き　莢　豆
はづかしいせいかもしれぬことであり　莢　豆
ちちははにまだ打明けぬ酒の味　馬　行
酔ざめと云へる淋しい顔を見せ　〃
酔ひしれて掴めば札の重からず　刀　三
資本家にうつむく暇はなかりけり　〃

路郎は五月号で「句作と評論」と題し、大要次のように述べている。

「川柳に議論は要らぬ。黙って作れ。議論通りの句が作れていないじゃないか。こうした言葉が長い間繰り返されて来た。（中略）果して川柳に議論は要らぬものか。（略）私は否、否、否と叫ばざるを得ない。従来川柳に議論は要らぬと叫んでいた人達について考察すれば、彼等には議し論するだけの思想を持たなかった場合が多い（と言い、反論はあっても三行か五行の揚げ足取りに過ぎず、川柳の芸術運動に益することはなかったとして、次のように結んでいる）。黙って作り得ぬ作家は大いに筆陣を張り、黙って作り得る作家は、それらの批評によって自己の人生を凝視する上の解剖刀となし、又、柳誌経営の才ある人々は、それらの作家、評論家のために大いに尽さんか。将来の柳壇が如何に発達すべきかは期して待つことが出来よう。」

川柳塔誌も評論皆無と言うのはさびしい。

選の周辺

正本水客

灯台の夕陽神話を抱きよせる　尼緑之助

昭和46年度路郎賞作品であるが、選考委員に北川春巣、若本多久志、西尾栞、菊沢小松園、正本水客の名があるのもなつかしい。この回ほど、決定が紛糾したことはない。テーマの新しくない句、死や忌を詠った句、前書きがなければ感銘のうすい句を落して、

大文字酔醒めるよりはかなしや
長男の頭へ手を載せやすき背丈

両句とも薫風さんの句で、申し分のない作だが、氏は川柳塔賞の選考委員であるので、今回は見送りたいとの生々庵理事長の意見。次善の策として、栞さんが準推薦として推しておられた冒頭の句に決定した。実はこの句、中間発表の句を選ぶ際、心にのこっていたが、あまりに私の好みそのものであり、表現も水客調で、自句を選ぶようなジレンマが心の中にあった。路郎賞に決定した時、自分の句に出会ったような満足感があったのは面白い。

昭和54年度路郎賞候補作品として私は、

テーブルのりんごも梨も横を向く　高橋夕花

を推した。当時、川柳塔の句は古いと一部の声があったのに対して、こんな句はどうだという反発があった。もちろん、路郎賞にはならなかったが、他社で取り上げてくれた所もあった。

昭和56年度、57年度、58年度、59年度、60年度、62年度と連続して、私の推した句が路郎賞の栄に輝いたが、63年度、平成元年度は準賞に、平成2年度は自信をもって推薦した同じ作者の他の句が路郎賞になった。何年間か続いたうれしい記録を心の中に仕舞っておきたいと、今年度から選考委員を辞任し、萬的さんにバトンタッチした。老兵は消えゆくのみと、マ元帥を真似たわけではないが。

57年度は潮花・水客、58年度は太茂津・水客と、二人の推薦句がダブったが、こんなことは今までになかった出来事だという。ベテランの選者が精魂を傾けて選んだのであるから、ええもんはええ、同じ句が選ばれない方がおかしい。選とはそんないい加減なものだったのかと疑念を持ったことがあった。

朝日新聞に載っている朝日俳壇は、金子兜太、山口誓子、加藤楸邨、稲畑汀子の錚々たる四人の方の共選で、一人十句の発表であるが、複数の選者に同じ句が選ばれるのは三回に一句ぐらいで、一%に満たない確率である。こう見てくると、それは川柳、俳句の短詩が持つ宿命であり、また、特権であるのかも知れない。「選もまた創作である」という言葉が今更のように甦ってくる。

尼崎　春の川柳大会

とき　5月3日(金)午前11時30分開場
午後1時30分締切

ところ　サンシビック尼崎
(阪神尼崎から西へ徒歩200m)

題・選者　(各題2句)投句拝辞
「動く」　小出　智子選
「代役」　坂本須磨代選
「拝む」　塩谷　幸子選
「起伏」　森田　栄一選
「奥」　黒川　紫香選
「腹」　北浦　牧郎選
「樹」　伊東　静夢選

会費　700円(作品集呈)

主催　尼崎川柳同好会

閑話休題

川柳こぼれ話

田中正坊

昨年の二月号から「川柳こぼれ話」のタイトルで、川柳と辞典・辞典あれこれ・川柳と外来語・川柳と表記法・川柳と用字用語・川柳と季節・川柳と漢字―とほぼ隔月で川柳にちなむ雑文を書きついできた。言わば川柳をまるで分かっていない人間が、思いつくままに筆を走らせているような次第で、読者にとっては迷惑千万だと思うが、中には論旨に対する肯定・否定をふくめて意見や感想をのべてくださる向きもあるのは、筆者にとって何よりもありがたい。

それで調子にのるわけではないが、途中で息つぎをしながら、今しばらく書きつづけたいと思う。もとよりこれまで書いてきたことは一つの問題提起にすぎず、川柳について考えるためのタタキ台にしていただければそれで十分である。また、川柳の外側だけをぐるぐる回って瑣末な事柄だけしか取り上げていない、という批判があることも承知している。そのためには、もう少し時間を与えていただき、おいおい本質的な問題にも切りこんでみたいという気持はある。

あちらこちらの句会に足を運び、多くの句集を読んで黙々と句作にはげむことは尊い。しかし、川柳全体の向上をはかるためには、もっともっと〝柳論〟が渦巻かねばならないと思う。過去は知らず、現在の川柳界はあまりにも平穏であり、作品に対する評論もふくめて、議論らしい議論が見あたらない。専門外の人たちから川柳についての評価や意見を聞かせていただくのもいいが、川柳界の内部からもっと討論が起こるべきではないだろうか。それには誰かがドン・キホーテとなって口火を切らなければならない。

○

さて、本誌の読者から五・七・五の間に一字あける句が多いという指摘があった。二月号の「川柳塔」欄だけで七十二か所あるという。本誌にだけついて言えば、一字あけを作者が指定する場合、選者が指示する場合、そして編集者が読みやすい、あるいは読み誤らないようにあける場合とがある。〝流行〟とまではいかないが、最近、刊行された個人の句集でも、五　七・五、五・七　五の間に一字をあける作家が目立つ。これについて、どのように考えたらいいのだろうか。そして、他の短詩型文芸ではどうなのだろうか。

たまたま書架にあった池田弥三郎著『俳句・俳人物語』をめくっていると、この本では、国文学者であり、歌人でもある折口信夫（釈迢空）が自分の作品に句読点や一字あけをつけ、『万葉集』以来の歌にも句読点をつけて解釈したことにならって、引用したすべての句に句読点を打ち、意味がどこで切れるかを示している。例えば嵐雪の「梅一輪…」の句は、

「梅一輪　一輪ほどの　暖かさ」としている。

これを従来の解釈のように「梅　一輪一輪ほどの暖かさ」とすると、意味が大きく変わってくるというのである。三行詩で知られる石川啄木も、歌集『忘れがたき人人』では、全作品にキチンと句読点を打っている。

「文芸作品は、本来、作者の手をはなれたら、読者の解釈に、その価値をゆだねるものなのです。それだけに、作者は自分のうけた感動なり、主張なり、観察なりを、はっきりと読者に伝達する態度がなければなりません」がその趣旨であり、単に表現上の問題ではない。改行や句読点とまでいかないまでも、適切な一字あけによって解釈のあいまいさを少なくすることができるのではないだろうか。

銀河系

河内天笑選

堺市　宮本　かりん

はじめから妻も図太いわけでない
満身の力へ小指加勢する
父さんがにんまり笑うイヤホーン

弘前市　波多野　五楽庵

宿命と割り切っている靴の紐
鬼神とは知らず賽銭置いてくる
したたかな雪に胡座をかくばかり

米子市　八木　千代

優しくなるためにも槍を光らせる
指先にまだ待つものがあって春

大阪市　神夏磯　典子

警察へ敬語を使う人が減り
ライバルの前評判は信じない

青森市　工藤　甲吉

風花がひらひらひらと佳人ゆく
ゴホンゴホンゴホンゴホンと待合室

名古屋市　藤井　高子

許す気になれば昨日が愚かしい
職退いて蛙腹式呼吸する

鳥取県　新家　完司

英雄のように斃れてなるものか
スイッチを切ると戦場が消える

倉敷市　田辺　炙六

樹の下でポンポコリンが始まった
若い気でいるのに皺がよってくる

出雲市　竹治　ちかし

毒を持つ程に綺麗になっていく
年輪の数だけ冬を越えて来た

鳥取県　さえき　やえ

言施かなやわらな言葉くれる人
北帰行　油の海へまようなよ

大阪府　籾山　隆

大阪の讃岐うどんに慣らされる
こしひかり知ったかぶりで食っている

熊本県　高野　宵草

オヤオヤオヤ今朝新聞にないチラシ
お喋りが苦手で蜜柑剝いている

岡山県　小林　妻子

掛け声はやはり竹光だと思う
用無しの僕にお守り買うてくれ

藤井寺市　高田　美代子

知ってると言わず話を聞いてやり
B面に想いのたけを伏せておく

広島市　中村　要

敵を知り己を知って出遅れる
うちの娘が罹ったらしい笑い癌

和歌山市　後藤　正子

点滅を続ける赤にこだわろう
交差点で泪があふれそうになる

羽曳野市　吉川　寿美

単身赴任水が美味いと書いてある
おとぼけが上手になった座りだこ

米子市　新　正子

十八の恋が根雪のままにある
知恵の輪がすこしいびつになってきた

和歌山市　桜井　千秀

どっちにもええ顔疲れ出ませんか
もたついておいてけぼりの縄電車

鳥取県　土橋　はるお

廃車のパトにビニール本が乗っていた
手の鳴る方へ鬼が並んで待っている

出雲市　森山　健歩

擬態して生きていたってしょうがない
喝采を浴びた扇が捨てられぬ

岡山県　清水　悠貴女

温かいコントが欲しい寡婦の部屋
白いもの白く洗って主婦の自負

十和田市　斉藤　劦

新テスト友をつくって来るもよい
紙パック生まれかわってまた来てね

寝屋川市　平松　かすみ

ジャンケンポンで和食に決めました
胸張ってローンも組める若さです

鳥取市　西村　黙光

マッチでも恋の手伝いぐらいする
ペンだこが痩せて動脈硬化症

姫路市　福本好花

露天風呂見知らぬ男なら入る
とんでもないとこに落ち着くビール券

堺市　神原文

余所の酒たまには飲んで来てごらん
浮雲にひょいと乗りたい日もあらん

尼崎市　明壁敏之

筋書が覆された時効まえ
土地があるばかりに絆くずれだす

和歌山市　青枝鉄治

素うどんの味にこだわる古のれん
天神も助っ人ほしい絵馬の数

寝屋川市　江口度

長生きの秘訣スーダラ節唄う
汚れた肺を一気に洗う深呼吸

寝屋川市　堀江光子

思い出を拾い集めて母百句
拾われた顔はしていぬ天下り

今治市　月原宵明

湯煙の主は熟女としておこう
ライバルに突然握手求められ

和歌山市　木本朱夏

風邪楽し溜った本を読み崩す
足寒くないかと電話かけてくれ

八尾市　高杉千歩

下心あって身内にされた席
カルチャーへこっそり通う話し方

鳥取市　武田帆雀

よくやっているが周りに敵多し
いい顔をすると一升空にする

鳥取県　林露杖

呼び合って妻とくすりをのむ時間
売り物にするため研ぐのではない

西宮市　林はつ絵

もの思う本はページをめくるだけ
いい人と言われて腹の立つときも

西宮市　西口いわる

堺市　中川楓

一心同体ですが財布は二つある
帳尻が合わなくなった別れです

吹田市　山本希久子

鳥取県　西原艶子

宿業の道をゆっくり折り返す
群れを離れて父の自由になる斛

鳥取県　乾隆風

和歌山市　田中輝子

離れていった人を敬語で呼んでいた
思い違いと気が付くまでの白い靴

鳥取県　江原とみお

米子市　小村てい子

一を割ってどんぞこ生きた夫婦です
深夜から深夜に渉る貨車である

鳥取県　田村きみ子

米子市　林荒介

倉吉市　渡辺菩句

内心はカッカと燃えている枯木
無駄骨と思うがせねば気がすまぬ

尼崎市　住谷石舟

大阪市　尾崎黄紅

壁にだけ真実語る佗しいな
美しく負けとくなんて出来ぬひと

芦屋市　根来敬

和歌山市　堀端靖子

本分を守り抜いたら肩がこり
市場の魚氷枕をしてもらい

有田市　松井かなめ

和歌山市　古久保和子

ショッピング夫ペットのように連れ
雲行きがよすぎ潮時くるわせる

岡山県　福原辰江

和歌山市　山口三千子

火をつけて素知らぬふりの出来る人
紙コップ堅い約束などしない

鳥取県　伊吹富恵

富山市　舟渡杏花

ラクダの背に揺れる乾いた好奇心
負け犬はらくがき帖に駄々をこね

兵庫県　酒井靖子

和歌山県　三原三究

諦めて本音を吐けば友が出来
ポスターに二枚の舌がはってある

和歌山県　寺田裕美

羽曳野市　芦田絢子

自販機の無言はきっとサービスだ
どちらにも拍手はしない天の邪鬼

和歌山市　山田高夫

鳴門市　八木　芳水
折りたたみ傘は予報をまに受けぬ

鳥取県　鈴木　公弘
しゃっくりの止まる請求書を貰う

堺市　高橋　千万子
耳よりな話灰皿さげてくる

黒石市　相馬　一花
イヤリング一個失くした舞踏会

出雲市　久谷　まこと
いちにちの長さを計る大あくび

竹原市　信本　博子
夢袋小さな穴があいていた

堺市　桜沢　あか里
葱坊主不埒なことを考える

兵庫県　倉垣　恵美
日が過ぎるおかまいなしに日が過ぎる

和歌山市　坂部　紀久子
長椅子へ夫ながながと無職です

唐津市　仁部　四郎
のびのびと育てて恋が多すぎる

鳥取県　最上　和枝
大臣も家では並のおじいちゃん

米子市　木村　冨美子
偶然の出会いに花が咲きました

松江市　竹内　すみこ
いつか飛ぶ私の長い滑走路

和歌山市　福本　英子
義姉さんがよろこぶ腰のはり薬

守口市　森川　まさお
変てこな大阪弁でおべんちゃら

砂川市　大橋　政良
うれしそうな父の背中は久しぶり

兵庫県　遠山　可住
忘れるもんかとこめかみに書いてある

倉敷市　小野　克枝
叫ぶのをやめたら楽になるだろう

寝屋川市　稲葉　冬葉
蛇口ポトポト気になりだした鳩時計

豊中市　安藤　寿美子
神様もけっこう意地悪なんですね

米子市　中井　ゆき
気まぐれの風に一度は乗ってみよう

宝塚市　丸山　よし津
軽くかるく白旗をあげ生きのびる

米子市　政岡　日枝子
胎内の温みにずっと溺れてた

尼崎市　春城　武庫坊
春や春赤い風船買いに行く

鳥取市　大坪　天涯
ふところが寒いカイロを入れてみる

大阪市　藤田　頂留子
そのうちに馴染ませられていく怖さ

香川県　川崎　光
忍と言う一字なかなかのみ込めず

守口市　結城　君子
油断ではないけど回り道してた

堺市　荒川　磯子
かたくなに生きた証の旗だろう

弘前市　村田　善保
ひらがなのおんなが匂う日本髪

姫路市　福島　姫女
情のある人でとことんついていく

鳥取市　小谷　美っ千
酔うほどに自信過剰の顔になる

橋本市　岸本　木魚
待つけれど待たれる人にようならず

宇部市　中村　三良
ささやかな抵抗無神論者です

和歌山市　田中　みね
謙遜が過ぎて相手の気をそこね

唐津市　久保　正敏
プライドを言う程モラル無い女

今治市　渡辺　伊津志
雨垂れの根気に夫も折れてくる

静岡市　永倉　柳華
着道楽食い道楽で寄付はけち

静岡市　小木　久子
父の椅子時に家族に揺すぶられ

東大阪市　松山　隆
同居より独居が気楽とも言えず

鳥取市　美田　旋風
飽食の猫も成人病らしい

鳥取県　上田　俊路
断った話どれもが惜しくなる

豊中市　田中　道胤
残されて仏相手に愚痴を言う

大阪市　稲本凡子
見栄はっていつもカードに嗤われる
東大阪市　今岡貞人
肩書が増えても頭低い人
唐津市　池田遊女
病床の友うっすらと紅をひき
兵庫県　西井つや子
未練いっぱい溜め七十の坂を越す
鳥取県　乾喜与志
味噌汁のおかわりもしていい朝だ
岡山県　江口有一朗
死の渕で出会った仏との絆
静岡市　青柳金吾
年毎に主権を妻に握られる
熊本県　有働芳仙
金のある人の話に弱いのね
和歌山市　上西幸子
カルチャーで騒いで家も子も忘れ
広島県　田村新造
河豚のひれ干す海峡は冬日和
千葉県　上鈴木春枝
逢う人にあわせるタンスかき回す
尼崎市　春城年代
お互いに頼り合ってる夫婦箸
大阪市　塩田新一郎
木枯しの入口見たり経ヶ岬
池田市　岡本吉太郎
テレビ切り近くの寺の百八つ
姫路市　大原葉香

春の芽に思わずそっと触れてみる
鳥取県　土橋螢
雪といういくさを避けて通れない
和歌山市　堀端三男
美容院からダイレクト来る卒業期
広島市　森田文
これもまた便利屋らしい墓みがき
奈良市　井上大
ゴルバチョフほんと日本にきんさるの
豊中市　江口明光
地方選にらみダルマが忙しい
寝屋川市　岸野あやめ
退き際も見事アイアンレディーなり
豊中市　田中正坊
中東に今戦火燃ゆ多喜二の忌
羽曳野市　徳山みつこ
逃げまどう市民はうつらないテレビ
大阪市　板東倫子
カサカサの地球で人が殺し合う
堺市　近藤豊子
チグリスの河文明の末の惨
東大阪市　大平太一郎
フセインに平和日本が試される
熊本県　増田一乗
権威保持米の苦悩を斜に見る
大阪府　深日白光子
湾岸戦果大本営を思い出す
香川県　木村明人
軍備ないかわりに金をせびられる

奈良市　米田恭昌
頬杖をつけば妙案出てきそう
西条市　片上明水
階段を上る女房も齢をとり
岸和田市　古野ひで
古傷のひとつが疼く雨もよい
京都市　松川杜的
余生とや妻に教わることばかり
米子市　光井玲子
胃カメラを通した喉よありがとう
岐阜市　渡辺杏村
駅毎にお花見ツアー募集中
藤井寺市　中島志洋
お隣のLLに耐えバスの旅
和歌山県　西口忠雄
最初から夜勤があるというたのに
姫路市　中塚遊峰
子の荷にはならないように百度石
門真市　藤田翔
丸文字にイラスト入りの子の手紙
貝塚市　行天千代
日曜日皆それぞれに出る支度
箕面市　岩津ようじ
買い出しの思い出の地もビルラッシュ
和歌山市　粉川道子
初まいり余生の追加祈願する

▼夜市川柳募集

第11回「賭ける」　橘高薫風　4月末締切
投句先　堺市堀上緑町2―9―2　堺川柳会

女性コーナー

黄香の忠

小出智子選

体罰のようにこぼした米拾う
何もなかったことにして雪の華
靴磨くきのうと同じ絵を描いて
戦争の食べ物のこと話そうか

大阪市　本間満津子

さむいさむいと殊更に言う誕生日
やさしさに触れると動く古時計

富田林市　池　森子

紙飛行機あなたに届くまでとばす

和歌山市　田中　輝子

注目の手毬が塀を越えてくる

大阪市　北川　弘子

置いて来た影から逃げるひたすらに

和歌山市　西山　幸

大根が無いと淋しい台所

豊中市　辻川　慶子

振り向いて男の裏を見てしまう

和歌山市　桜井　千秀

知識一パイ　リンゴの皮がまだむけぬ

富山市　舟渡　杏花

わたくしが馬鹿になったら済む話

西宮市　林　はつ絵

透明になるまで祈りつづけよう

貝塚市　池田寿美子

シグナルはそろそろ赤になりそうな

和歌山市　榎原　公子

遠景の戦火ドラマを見るように

米子市　新　正子

さまざまな彩を友達から貰う

堺　市　河内　月子

春を待つ　いくつになってもときめいて

和歌山市　木本　朱夏

来る春に備えて絞るターゲット

寝屋川市　堀江　光子

ああでもないこうでもないと生きている

堺　市　近藤　豊子

溝埋める言葉をひとつ温める

西宮市　奥田みつ子

鍋みがく我が老い先もこのように

枚方市　森本　節子

幸せを深追いしすぎないように

和歌山市　堀畑　靖子

愛の字をまあるく描いて宥しあう

島根県　松本　文子

午前二時猫も私も起きている

羽曳野市　吉川　寿美

パスポート夫唱婦随で取得せり

岡山県　矢内寿恵子

あの街に若気で残る悔い一つ

大阪市　西出　楓楽

狂い咲く花でこの頃賑やかな

和歌山市　後藤　正子

赤い糸緩めて暮すようになり

羽曳野市　徳山みつこ

電子レンジの中ではぜてる妻の鬱

大阪市　堀　いくの

つまずきを繰り返してる靴の疵

香川県　川崎　光

親はもうこの世に居ない爪を切る

米子市　政岡日枝子

善良な人ばかりいて肩がこり

芦屋市　黒田　能子

口ほどに迎えてくれぬ目に出会い

西宮市　門谷たず子

孫がきてまぶしい程の笑顔見せ

堺　市　山本　半銭

無駄のない人と暮している疲れ

米子市　林　瑞枝

桜三回咲かねば息子帰国せず

松原市　佐藤　奏月

情けあるお方と信じ嫁がせる

堺　市　高橋千万子

赤ちゃんがいるのにおしめ干してない

広島市　森田　文

タバコの輪つくる熱意には負ける

堺　市　小西　小雪

手から手へみかんを配るよい仲間

和歌山市　山口三千子

遠い日へ縒を戻した鳩ポッポ

和歌山市　田中　みね

朝空に半月笑いたくなるような

羽曳野市　芦田　絢子

スイッチ　オン衿を正して向う朝

佐賀県　寺中三枝子

寝屋川市　岸野あやめ

八尾市　高杉　千歩

吹田市　栗谷　春子

堺　市　板野　美子

プライドと一味違うものを持つ　堺市　鈴木　可愛
花言葉知らないままに花贈る　西宮市　西口いわゑ
淡雪がすげなく消える伝言板　尼崎市　春城　年代
友の訃を聞き涙ぐむ同い年　和歌山市　粉川　道子
静かにしずかに羊の年が来る　河内長野市　植村　喜代
まぼろしのままで終ってつつがなし　名古屋市　藤井　高子
男がいて女もいてる世に独り　八尾市　宮西　弥生
ケ　セラ　セラ甘く見すぎた老後策　兵庫県　円増　純子
長男よ何て言い訳下手だろう　柏　市　上鈴木春枝
風景にわらぶきを見たやすらぎよ　守口市　結城　君子
手の皺で占えるほど軽くない　和泉市　中川　楓
引き算で私の罪は消せるかな　和歌山市　福井　桂香
足もとを見られる靴を買いかえる　和歌山市　森　茜
私の噂がとどく寒い朝　松江市　竹内すみこ
正直に言って下さいお月様　三笠市　山田すみ子
枯木にも春は近いと言いきかせ　堺　市　桜沢あか里
美しい手帳いいこと書いておく　鳥取県　西原　艶子
夢いっぱい枕の下に溜めている　出雲市　吉岡きみえ
お互いに自立の話忘れよう　米子市　小塩智加恵
黄色いリボン付けて反戦示しましょう　摂津市　もちづき遊美
大仏の眼差しに触れ洗われる　姫路市　福島　姫女
小遣いの値上げを迫る声変り　和歌山市　福本　英子
姑を看取って姑の心が判りかけ　京都市　山海　友熙
初夢をひとり炬燵でほくそ笑む　松江市　浦辺　静江
いい友に会えて昨日が暮れのこる　岡山市　川端　柳子

背かれて笑う仮面を作り替え　岡山市　小野　克枝
私の火小さくたたんで娘の袂　島根県　栂　みどり
言いにくい事をすらすら書いている　米子市　光井　玲子
台風の余波を残して孫は去ぬ　姫路市　中塚　遊峰
櫂をこぐ　すがる藻さえない海で　米子市　茂理　高代
遠景に微笑みかわす友がいる　鳥取市　小谷美っ千
開演ベル隣の席はまだ来ない　竹原市　信本　博子
真相を少しずらして裏を読む　出雲市　園山多賀子
四面楚歌お灸を据えているのです　和歌山市　松崎　幸子
バランスのとれた料理は気に入らず　唐津市　浜本　ちよ
通知表見る母さんの目が怖い　鳥取市　前田　一枝
平和だな炬燵でみかんむいている　姫路市　丁坪サワ子
手鏡をかざせば夕陽燃えている　鳥取県　森山　豊子

ゴシックの**一句目**、戦争のあったことは別として、大正生れの人間はお米というものを信仰的なまでに大切な物と考えて生きて来た。この作者はお目が不自由な方であるが、それ故に真実があり胸を打つ。この作者でなければ作れない句であろう。**二句目**、この世に二人だけしか知らないことがあってもよいではないか。何もなかったと思えば雪も淡く消えてしまう。雪に託して昇華された。**三句目**、妻として朝の靴を磨くとき、今日もなんの変りもなく朝を迎えたことに気付く。平凡な暮らしを詠ってあるのにこの句には納得させるものがある。**四句目**、戦争の怖さを知っているものには話しても話し足りないことがある。若い人達は本当の戦争の恐ろしさを知らない。湾岸戦争は今華々しい戦闘の様子が報道されているが、一日も早い終決を祈るばかり。

◇

投句先　〒544　大阪市生野区勝山南1—18—10　小出智子

初歩教室

題 ― 開幕

辻　白渓子

今月の題「開幕」は、案の定、野球と舞台の開幕が多かったように見受けられ、特にプロ野球はその期待が幅広いように思われた。

開幕戦よそに二軍は玉の汗　方　子
（開幕へ二軍は二軍なりの汗）
開幕のシーズンわいた世界中　美恵子
（開幕の予想新聞よく売れる）
トレードで遺恨試合の開幕戦　忠　禄
（トレードが裏目開幕戦に負け）
汗流し開幕前の猛特訓　真　澄
（開幕へそなえ特訓汗をかき）
開幕で一つの山を越えました　富喜子
（開幕で一つの目標やっと済み）
プロ野球開幕間近かオープン戦　はる子
（開幕のオープン戦にある話題）
開幕からは家事の手抜きで阪神びいき　円　女
（家事手抜き開幕テレビへ齧りつく）
開幕の仕上じょうじょうタイガース　幸　枝
（タイガースも開幕自信ついて来た）
開幕が待たるる球宴春休み　一　乗
（自主トレの期待開幕待ちわびる）
野球開幕家の茶の間が賑わしい　志華子
（開幕の野球茶の間が騒がしい）
開幕にスケットの腕に期待かけ　房　枝
（助っ人も開幕手ぐすね引いて待ち）
シーズンの期待開幕戦に賭け　絢　子
（開幕の初戦ファン沸きに沸く）
口々に今年占う開幕戦　太一郎
（開幕に先立ち優勝予想され）
幕開ける迄に精力皆使い　侑　里
（幕が開くまでに応援疲れ切り）
プロ野球キャンプ開幕華やかに　ふさ子
（開幕へキャンプの話題多すぎる）
開幕を長蛇の列に加わって　秀　香
（開幕へする行列は苦にならず）
オープニングピッチャーだけは譲れない　(靫)隆
（開幕の投手にドラフト出してくる）
開幕へルーキー競うオープン戦　金　吾
（ルーキーがぶつかり開幕話題呼ぶ）
開幕はエース対決プロ野球　渓　声
（開幕の話題対決するエース）
開幕の日から優勝背負わされ　時　弘
（開幕へもう優勝を期待され）
キャンプイン開幕までとファン待つ　タ　ミ
（開幕を待ち焦れてるキャンプイン）
開幕を待つ行列の中にいる　和　枝
（開幕へ胸とどろかせ列にいる）
解説者開幕投手のメドたたず　春　風
（開幕の投手解説決めかねる）
スカウトの待つ力量を開幕に　章　久
（スカウトの期待開幕裏切らず）
草野球開幕一戦地につかず　吉太郎
（開幕の初戦もつれた草野球）
次に選抜の行進曲にポンポコリンが採用されたと聞く。そんな句が数句届いた。
選抜の開幕待ってる行進曲　治　江
開幕日ポンポコリンに足あわし　春　風
球児の春ポンポコリンで開幕し　和　子
開幕はポンポコリンで行進す　(美)美代子
開幕にポンポコリンで迎えられ　暁　子
（開幕をポンポコリンで盛り上げる）
（開幕へポンポコリンの足揃う）
次に舞台の開幕その他について列記する。
開幕の暗い客席すべり込み　暁　子
（開幕へ客席ゆっくり暗くなる）
開幕へベル呼吸が止まりそうになる　杏　村
（開幕のベルへ呼吸を止めて待つ）
初舞台わたしの幕は開かれた　公　子

（幕開くと私一人がいる舞台）
なりやまぬ拍手に幕がまた上がり　春子
（もう一度幕が上がって拍手来る）
キッチンの開幕ベルは嫁が押す　民子
（キッチンの開幕嫁に委しとく）
開幕のブザーに煙草消し急ぐ　君江
（開幕のブザーにゆっくり煙草消す）
開幕への衣装にセリフ準備中　みつこ
（開幕の衣装にセリフ付けている）
幕開けの団結心は今いずこ　ちず子
（開幕の団結過去になった愚痴）
開幕へ隣のいびき気にかかる　伊都子
（開幕へ隣のいびき邪魔をする）
南座の開幕告げる時を待つ　豊子
（南座の開幕京を春にする）
開幕を知らずおしゃべり遠い耳　静江
（耳遠いのが開幕へまだ喋り）
開幕を若い笑顔が盛り上げる　マサエ
（開幕の受付笑顔が揃えられ）
開幕の前口上が長すぎる　友子
（挨拶が長びき開幕じらされる）
開幕のベルでざわめきピタリ止み　繁男
（開幕のベル客席を暗くする）
開幕は旅も芝居もときめいて　しづ子
（開幕の旅の芝居にある期待）
ライセンス握り第二の船出する　隆雄
（開幕の船出へ握るライセンス）
開幕間際大きな人が前の席　すみれ
（開幕へ邪魔する人が前に居る）
ベルが鳴り終わり戦争幕開く　ようじ
（開幕のベル戦争の映画見る）
渋滞道路開幕までにと眉ひそめ　好花
（開幕へ高速すぐに混みはじめ）
開幕に子連れが弁当広げだし　高雄
（開幕へ家族弁当開けて食べ）
開幕ベル弁当途中でやめておく　保夫
（開幕ベル弁当食べてるのが居らず）
定退で第二の幕を開けて発つ　彩子
（定退の開幕子会社譲り受け）
幕開くとやっぱり俺は斬られ役　清柳
（幕開くといつも斬られる役が待ち）
開幕のベルが鳴るから箸をおく　敬
（開幕のベルへ客席食事済み）
娘の舞踊開幕袖で息をのみ　(松)隆
（開幕の袖ではらはら娘の舞踊）
もうすぐに開幕と風が告げに来る　志重
（開幕を告げる優しい風に会う）
開幕に人と言う字を呑んで出る　一枝
（開幕の緊張人の文字を呑む）
開幕のベルへ隣席まだ来ない　静子
（開幕のベルへ隣席空いたまま）
初土俵開幕前の超満員　幟
（開幕へ超満員と言う土俵）
開幕へ裏方汗と気の配り　芳水
（裏方の汗開幕へこぎつける）
開幕の前に襲名披露する　高栄
（襲名の披露開幕へ人気呼ぶ）
開幕を飾り風船山を越え　洋
（開幕を祝い風船空に舞う）
開幕のテープカットの胸光る　姫女
（開幕のテープカットへ名士呼ぶ）
開幕のどん帳おごそかに揚がり　おさむ
（開幕をせかして拍手鳴りつづけ）
幕あけて思わぬ客に芸が生き　軒太郎
（幕開けた素人芸に客が沸く）
開幕の余韻ごみの山が聞く　和子
（開幕の人出が生んだゴミの嵩）
今月の着想・表現の良い句―
人生の開幕孫の就職日　芳水
開幕の時もて余す多い私語　高栄
開幕に合せて夕餉早じまい　タミ
私の句
開幕のキャンプに野茂を記事に出す
開幕の招待券がもう届き

◇

題「合鍵」4月15日締切（6月号発表）
宛先　〒569　高槻市桜ヶ丘北町3―19　辻　白渓子

記念

松川芳子選

吟題課

いぶし銀位の記念がふさわしい　多賀子
旅記念キーホルダーを孫に買う　智加恵
再会の記念に川原の石二つ　てる
記念切手きっと心の温い人　杜的
スタンプを記念に捺した旅の駅　新造
参加賞タオル一枚ミカン二個　次男
食卓の御馳走記念日を知らせ　柳子
サイン帳記念の一句添えて置く　よし津
紀元節と父の手帳に書いてある　保州
記念写真引っ張りだこの同窓会　信義
記念写真みんないい顔して座る　文子
改心の封書へ記念切手貼る　しげお
記念写真に元気な頃の亡母がいる　諷云児
結婚の記念樹ドラマと共に老い　典子
記念樹の下で恩師を待っている　三男
結婚の記念日ごとに強くなり　螢
記念樹を植えて友好信じてる　達子
合格へ記念の絵馬をかけ変える　寿恵子
自分への記念に旅の土産買う　希久子
捨てもせず使いもしない記念品　弘朗
夫の忌を刻む記念の白木蓮　元江
成人の記念写真は写真屋で　シマ子

記念写真亡友の変らぬ笑い顔　寿美
記念樹がときどき聞かす相聞歌　雄々
胆石を記念にくれた退院日　高夫
記念碑を一つ残して事業消え　正坊
乾杯の記念野心の手が高い　帆雀
記念日をいくつ凌いで夫婦坂　求芽
結婚記念指環へ愚痴が出はじめる　明水
記念写真目だちたいのが前にいる　鉄治
記念日が繋ぐ男と男の手　虹汀
記念樹の桐と娘は同い歳　雀踊子
記念品貰った頃から惚けて来る　伊津志
記念品また感激が甦る　渓声
記念日の日記は白のまま耐える　正子
僕なりの記念に旅の箸袋　南奉
記念こけしその時々の旅の顔　康子
佳

他人から見ればつまらぬ記念品　重人
記念品意義のあるのは私だけ　あずき
結婚記念日結び直している絆　輝子
でぼちんを叩いて貰う記念品　愛論
記念日の八月海の挽歌聞く　京子
人

旅の記念竹人形を一つ買う　いわる
地

八月の酒は悲しい記念日だ　正敏
天

老竹の一節ごとにある記念　江口度
軸

記念日を幾つ重ねた座りだこ

技術

北山悟郎選

伝統の技術がひとつ消える日本　静子
重役にゆうずうの効かぬ技術畑　高雄
寸分の狂いも見せぬ指物師　理瑛
ハイテクの世に手造りの技が生き　倫子
リニアから豆腐まで技術と言えば皆技術　蕗児
出る杭は打たれる技術もほどほどに　杜的
自慢の孫は指物師のまだ卵　度
ハイテクの兵器おそれる戦中派　シマ子
その中に技術屋もいる子だくさん　よし津
指先のサインで動く女秘書　文子
指先の技術帆船が瓶の中　隆
技術家の女の産毛髭に見え　高明
板前の技術に惚れて客が来る　愛論
立春にバイオの苺首揃え　諷云児
ハイテクの家で昔話が温かい　文
ハイテクの影で地球の割れる音　枯梢
CMをしない技術がよく知られ　ただし
ロボットにとても好かれる技術屋で　重人
技術員奥の深さが重い口　三男
からだが覚える技術に耐えている　遊峰
ハイテクの火遊びやめよ砂嵐　雀踊子
正坊

泥を捏ね命吹き込む京人形　旭　恒
技術力だけでは勝てぬ事がある　狸　村
目に見えぬ技術に感謝しています　螢
技術魔が家にいるから片付かぬ　弘　朗
技術には定評があるネジ回し　しげお
ハイテクに温い心を埋めて置く　彩　子
生肝の技術に託す子の生命　寿　美
ハイテクが神の領域まで侵す　高　夫
技術にも諸刃の剣がトマホーク　隆
技術屋の卵の黄身が薄かった　はるお
秒読みの試行錯誤となる技術　白光子
一筋の技で情けに遠くいる　寿恵子
老練の技術ロボットへの焦り　テ　ル
技術とは魂ですと仏師の目　南　奉
技術未だ神に及ばぬ臓移植　たかし

佳

テストハンマー妥協出来ないピンホール　勝　美
技術者の画布に地球の未来像　結　美
母の愛技術諸刃の肝移植　章　久
技術には負けぬ年輪持つ大樹　元　江
不自由な足がカメラの鬼育て　虹　汀

人

ハイテクの兵器を誇示してはならぬ　雄　々

地

技術者の一徹亡父の血が疼く　芳　子

天

ロボットをこしらえたのは人間だ　小林妻子

軸

万物の興亡ハイテクがせめぎ合い

郵便

児島与呂志選

年賀状年々友が減る怖さ　新　造
年金の暮しにも来るダイレクト　希久子
郵便を何より待ってる母が居る　高　栄
追伸の一行　心温まる　瑞　穂
追伸へ本音が覗くのに気付く　温　子
郵便受け趣味の封筒お人柄　金　吾
郵便受けことりと郷里の音がする　洛　酔
さよならが郵便受に落ちていた　諷云児
郵便が素通りをする日の寒さ　ちかし
言い難いこと郵便でズバリ書く　三　究
ワープロの手紙に添えた女文字　志　洋
書留のハンコは軽い返事する　愛　論
貯金なら郵便局と決めている　弘　朗
喜怒哀楽呑んでポストの無表情　寿恵子
郵便で時報がわかる過疎の村　夢　酔
郵便と電話をいつも待ってます　重　人

文

電話ではとても言えないからハガキ　規不風
詫状を郵便で出してから帰る　鉄　治
郵便が届いて安堵する転居　有一朗
郵便で互いの心温め合い　正　直
断りはハガキにしよう気兼ねなし　たず子
郵便の束にときめくものがある

一円は忘れたことにしたはがき　妻　子
差出し人俺だで解る右上り　正　敏
旧姓にもどった女から賀状　石　舟
郵便受の中に見つけた明日の幸　枯　梢
うれしがる母へ季節の便り出す　雀踊子
旅三日絵ハガキの方が先に着き　杜　的
一円の切手を貼ってくるはがき　螢
郵便が私とあなたつないだ日　紀　一
一通の封書に炎埋めてある　善　保
もう一度チャンスをくれるハガキつく　芙美子
雪かぶる郵便箱に花便り　俊　路
郵便を心待ちする過疎の母　通　彦
郵便受けの音でわかったいい返事　文　子
拝啓のない郵便で義理つなぐ　たつみ
迷子札貼って郵便舞い戻り　高　夫

佳

郵便の山が迎える旅帰り　典　子
郵便がコトリと温い音で呼ぶ　結　実
美しく別れて郵便ぷつり切れ　忠　雄
冬の絵に赤いポストが一つある　正　坊
春色の封筒で出すいい便り　南　奉

人

郵便箱そろっと選挙匂いかけ　可　住

地

郵便番号五桁に棲んでいる作家　保　州

天

投函の帰途に気づいた誤字一つ　早川渓声

軸

気がかりな便りを待っている親で

平成二年度　一路賞

秀句

幸せはじっくりがよし豆を煮る　田中正坊

評　路郎賞に匹敵する人間味溢れた豊かな内容のある立派な句です。読む人の感性に任せます。言うことなし脱帽。（**久保　正敏**）

さすがに天の句ばかりで甲乙つけがたく、苦心いたしました。しかし、すばらしい作品を俎上に載せる楽しさも味わいました。（**小林由多香**）

「豆を煮る」モチーフはよく詠まれていますが、そのたびに郷愁に似た想いを感じます。家庭を守ることを幸せとする女性が少なくなってきているせいでしょうか。（**西出　楓楽**）

佳句（六句）

まごころを送るまごころまた届く　西原　艶子

法律にうとい夫婦でそれでよい　岸本　木魚

特別な人に逢う日の紅を選る　西口いわゑ

日めくりのラストゆっくりちぎりたい　西原　艶子

出稼ぎへ母の鏡を父が借る　片上　明水

美しくなろうと鏡みがいてる　松本　文子

田中正坊

不幸や災難はある日、突然に訪れますが、ほんとうの幸福は時間をかけて築き上げるものだと思っています。同人になった年から一路集（課題吟）へ投句しており、今回、それがようやく努力賞として実ったということで感激を新たにしています。ありがとうございました。

柳歴

一九八二年　「水煙抄」へ投句
一九八三年　川柳塔社同人
一九八四年　もくせい川柳会を結成

平成二年度　各地柳壇賞

秀句

森を抜けると風は無色になって吹く

春城武庫坊

評　人生という荒波を精一杯乗り越えて来た男の気概が満ち満ちていて、さわやかな作品です。森の中に作者の思いが凝縮されています。風は元来、無色透明なのですから…。

（小島　蘭幸）

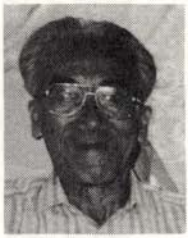
本年度の各地柳壇賞にこの句が輝いた。無色な風を詠むことによって、森の霊気を孕む四季折り折りの風を、より鮮明に描き出された作者の、洗練された軽妙な手法に、学ぶところが多い。

数多くの佳句の中で、最も心に残る句。さらりと詠まれた中に、味わう者の心まで浄化されるように感じた。風は旅人、森を抜けるたびに清められる。

（藤井一二三）

佳句（十句）

明日の夢乗せると消えるシャボン玉　遠山　可住
ひとりでもおはようおやすみ言うて寝る　山内　房子
パレットに春の絵具があふれだす　木本　朱夏
列島に地響き立てて友が死ぬ　新家　完司
心と心ふれあう痛さ抱いている　神谷凡九郎
まだ余裕あるから涙こぼれ落ち　福留　有佳
喪があけておいしいものが欲しくなり　小林由多香
善人の帽子に止まる赤とんぼ　田中　正坊
Sの字をたどれば人生おもしろい　春城　年代
煩悩はいつも吃水線を越す　河内　天笑



春城武庫坊

各地柳壇賞決定の電話を聞いた時、一瞬担がれているのではないかと思いました。年間一万数千句の中から選ばれたことに嬉しさと感激で夢のような気がしました。

受賞を古希越した駄馬への鞭として私の道を精進したいと思います。ありがとうございました

柳歴

昭和五十八年五月　京都塔の会吟行に参加
昭和五十八年七月　川柳塔水煙抄に投句
昭和五十九年五月　川柳塔社同人

原稿は川柳塔社事務所へお送りください
毎月25日締切厳守　編集部

久世川柳クラブ　二宗　吟平報

残り火をまだ燃やしてる姫鏡　伊久栄
追伸を先に読ませる娘の便り　江山
決心のついた処で夢もさめ　半仙
立候補下馬評の顔浮き沈み　吟平
立ち聞きの不覚くしゃみが出てしまい　すみれ
古屋敷老松独り立つ気韻　恒心
グループがみんなで見守る恋の花　甫正
集まってグループ善意の草むしり　ふさえ
グループが癒やしてくれた孤独感　秀香
グループから抜けると止まる糸車　山人
今日も夫婦連れでグループを妬かせ　邦人
夢ばかり食べる男で職がない　賛平
立ち話そそくさ不満だけ喋り　志重

岸和田川柳会　芳地　狸村報

あったかい人情満ちてる細い路地　ひで
脱皮して娘は人形へふり向かず　月子
いややわと灯りを消した細い指　一弥
この宿の躾がわかる欠け湯呑み　甘平
仲人が意外な話聞いてくる　白光子
針灸で定年までをつなぎとめ　冨志子
ひな祭り間近人形しゃべり出す　こう
身を細め子の不始末を詫びている　通彦
レコードの針が昔の僕にする　浪速子
電信柱と言われ続けて父達者　文
不揃いの針目やさしい亡母の衣　すみえ
針仕事めっきりやせた母の肩　萬的
物別れ湯呑みのお茶も冷えたまま　小紋
細いのになんやかんやとよく食べる　さよ子
ぶきっちょな男やもめの針仕事　勝晴
罪いくつ背負わされたか流し雛　柳宏子
細い目に温もりがあるえべっさん　狸村
試着室の鏡で細く見えたのに　恵空
友だちのくれた湯呑みがよく喋る　天笑
人形のような女が似合う古都　武助

川柳クラブわたの花　片上　英一報

酸性雨から守る巣箱をかけてやる　シマ子
料亭の贅重箱に三ヶ日　章
宝石箱もらって何を入れようか　龍襄
箱鮨をほめて戴く寒の入り　君江
箱溜める妻は上手に使いわけ　一風
去年よりちょっと豊かにお重箱　朝子
出前箱信号待ちの長いこと　初子
重箱へパックのお節手抜きする　ますみ
ポイ拾ての函が魅力で拾う人　トシエ
中身より箱代高くつく土産　みき子
箱の中おさまりきれぬ現代娘　芙美子
中が見たい割るにはおしい貯金箱　春子
本箱も積読だけの新刊書　幸枝
大阪の讃岐うどんに慣らされる　隆
お休みが欲しいと心臓脈が飛び　しげる
親も子も努力がみのる春をまつ　暁子
月の出に影ふみおうて母子駆け　その
影ふたつもつれもつれてイブの夜　弘直
豊作で米の栄養高くなり　泰成
古々米もさばけず更に来る外米　正子
駅弁はフタの飯粒から食べる　英一
宴会を茶漬で締めるおじんギャル　一雄
振袖が米に化けたと戦中談　友甫
米のめし食べて米寿を迎えたい　美津留
ギャンブルの父に見せない貯金箱　鬼遊

高槻川柳サークル卯の花　辻白渓子報

目玉焼き軽い約束してしまう　正坊
冬の雨聴く禅の一字を前にして　作二郎
内縁のままでお米を研いでいる　礫
其処ここに春の声する寒便り　よ志子
妻だけが二泊三日の旅に出る　紫香
それぞれに飲むお薬がある夫婦　萬的
豆腐一丁老いから奪う消費税　鬼遊
浮き沈みは言わず南天の実が赤い　杜的
カラオケで唄い寝言で又唄い　(松)芳子
後ろ姿は頑固な父と瓜二つ　しげお
米櫃に一合枡が威張ってる　武庫坊
うしろ姿に怒っていると書いておく　年代

荒波を越えておんなに歳がない　冬葉
さむ空に桶浮かばせて伊勢の海女　茶の子
エプロンが母の姿で干してある　諷云児
人形の魅力に背すじ寒くなる　スミ子
母だけは温い拍手をしてくれる　(河)芳子
雑魚寝から寝言が洩れた旅の宿　花代子
覚えない寝言で妻に叱られる　越子
その先が知りたい寝言聞きとれず　とおる
拓本をとると浮かんでくる昔　恵美子
一言のせりふのような寝言きく　真笑
横文字で言えば照れずにすむ言葉　佐代子
寝言にも日頃の不満ぼやいてる　豊子
逆境に生きる姿を絵に残す　百合子
怪しげな寝言に耳をそばだてる　正恋
老妻もおんな寝言でもめはじめ　英子
花名刺の名前がうっかり出た寝言　白渓子

川柳化粧櫓　植村客遊子報

逢うて来たことには触れず眼鏡拭く　岳詩
栄光の過去にはふれず独り酒　輝月
風呂敷に母の心は紐を足し　大鷹
口悪い亡父の言葉をなつかしむ　遊峰
ポンポコリン母娘で唄っている平和　サワ子
闘病記子にも言えない事がある　葉香
盆栽の一枝を切る手がちゅうちょ　礎石
スリルには縁ない父の石頭　秋信
用のない指に燦然二カラット　三青
わが娘ながら輝いていた高島田　悲子
我が子から初めて貰うお年玉　文

ジェスチャーの上手な歌は人気あり　姫女
老友三人ガラス戸震わす笑い声　好花
初化粧しわと白髪に紅をかく　春蘭
うるさいが尋ねて来ないと気にかかる　美代
お正月楽しく待ってる赤実千両　茂章
自分だけ若い心算のクラス会　嘉
凧も独楽も飾りとなって寝正月　おさむ
八十路すぎ眼鏡はいらぬ老い強し　永楽
若者と飲んで昔の日に返り　客遊子

川柳東大阪　森下愛論報

花占い心の中に棲む天使　信治
天使迎えた夢を見て身籠りぬ　文秋
煩悩を天使なかなか付き合わぬ　加代
不老薬飲んで天使も淋しそう　愛論
ボーナスの袋そのままローン行き　晋吾
招かれた客も手伝う台所　覚然坊
まとまらぬ話へ走る十二月　滋啓
今埋めた穴を掘ってる忙しさ　度
過労死と背中合わせの宮任え　百合江
師を越えることが師への恩返し　孤舟
落ちぶれていた恩人を捜し当て　湖風
恩人の喪中葉書を寒く読む　作二郎
母子家庭ひげのサンタを信じる子　隆
理不尽にひげは人質もてあそぶ　猪太郎
洋凧に負けるな奴凧のひげ　頂留子
易の灯のひげも商売道具なり　雀踊子
待つ鳥に忘れぬ熟柿の落ちる音　章久
旗色が悪く忘れたふりをする　美子

川柳岩出　小倉アサ報

もう信心なんかするかと天の邪鬼　忠雄
壁のない茶の間の集い子ら育つ　英子
善人がする信心に嘘がない　精子
ゆるがない絆茶の間で暖める　和子
石段に老化の度合試される　瑞穂
行きづまり信心ふっと思い出す　義美
石段を登りつめるとみ仏が　千代子
究極に助けもとめる神だのみ　永年
信心も打算と背中あわせてる　保志
石段を登って見れば波静か　喜市
この願い石段更に長くなる　アサ

佳句地十選（三月号から）

松川杜的選

おさげ髪恋を恋とも気がつかず　朱夏
それぞれのリズムで朝の靴が出る　くに子
旗の波あれが見納めだったのか　正坊
いいはなしお針が出来ることも添え　可住
何一つ不足ないとは他人の目　ふみ
ご先祖に叱られそうな鏡餅　藻介
運勢が変わるあなたに逢うてから　いわゑ
気の弱い私がかけるサングラス　白柳子
句読点打つたび愛が遠くなる　雄々
悟り開いたか表を掃いている　寿美子

茶の間から母と妻との初笑い　悦男
信心とあちらこちらへ落ちつかず　正直
神の加護リズム狂わぬ我が余生　春子
絵馬祈願石段一歩踏みしめる　愛子
石段を登る二人の愛確か　昌子
石段を登る菩薩の顔になり　綾子
坂ひとつ越えると信心深くなる　与呂志

川柳ささやま社　遠山　可住報

真心の手紙生きてる小引出し　恵美
青春へ戻してくれた古手紙　純子
知恵のない顔で浮いてる昼の月　テル
手の届く近くに夫の思いやり　貞子
掌の中の知恵小出しする母の海　とみ子
雑談の中でわが身の幸を知る　靖子
働ける幸せ顔に書いてある　ヒサ子
灯りみなつけて幸せそうな顔　和子
遠い日の誓った言葉を抱きつづけ　つや子
白寿駅メドに鈍行のレール敷く　素水
アドバイス不思議な母の知恵袋　百合子
それなりが揃って知恵もそれなりに　冨美
神棚でほこりかぶっている誓詞　文平
万策の知恵をカラスに笑われる　可住

おっぱこ川柳会　松村迷観子報

遠回りして来た道に花が咲く　白柳子
いい話運んで来そうな風のむき　伽名子
ボーナスを手にするまでの旅プラン　かおり
やわらかい言葉でけじめつけてゆく　マサエ
縁談も肩書きだけでは決められず　よしみ
あんこ餅焼ける匂いに母思う　迷香
動くだけ金がとび出す年の暮れ　放任
肩書きが時々邪魔をしてくれる　明人
冗談もうっかり言えぬ人といて　迷観子
倖せを願って送る子の巣立ち　ひかり
生きている証と痛みなでている　スミエ
スピードがあの世へ送るバロメーター　迷貫
忘年会過去の肩書き邪魔になる　いさむ
肩書きで会社人間ものを言う　正雪
残り火も少なくなったお正月　吟笑
競い合う男の勝負は平常心　チカエ

サークル檸檬　友碇　雅子報

カラオケにしても軍歌は唄わない　泰子
ねじを巻き出番待ってる古時計　美子
いい話しっかりねじを巻いておこ　三四子
田舎にもカラオケセットあるは佳し　登志実
カラオケが佳境に入る満中陰　美緒
百人一首母が出番のお正月　雅子
あまつかぜ手と手がからまり胸おどる　登美子
かるた取りじゃじゃまる君やちびまる子　智恵子
カルタ取り奥で小豆が煮えている　千代女
万葉の愛よみがえるカルタ取り　今日子
フセインの髭巻き舌でまくし立て　薫風

三幸川柳教室　三宅　保州報

二番手がゆとりをもって追ってくる　保州
壁に耳油断はできぬ声ひそめ　千枝子
油断したつけは自分にふりかかる　道子
省みるゆとりもなくて愛一途　玉枝
駄馬は駄馬なりのゆとりで送る日々　かなめ
油断した隙に風船手をはなれ　芙美子
追い風に油断していた気のゆるみ　昭枝
深呼吸一つでゆとり取りもどし　純子
懐のゆとりが丸くする言葉　鉄治
真夜中のゆとりへチーズケーキ焼く　博章
取っておきの芸でピンチを切り抜ける　三千子
ビタミン愛不足心がひび割れる　朱夏
屈託のない顔ピンチ寄せつけぬ　敬子
ピンチには明治の人の知恵も借り　美子
手枷足枷あってピンチを免れる　公子
慢心と油断が同居した落ち目　信一
水割りを甘くみすぎた二日酔い　町子
靴ぬいでわたし一人になるゆとり　茜
また別のわたしをキープするゆとり　靖子
頼り甲斐ないがやさしい子に育ち　幸子
誰にでも頭を下げているゆとり　桂香
小錦に貰ったようなセーター着る　正雄
まだ笑うゆとりがあって泣いて見せ　晏
ピンチにも強い笑顔の面を彫る　和子
懐刀錆びて窮地に立たされる　みね
一筋の光を頼る闇の中　高夫
ライバルに血止め薬を塗ってやる　好笑
七光頼りにしたが目が出ない　親蹠
油断した背なに二の矢が飛んでくる　由梨
野次馬の意見も聞いてみるピンチ　千秀

川柳ねやがわ　高田　博泉報

暖冬を喜んでいる猫と祖母　あいき
暖冬に毛皮いらぬと負け惜しみ　藍子
来年は夫にやさしくしてあげよう　菜月
残り物に行き届いてる幹事の目　波留吉
熟年の話の種に夢がない　時弘
話題ない町で野犬の増え続け　一鬼
後方で話題になっている私　一笑
価値観の違い育ちのせいにする　庸佑
人妻が何故か優しくしてくれる　勇太郎
孫の世も地球は青いと言わせたい　君子
漬け物の味も変えてる温い冬　てまり
来年も成長出来る余地がある　博泉
抽せん機の中に残った大当り　あやめ
十二月また速達を小走りに　光子
三猿に徹し残る世丸く生き　吉之助
気付かれぬよう残しとく好き嫌い　頂留子
父権地に落ちた髭でも伸ばそうか　雅文
うちの空ミールが通る日本晴　一芳
話題なく落葉のゆくえ見とどける　かすみ
買い物籠の犬は話題を聞きあきる　度
夜のしじま星の雫か屋根の音　一途
話題にはことかきません私小説　冬葉
来年は宇宙旅行へ組む予算　三千子
来年のシナリオ鬼の膝で書く　良三
暖冬へ母も乳房も眠くなる　速水
年賀状書く気にならぬ暖い冬　シマ子
話題の渦中へ覚悟してきた女　亜成
ダルマの目半分だけで年を越す　柳宏子
話題のなかへひとつの面影を捨てる　礫
暖冬の大山ベレー帽ほどの雪　薫風

きゃらぼく川柳会　政岡日枝子報

名月に追われ追われて帰ります　保子
菊咲けば菊の香りに亡夫追う　登栄
還らない青春追うて句を作る　朗子
追うことをやめて握手をして帰る　日枝子
実家の椀に亡父の魂しずませる　てい子
追っかけるのはよそう迷惑かも知れぬ　夕子
雑木林に追いつめられて眼をひらく　晶子
大波小波私の生活追っかける　八重子
鬼ごっこ好きな子ばかり追っかける　松子
師を追うて迷路で喘ぐ穴の中　恵子
樹脂加工されてお椀の顔になる　富美子
追いこまれやおら本気になる駄馬で　ふみ
追いついた毬の空気が抜けていた　花子
夕焼けの海へあしたの夢を追う　玲子
死神よお先へどうぞ追わないで　寿々子
わたしの影陽がおちるまで追うて見る　亜弥
鉛筆の芯は喜劇を追うている　瑞枝
追いつめるには水筒が軽すぎる　千代
深追いをして戻らない鳩一羽　やえ
夢を追ういのちに届く唄を追う　荒介
豊かさを追ってここまで来たけれど　正子

川柳大阪　高須賀金太報

今更に足音高めることも無い　与呂志
お隣の主人と比べないように　重人
長電話手持ち無沙汰のコードレス　柳弘
鬼の名を騙ると人間弱いもの　比呂志
京の町お地蔵さんもビルに負け　美津留
精一杯生きた戦後を語り継ぐ　川童
足崩しやっとつきあい易くなる　希久志
裏山を庭と見たてて酒楽し　しげお
ぬれ落ち葉寒い寒いと酒づかり　司
起こされんと君はやっぱり起きんのか　凡九郎
ふんぎりがついたら僕もきっと起つ　笑風
嫁ぐ日もやっぱり母に起こされる　雅巣
人造藻魚も人も騙される　三吉
海藻が好物という黒い髪　本蔭棒
一二三かけ声だけはまだ若い　天平
一徹の背筋に匠のわざがあり　洛酔
今日もまた一番電車が無事走る　一歩
起き上がるたびに人間丸くなり　金太

西宮北口川柳会　林　はつ絵報

もう五分待てばよかった伝言板　春蘭
待つうちに気持が変る春の雪　柳影
燈明をあげて合格通知待つ　江美
そのことに触れずじっと待つ女　富喜子
枯野ひとり耳をすまして春を待つ　みつ子
待つことに馴れてしまった赤いポスト　年代
待つことに慣れてしまった舞台裏　園歩
門限は無いが待ってる帽子掛け　はつ絵
骨抜きにされ待つことに馴らされる　石舟
声かけて雪掻き払う父の墓　トミエ

雪おんな灯台守の子をやどす　しげお
寒つばきやっぱり雪が似合います　義子
背信を雪の白さに裁かれる　諷云児
雪景色喜怒哀楽は捨てましょう　凡九郎
面白い政治評論きく炬燵　いわゑ
面白い男を味方につけておく　たず子
戦争を面白そうに評論家　正坊
ブラジルも隣のように会話する　保蔵
よそ事だから賑やかになる喪服　二南
春近くおもろい奇祭の残る里　萬的
面白い顔とは知らずブルドック　芳子
読めないが墨のかすれが面白い　よし津
割り箸がきちんと割れて面白い　美智子
泊れないのかと母さん淋しそう　てる
海の見える部屋で陽炎と寝ています　元紀
一泊の旅へ女の重装備　杜的
束ね髪絵になる人で不しあわせ　香子
呑め呑めと下戸がすすめるので困り　白渓子
手術室の前の時計は動かない　絹子
面白い医者で痛さを忘れさせ　紫香

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

結婚にとうとう妥協した父で　鈴江
ものわかり鈍くてのん気に生きてます　かつ子
何たって強気の女房が支えてる　ヒデ子
満席へしびれた足のおきどころ　芳枝
内心はびりびりしている強気です　好栄
ある時は強気にならねばつぶされる　聖子
分が悪い時は強気も啞になる　千代枝
結婚も強気離婚もまた強気　智重子
湯豆腐へ硬い話はやめにして　はるみ
負けん気と強気で他国に根をおろし　歳栄
不作法な強気を月が笑ってる　民子
敬老会福祉課長が胸を張り　悦良
ハイハイとわかったようにごまかされ　博利
台風の強気師走にやってくる　清泉
ものわかり鈍くお百度踏まされる　白汀

尼崎いくしま川柳会　春城　年代報

冷えきった別れ話を熱燗で　栄
冷えますとあすをおどかす予報官　保蔵
股引きを重ねて古希の腰が冷え　伊三郎
唇が冷えて真実見失う　正一
底冷えにチャルメラの音待ちわびる　敏之
冷えきった心を癒すコップ酒　堯
先生が苦闘してます一輪車　園歩
精一ぱい梅一輪のいじらしさ　修水
菊一輪供えて神に近くいる　武庫坊
一輪ざし活けて老舗の京銘菓　萬的
観光バスに一輪ざしがあった窓　紫香
逢えぬ日の一輪ざしが燃えている　三笑子
木の駅舎梅一輪を待ち合わす　作二郎
一輪の花のいのちを詩に綴る　諷云児
指切りのぬくもりそっと知らされる　文夫
親戚に法事の知らせ書く夜寒　正子
知らせきて満期とわかる隠し金　六浦
自分だけ通知なかった日の孤独　薫
カタログが春のファッション知らせに来　芳子
良い知らせばかりは来ない故郷便り　定人
知らせるだけはすべて知らせた虚脱感　年代
今日生きるために広げている新聞　山久
仲直りのためのご機嫌ぐらい取る　敬
カレンダーの美人におやすみ言うて寝る　杜的
不足ない夫に油断してしまう　英子
かたくなに和服で通すくにの母　柳影
母がいるただそれだけでよい田舎　みち子
トイレにも水仙が咲く里帰り　歌子

川柳塔鹿野みか月句会　土橋　螢報

断崖の松にほれてるお月様　野草
逃げる気はさらさらなくて酒を飲む　しげる
筵旗　月が晒して生き残り　帆雀
西の海いつかわたしも漕いでいる　静生
西陽さす窓にピエロは孤に籠る　三千代
死ぬ人と決められている逃げている　諷人
逃げられてよかったのだと独り言　みさ江
まあるく生きて西に沈むのも人生　幸代
愛すればこそ逃げ道は教えない　早苗
いつまでも若いつもりで鍬握る　きみゑ
駆け引きのうまい男のふところ手　弘朗
西方の地図を詳しく知らされた　汲香
最後の旅は西国行きの寝台車　勝見
かくしゃくと西陽に向う父の靴　節子
手放しで喜ぶ老母へ善を積む　幸子
飴玉を頬ばったまま法話聴く　喜与志
数々の業成し遂げた手を拝む　しづゑ
巧の手八十過ぎてまだ達者　和子

お月さま今日無事つとめ終えました　幸江
淋しさの逃げる場所なく経を読む　武子
若い骨月の砂漠に埋めないで　明美
夕映えに名画を描いた西の窓　富恵
悩むまい欠けた月でも満ちてくる　くに子
西方に行ける切符を持っている　睦子
月からの使者が悩みを解いてくれ　房子
月は神　世界無償で照らしてる　信江
柳友の句木に見入る月あかり　かつ乃
童話より演歌が好きな孫娘　弘子
宝くじ一目ちがいでまた逃げる　はるお
月見草おんな心を春にする　きみ子
窓の月いつか行きます母のそば　静江
てのひらの人生航路波のあと　幸枝
大変なことだねずみが逃げだした　夕峰
くちずさむ吟上弦の月も笑む　八重子
西方へ愚かな旅をふりかえる　隆風
過去を捨てわが身たたいて歩かせる　覚
手を合わすことも母から教わった　正道
抜擢の椅子から叫ぶ手八丁　智恵子
あらお月さま朝までのんでいらしたの　孔美子
この首を吊るには丁度よい月だ　公弘
満月に照らされ平和ありがたい　久枝
心ひとつで月笑い月も泣く　みさ子
春へ月澄んで平和な　天　地　人　螢

尼崎尾浜川柳会　前田いわお報

女の子仕草も母によく似てき　昌子
良い女視線は合ったが知らぬ顔　義嗣
バラ一輪　女になった日の紅さ　澄子
いつの世も女地球を和ませる　十四郎
一生を凡打ばかりで終えた父　石舟
結果より惜しい努力をほめてやる　六浦
粗大ゴミ古いタンスを出し惜しみ　修水
惜しみなく振る手が見える里の旅　向西
宝くじ惜しい番号まだ未練　保蔵
戦中派物を惜しんで狭く住む　敏之
滑り止め不要で惜しい受験料　弘治
悲しさをさらさら流す砂時計　江美
夫との距離が広がる鬼の豆　歌子
穏やかに挨拶はしてハテ誰や　清太
穏やかに余白をうめる趣味の会　夢之助
穏やかな朝です茶粥吹きながら　紫香
穏やかな世界を乱す野心の火　いわお

京都塔の会　松川杜的報

寺の部屋広く寒くもてなされ　麗水
もてなしが下手でなかなか出世せず　美智子
もてなしに使う魚がまだ釣れぬ　紫香
もてなしの女の口がよく喋る　〆女
もてなしは孫を一日貸してあげ　葉子
売上げを数え屋台の火を落とす　諷云児
賽銭を数えに銀行員が来る　白渓子
鳩の群数えさしてるパンのくず　花代子
日に三度薬数えて飲んでます　芳子
仁王解体かくされていた謎の文字　萬的
判決の逆転の文字躍ってる　英子
文字少しやさしくなって娘が嫁ぐ　福子
平凡な幸せを編む毛糸玉　正坊
飴玉ころころ夫婦の部屋が温かい　年代
子の夢を次々運ぶシャボン玉　武庫坊
掌中の玉が増長して困る　二南
玉乗りの象の悲しい目に出逢う　杜的
朝々に独り落葉を掃き集め　笑女
お年玉せめてきれいな札揃え　てる
街角の善意の箱が欠伸する　達子
わがままを許してしまう独りの膳　はつ絵
過去帖に残る律義な亡父の筆　ただし
炎になる文字を手紙に書いている　礫
野仏を数えつつ訪う京の古寺　倫子
座ぶとんを数え世話好き落ちつかず　しげお
家計簿はお年玉から記帳する　巨詩
井池で生きソロバンの五つ玉　飛鳥
玉のような第九条を大切に　栄
ビー玉へ子供の夢が揺れ動き　百合子
薬玉が割れてビールが待っている　求芽

堺川柳会　河内月子報

反省の時間をくれた松葉杖　満州
子のために太目の縄を編んでいる　紀美女
そこが節みんな見ているあんたやで　凡九郎
なりふりも構わぬ寡婦の太い眉　柳宏子
一徹な父節々にあるけじめ　庸佑
男坂登ると時間早くなる　金三郎
太いから頼りになると思われる　泰子
図太いと見られ臆病だと言えず　頂留子
女の過去その節々にある涙　萬的

コトコトと時間をかけた母の味　さよ子
けもの道辿って朱い実を拾う　森子
穏やかに辿りつきたいエピローグ　星子
手探りで辿る明日へ欲があり　小雪
同じ時間だろうか古刹の佇い　半銭
飢餓の地を太った人が視察する　楓
愛されてちょっと太目の福寿草　彗梢
しあわせは好きな絵筆を持つ時間　狸村
節分の豆では追えぬ鬼がふえ　こう
節約を美徳と思う老母である　ひで
本籍を辿れば隠れ里につく　透太
節分の街にうようよ鬼がいる　文
素人にしては器用な節をつけ　二南
サンプルの鰻の太さ見て入り　柳太
節目毎に置いた石が丸くなる　凡子
石塔に時の流れの水かけて　元成
友情をつなぐパイプは太い目に　あか里
極太の毛糸で夢を編んでいる　道胤
筋道を辿ると遠い噂だけ　与呂志
聞く方をはらはらさせて節がない　一二三
遠回りしながら辿る好きな道　月子

川柳泉尾　吉川　寿美報

しっかりと外れてました宝くじ　和子
白い目も気にしていない愛煙家　伴子
うろちょろと猫と一緒に寝ててんか　靖子
我が友の近よりがたき大きな手　サチ
えべっさん賽銭箱の高いこと　美南子
伏せている話　探りにくる雀　洋子

ねじ伏せて愛を奪った風あたり　マリ子
赤い椀伏せて足音待っている　弘子
盃伏せた父の本音は聞けぬまま　悦子
不意に身を伏せて出方を試そうか　はつ子
わたしより妻が上手に説き伏せる　しめ子
予定にはなかった伏せ字から迷い　美代子
過去伏せてふあっと白い雲に乗る　美子
検査終え医者に秘密があるみたい　敦子
千代紙に秘密をこめて鶴を折る　義一
お互いに秘密があって長続き　淑子
平凡な夫婦秘密も何もない　良子
寝言とは言えど許せぬ秘密ごと　恵美
両親へ秘密が出来たお年頃　(中)文子
真夜中にサンタの秘密バレました　一枝
ゆずり葉に彼の秘密を聞いてみる　洋子
秘密などもっていませぬ顔で来る　シマ子
冬の海秘密ひとつが捨てられず　可愛
ウソ　ホント　秘密のままで雪の駅　千歩
ツウの羽根ぼろぼろになる秘密　あさこ
七色の秘密男を煙に巻く　(寺)文子
話したい秘密わくわく抱いている　トミ子
打ち明けぬ秘密が妻にひとつあり　鬼遊
御要望とあらば見せます胸の鬼　寿美

川柳塔唐津支部　久保　正敏報

大人入りする振袖のしとやかさ　ふさ子
勿体ないとタンスの中に眠る服　治幸
水仙に心地よげなる寒日和　紀一
アメリカへ追従又も税値上げ　喜久亭

夢の中佳句を推敲秀句にす　ちよ
暖冬のツケが電線唸らせる　義美
寡黙なる人技術で勝を取り　弘
駄々っ子を国連諸国持てあまし　剛司
財産でなくて出し良い支援金　高明
注射でも右手は出さぬ程庇い　虹汀
湾岸の異教徒互いに殺し合い　旭恒
お火たきの過去を燃やしてまだ少し　ハル
過疎の駅風が運んだ四季の花　四郎
湾岸は火をふく日本ピーヒャララ　遊女
人生の始めをいつも今日と決め　正敏

川柳塔わかやま吟社　牛尾　緑良報

いじめには負けずへの字に結ぶ口　三枝子
強かに虫を殺して美しい　金魚
誰にでも優しくしたい蝶結び　栄美子
リハーサルで結んだ愛が解けない　佳明
約束を星と結んでいる船出　輝子
人生の節目来るごと結び締め　信子
群集の中で自分の鐘を打つ　裕美
抜群の腕スカウトは見逃さず　瑞穂
将来の期待群がる塾の窓　和子
平凡は嫌いと群を出て飢える　恭子
小さいが群れると見せる底力　武治
群衆にアラーの神の助け説く　守
負け戦　群れが崩れたまま逃げる　紫香
棲める海返せと雑魚が群れになる　高夫
群青の海に沈めてきた野心　精子
害虫の言い分聞いてやらないか　克子

虫けらにされた戦を忘れたか　保州
鈴虫に妻が拓くほど凝っている　愿アサ
胸に棲む虫を育てたのも風雨　(尾)綾子
腹の虫何時かは蝶になる我慢　鉄治
ゴキブリを殺すその手で数珠を繰る　忠雄
母ちゃんの癇虫みんな散って行く　英子
虫好かぬお人も同じ喪の列に　稚代
虫けらのように追われた立志伝　与呂志
みの虫をぶらさげ梅が咲きはじめ　豊太
立ち読みにまた来やがった本の虫　好笑
言いたい事三分も言えぬ腹の虫　登志代
蓼食う虫僕も誰かに愛される　紀久子
虫も殺さぬ顔で骨までしゃぶられる　(比)由紀子
弱虫で愛を試してばかりいる

川柳塔まつえ吟社　恒松町紅報

天国へ届く豆なら植えておく　鶴丸
五色豆恋の音符も書けそうだ　きみえ
枝豆とビールで明日の策を練る　妻子
投げられた豆を齢だけ鬼も食べ　早苗
豆を煮て祖母は祖母なり人を待ち　たつみ
転作の赤いダイヤも値にならず　代仕男
おふくろの味が恋しくなる電化　雀踊子
便利だな蛇口ひねればお湯が出る　みえ
便利ですゆとりもらった洗濯機　邦代
一本のマッチもいらぬ日の生活　幾子
女房にポケットベルを持たされる　長三
器用さがどこでも便利ものをいう　静江
雪女与作の愛に負けました　小鹿

雪もよい大事な手紙まだ来ない　秀子
達者だと思っていたい春の雪　米子
音もなく雪降る町の赤提灯　清志
雪国の北山あたり陽が漏れて　友子
産声へ受話器がふるう雪の朝　芳枝
折角のチャンス逃した掘炬燵　義良
掘炬燵とんとん昔が埋めてある　多賀子
少しずつ話題明るい春炬燵　静恵
炬燵抱く八十路の母のいい寝顔　太泡
炬燵に入るとすぐ故里の夢をみる　文子
適温が夫婦で違う電気炬燵　煩悩児
氷壁にわたしが揺れている寒さ　章峰
寒さには自信をもって咲く椿　桂子
満洲の寒さを語る父も老い　雄々
輪の中で心通わぬのは寒く　寿美子
うすら寒い子も居て二十一世紀　与根一
寒さなど知らぬ落ち葉を踏む二人　叮紅

岩美川柳会　羽津川公乃報

暖冬のおかげ灯油を備蓄する　大漁
親切にまた涙腺がゆるみ出す　公乃
さわやかな親切こころ温まる　單車
命脈のストップ天寿全うし　嘉津江
ストップだ止めても乗った泥の舟　美代子
親の夢積んで自立の帆をあげる　美恵子
親の手が出すぎ自立の道ふさぐ　芳江
弾の降るいくさに男命掛け　民子
空財布愛は降るほど入れてある　忠良
雨降って地固まれど金は無し　長治

おかしいなときどき脈が速くなる　螢
人の道行けばおかしな角ばかり　照女

いずも川柳会　吉岡きみえ報

ホワイトの友に恥じない作業服　裕
友情は友情意見は意見です　鶴丸
友人のいいえ私のパトロンよ　リチエ
友人の友人もいるかごめの輪　きみえ
一丁の鍬友だちに老い達者　叮紅
老いて知るいっちいい友妻がいる　芳子
友人の脆さ遮断機下りたまま　桂子
D51のような寡黙な友がいる　章峰
転ばない先に杖貸す友がいる　多賀子
深い所で夫婦は鳥を飼っている　文子
逆立ちの下手な夫婦の手の温さ　久代
双六のあがりで光る夫婦像　具人
夫婦だけになって小さな鍋にする　妙子
当選の万歳だけに顔を出し　良子
当選のおとき話をふところに　圭詩朗
当選の強気も弱気になる政治　明朗
新春へ鳶もわたしも輪を描く　みよ女
新しい日記に嘘はまだ盛らず　青湖
新婚旅行へ0・5人がついてくる　れいじ
新しい道が故郷を近くする　勝子
山白む新しきこと始まるぞ　由紀子
信用のネクタイ首かせかも知れぬ　三代
マイペース信用されてから狂い　ちかし
信用をされて重荷になるわたし　くに子
わたくしを信用してる夫の眼だ　知恵子

信頼の絆に長いながい糸　律子
愛の誓いあまり信用せぬがよい　清子
信用して男の下駄を干しておく　重昭
まっ白い鳩は信用されやすい　雨学
真からの友で苦言も手厳しい　代仕男

城北川柳会　吐田　公一報

水仙の香り求めて冬の旅　八重子
妻なしのくらしへフッと背が寒い　温子
猫飼うて女一人の愛溢れ　昭子
日の丸に命があった過疎の里　ただし
明治生れ襟を正して親にそい　寿美礼
モナリザがお多福にされふくれてる　秀夫
珍客にされて言いたいこと言えず　テルミ
妻で無い日が欲しかろうハイヒール　白峰
正直に書くは赤字の申告書　史風
珍しい顔を主賓にクラス会　倫子
一枚の板譲る自信は持ってない　満津子
デパートのトイレでほっとする孤独　ふみ
降る雪や禍福の中の半世紀　新一郎
つたなくも柳句よとどけ亡き方に　きくゑ
天秤にかけると妻が重くなる　公子
しぶちんの妻がはりこむ祝い鯛　典子
妻逝きて初めて知ったその重み　久留美
前向いて脱ぐのは妻よ止しなさい　眉水
妻がいて冬には冬の花が咲き　鬼遊
美しく過ごす余生へしぼる知恵　文子
正直な意見が時に敵つくり　達子
元日の妻が菩薩に見えてくる　静歩

横文字の孫の年賀に首かしげ　登美子
私だから我慢出来たと妻おもう　静子
もう抱かぬ妻だが側にいてほしい　右近

八尾市民川柳会　宮崎シマ子報

寝たきりへ柚子の香浸すむしタオル　信章
人生が少し判ってきた柚子湯　治
柚子味噌を肴に老いの留守居酒　雅士
過疎の宿疲れをいやす柚子を添え　覚然坊
手間かけたバラも女も棘がある　夕花
温もりがジンとこけしの細い眉　宏子
もやしの根一つひとつ取っている　勝美
断絶の愛に手間ひまかけました　年人
手間かかる人ねと妻が疎んじる　とみを
シベリアの寒さがくどい父の酒　晋吾
暖かい話に飢える風の街　柳伸
履歴書を背中に寒い街をゆく　美幸
托鉢の中へも白いものが降る　かつみ
春は名ばかり左遷地の駅に立つ　外吉
冷戦は妻のビールでけりがつき　一風
詫びること知らぬ戦争に夢はない　真柳
戦争でいつも馬鹿みるのが庶民　頂留子
武器売った国を相手に戦する　みつる
戦争がはじまり鳩がいなくなり　朝子
一人一万矢っ張り腹が立ってくる　砂輝守
丁寧な礼状切手貼ってない　和子
旅先で受けた情けへ切手貼る　正好
財テクにならぬ切手の持ち腐れ　春堂
重大な使命を帯びている切手　欣之

友からの切手不足は愚痴るまい　喜風
さよならの恋の重さに足す切手　幸枝
返信の切手も入れた果し状　甘平
無精卵ばかりを抱いている切手　度

大原川柳社　小林　妻子報

三日麻疹そんな恋なら二度三度　あすなろ
歳の市儲けたように買いあさり　正子
生きざまを見せて大樹の無言なり　ひでの
寒い夜おでん皆んなのリクエスト　たづ子
うたかたの水と暫く流れよう　寿恵子
春を待つ娘の胎動へ語りかけ　みさえ
飢餓知らぬ皿へ美食を食べ残す　睦子
今年こそこそはで暮れて年新た　こふゆ
腹の虫今宵一夜を貸したまえ　幸子
孫去んで元の小さな皿で足り　はるみ
駄馬の歩へ手綱はしかと引きしぼる　敏子
八十が来てもやっぱり嫁は嫁　美代子
年波を蹴散らす春の靴をはく　正己
抱いている火種を埋める冬螢　たけよ
耳ちょっと貸して重荷を背負わされ　悦子
陽と土の恵みに生きるスケジュール　辰江
其処此処に初春が落ちてる匂うてる　朝代
除夜の鐘遠くに聞いて幕を閉じ　宮子
きっと雪連れてくるよと虎落笛　辰子
ひとり分米研ぐ音に嘘はない　玉恵
一喜一憂これも趣味です生甲斐に　みづえ
群羊の声静かなり初詣で　妻子

川柳たけはら　森井　菁居報

すごいなあ我が家のもちはよくのびる　中一晴　美
おもち食べすぎかな体重計にのる　中一晶　美
砂時計変らぬ愛を信じたし　菁　居
負けたままでいようか雨が降っている　蘭　幸
老いることなどは気にせぬ寒椿　栄　恵
子守唄いくら下手でも寝てくれる　愛　子
報酬はいらぬ如来の床を拭く　勲
菊に酔う菊満開の仏の座　ヤスエ
クリスマス親子の愛の温もりよ　千年枝
ころばぬ先を助けてくれる乳母車　浪　子
道草の過去を鏡は知っていた　喜久恵
一人娘を男ならとは思わない　清　水
もうそろそろ忘れなさいと友は言う　ふさ枝
繰り返す試行錯誤へ除夜の鐘　静　佳
傘寿越え日増しに炎える命綱　喜美子
呼んでみたとて振り向かないよ弥陀の里　麻　代
やさしさと厳しさを持つ羊の目　房　子
太陽を恋うてはならぬ雪だるま　比呂子
愛に飢え花のつかないシクラメン　淑　子
電話での別れ傷口見えますか　笑　子
雪んこと仲良くなって童唄　博　子
ゆったりと座れば似合う椅子である　一　路
休肝日作って欲しい予定表　伸　子
余生とやひとりで歩くよりふたり　静　風
まじないのつもり掛け捨て保険など　新　造
青い地球に国境線は見当らぬ　蝸　牛
頼られてその気になってゆく女　千代美
レンタンのまっかな穴を見てあかず　政　巳
青い鳥どこかに一羽いるだろう　こうじ
人間性捨てるときっと鬼になる　のばら

いさり火川柳会　尾崎三代治報

子や孫を老いたる母が待つあかり　智恵子
耐え忍び待った甲斐あり玉のこし　武　士
土俵での待ったはいかん気が抜ける　三代治
寒さから頭を守る帽子編む　八重子
ベビー帽編んで孫への思い馳せ　豊　子
人生の下り帽子も軽くする　伊都子
北風に向かう帽子を深くする　由多香

川柳塔とっとり　岩原　喬水報

寒の水一口飲んで胃を洗う　秀　和
ライバルの栄転苦い酒を飲む　侑　里
胃カメラを飲んでよかったうまい酒　俊　路
要求を飲むと平和はすぐに来る　圭一郎
飲みながらすまん湾岸ニュース見る　粗　粒
飲んでいる場合ではない陽が昇る　天　涯
年かいな注意されまた注意され　友　夫
前を行く若葉マークに注意する　砂山花
充分に注意はしてた死角です　多可志
世辞を言う男へ注意しています　艶　子
国連の注意を聞かず夜襲され　喬　水
注意した日から敵意の目に変り　帆　雀
注意しろ悪魔が熱くささやくぞ　洋　々
生き恥をこぼす盃小さ過ぎる　螢
盃をかわす相手を間違えた　山　人
沁みわたる五臓に君の盃も受け
盃を回し飲みして初春祝う
ゴマをする盃下戸の手に重い
盃を交わした絆信じ切る

打吹川柳会　奥谷　弘朗報

湾岸のいくさにうちの薪を割る　輪多朗
割勘の話になると出る本音　一　枝
割り切って見れば何でもない話　旋　風
皿一枚割って井戸から化けて出る　由多香
菰樽を割ると俗事が増えてくる　野　草
台所何やら割れる音がする　妻　子
腹割って言えば糸口つかめそう　静　歩
みぞおちに溜る怒りを酒で割る　勝　見
皿一枚割れると嵐風いでくる　雄　々
畑での手割り西瓜のうまいこと　みほの
割り勘で飲んでしらふが銭払う　温　子
妻の目が輝きだした五割引き　早　苗
半分に割ると大きい方を取る　たつみ
石頭叩き割りたい時もある　那　俊
節くれの薪を割ったら父が出た　孝　恵
割り算がとても上手な果物ナイフ　典　子
割るための皿を四五枚とっておく　弘　朗
名刺から割れた男の私生活　幸　子
アメリカに割って見せたい腹の内　螢
眉間割るシーンで母にしがみつき　信　子
割り算が下手で小銭を貯めている　節　枝
腹割って話せばトゲも解けて来る　喜与志
新年だ些細なことは割り切ろう　幸　枝
　　玲　子

部屋割りへ非常階段確かめる　佳女

川柳藤井寺　高田美代子報

肩書がとれてのんきに物が言え　志洋
テスト前時間たっぷりあったのに　たかし
パッパパラリラ明日のことは考えぬ　和子
アデランス忘れた父のクラス会　治子
あすの風どう吹こうとも高いびき　吸江
土壇場でのん気な妻に救われる　美房
木枯を枕に夢ばかり追って　森子
真っすぐな背も傾く老いの坂　キミ子
傾いてまた傾いて弥次郎兵衛　宗一
貸そうとは言わず耳傾けただけ　みのる
愛すべて子に傾けた母の顔　信子
湾岸の地球傾く戦火噴く　三夫
腹の立つ日は線香も傾いて　敦子
表面張力のお酒をこぼさないように　一屯
ひとつの訃抱いてさまよう風の街　雅美
手鏡と長い身の上話など　寿美
山を追い雪崩に消えた山男　修六
雪深い山を承知の山を踏む　与呂志
雪降れば冬の絵になる過疎の村　悦子
雪の日は見えないものが見えてくる　寿美子
鬼瓦雪を被って丸くなり　繁男
豪雪へ人は小さなものと知る　比呂志
ふるさとは静かに眠る雪の嵩　昭子
暖冬に出番が狂う雪女　婦美枝
総て白雪の奢りの凄まじさ　淑子
雪しんしん女の罪を埋めてゆく　ケイ子

讃美歌も第九も聴いた雪の精　美代子
おでん屋の湯気と気が合うぼたん雪　透太

翠洋会　中西兼治郎報

人間にいつか仇討ちする地球　楓楽
十二月に仇討ちされる怠け癖　絹子
額縁のへそくり全部頂いた　照子
昨年の仇を討った四月馬鹿　みつ子
身内の仇裁判官にすがるのみ　綾子
返り討ちばかりのパチンコが止まず　さと美
窓際で耐え仇討ちの秘策ねる　恭昌
仇討をとりにファミコン姉が来る　正雄
任官で班長どのに仇を討つ　拓生
碁敵に今日も残念返り討ち　すすむ
仇討ちの湯とやら男眺められ　英一
私にも出来る仇討匙加減　千歩
仇討ちの白装束が揃わない　しげお
仇討ちをたえず思てる消費税　凡子
水割の底の思いがまだ書けぬ　透太
書を学ぶ腕にワープロ頼りない　宣司
字を書けば恥が一緒についてくる　真
あの日から書けなくなった日記帳　正坊
金なしと知ってなびくも意地のため　光子
白無垢でなびきますとは嘘ばかり　東雲
商談は先ず冗談で口火きる　登志実
なびくのはもうよしました葱坊主　鬼遊

川柳高知　川竹松風報

梯子酒一つ減らして齢を知り　さち
天井がぐるぐる回る祝い酒　一求
盃を回す前から酔いつぶれ　幸泉
風向きを変えると舌がよく回り　菊野
労りの荷物が届く帰郷前　竹萌
幸せが有ると信じた回り道　千恵子
口下手の父の名がある文芸誌　圭風
憎かった日もあり人の訃に座る　佳風
消費税一円玉の目が回り　功
権力に一歩近づく回り椅子　野風
定年が奪う未練な回り椅子　朱坊
再会へお国訛りを遠慮せず　松風

南海川柳会　飯田悦郎報

表面は知らぬが仏にして置こう　二南
ひょっとこの笑い表面だけのもの　真柳
表面に見えぬ人事のボスの息　憲太郎
虫も殺さぬ顔で杯積み上げる　文
苦労した石表面に深いしわ　美津留
流氷を待つチョコレートの銀光らせて　作二郎
パーツ組み替えて新品かと聞かれ　柳宏子
どうせ中古お互いそんな年になり　凡九郎
新型が出て捨てられる中古品　文秋
中古だがやっとわが家を手に入れる　庸佑
挙げ句の果てに不倫の梯子外される　泰
これが最後今日もかじるか親のすね　勝美
悪人の最後の言葉信じよう　花仔
ぐれた子が最後にかえる母の胸　真砂
妻と一緒最後の旅にならぬよう　東雲
どちらへも義理があって板ばさみ　しんじ

上役の身替りとなる板ばさみ　覚然坊
出来の悪い子を先輩に頼まれる　甘平
雲がくれしたいと思う思う板ばさみ　恒明
板ばさみビルの谷間の鬼瓦　喜風
板ばさみスーダラ節が抜けてくる　度
見解の相違でわかる板ばさみ　柳伸
改札機今朝も元気な定期券　志華子
花束に添えたカードが喋りだす　重人
逆転のカード握っている余裕　ダン吉
これ以上無理だと返事せぬカード　正好

川柳後楽吟社　従野　健一報

為すべきはひとつ男が泣いたあと　草風
人生のドラマを綴っている車窓　たけ志
燃え盛る余命を静める愛の詩　博友
欲望を捨てた視野には無駄ばかり　哲郎
うまい事いかんもんやな人生は　浄美
居酒屋に毒花一輪咲かせ待つ　義親
グループのジュースの方へ席を替え　吟平
親の癖知らずしらずに継いでいる　金吾
ルンルンで入れるダルマの目が丸い　美智子
病気ではなく老化だと聞く不満　柳五郎
四面楚歌みんなが白い眼でみてる　拓治
一筋に生きて花道など知らぬ　青銅
ピンボケのネガから本音拾い合う　桃風
太陽を味方にすると腹がへる　正秀
アッサリと嫁った娘の置き手紙　玉水
老齢化成人病に眼がとまり　佐加恵
もう遺族作ってならぬ慰霊塔　秋月
強引な譜調で悪魔笛を吹く　健一
男ならくどくは言うまい腹くくる　照路

川柳塔あおもり　波多野五楽庵報

一線を越せば女のサガと言う　凡子
落雪が境界越えていがみ合い　つとむ
ふち越える湯床に老いが長くなり　はてなこ
不仲でもカボチャは垣を越えてくる　つる
母の背を越した太郎の声がわり　喜久江
湾岸で国を飛び越す弾丸が飛び　敏夫
先頭について追い越す機をねらう　進
山を越え丘越え野越え村を越え　隼
海死滅オイルフェンスを越えた時　修
幾山河越えた夫婦の秋日和　善保
噂など一つや二つ飛び越える　實
ハードルを虹の姿で越えた驢馬　風樹
飢餓の村越えて瓦礫の街に着く　叶
プライドが高くて越せぬ白い旗　勝男
丘越えてどこまでも行くハーモニカ　一花
生生流転今日も涙の山を越す　五楽庵

南大阪川柳会　金井　文秋報

野の花を好み幸せ薄いひと　楓楽
派手好みおんなペラペラよく喋る　萬的
みな好み違い世の中面白い　度
プライドも好みも捨てた二度の職　寿美
常連の好みへ如才ない女将　庸佑
好ましい人が見向きもしてくれぬ　文秋
側近の妻小説を書いている　作二郎
側近の髭が少うし邪魔になる　勝美
時間外手当が出ない側近だ　冬葉
側近の原稿通り読んでいる　鬼遊
側近にまともに当る流れ玉　トミ子
側近の若い意見が夢を盛る　シマ子
側近の尻尾つかむとおとなしい　雀踊子
今声をあげねば魔の手のびてくる　奏月
親の目にまだまだのびる子を信じ　柳宏子
学習塾のびない子等は切り捨てる　潔
鹿の目の奥で芽吹いている春だ　柳伸
奥歯にもの挟みふらふら風見どり　頂留子
奥方と呼ばれまごつく河内弁　憲太郎
食い縛る奥歯男の道開く　章久
サングラスの奥は意外な優しい目　文江
あけすけの女で奥も底もない　あいき
歓心をかう心の奥が見え隠れ　悟郎
奥向きのことは男に知らされぬ　智子
草笛を吹くと童心澄んでくる　幸
船着場子供ごころがよみがえる　シメ子
宝物つめて童心鍵をかけ　千梢
童心で綿菓子舐める村祭　新造
世渡りへのびちぢみして生きている　凡子
幸せはあなた好みのタイを選る　久子

富柳会　池森子報

趣味多く老化している暇がない　昭水
総理まで老化に見える飯場酒　柳太
諭文に意欲なくした日もあった　花梢
一枚の論文に振りまわされている　維久子

手をつなぐ老化のふたり親子です　花子
座布団に躓いて居る老化　智久
この論文世界を変えるかも知れぬ　(伊)勇
わたしまだ呆けていないという老化　トシヱ
お見舞のメロン廊下で鉢合せ　文次
リンゴあめ露店の前で子がせがむ　トシ子
離婚して愛情論を書いている　透太
梅一輪お前も老化実もならず　生子
卒論をあきらめているアルバイト　荘次
老化せぬように鏡に謎をかけ　美房
論文に愛され方を書いている　岳人
老眼と言われ若さが崩れ出す　森子

豊中もくせい川柳会　田中　正坊報

バグダッドお伽の国と思うたに　万之助
戦争の余波で海鵜が死にました　萬的
湾岸戦ドラマのように見る怖さ　(小)英子
戦史ない頁が欲しい新世紀　武庫坊
戦争の好きな男が多すぎる　正坊
甲斐性がないと妻の二言目　薫
二枚目の宿命外せぬアデランス　ただし
サービスの一語を噛んで小商人　美幸
一言のサービスがよい山のバス　紫香
サービスと言うが本当は売残り　福一
サービスのつもりが重い荷を持たせ　〆女
サービスしたら遺言書いてくれますか　きく子
おしぼり一つ楽しい旅にしてくれる　杜的
良心のかけらを弘法さんで買う　作二郎
掛時計良心どおり時をうつ　蕗児
良心の疼き知ってる旅鞄　芳子
旧街道みな建国の日を祝い　しげお
豚饅の中身も企業秘密です　とく子
父と子で買物仏の花も買い　(玉)英子
腹黒い男を手玉にとる女　悟郎
サスペンス男臭さが勝負する　一笛
身のほどをわきまえてます錆びた釘　富子
どことなくたっぷり効いたシェフの味　明光
チョコレート辞退しますと電話する　博史
いやだった名も古希すぎて好きになる　吉太郎
春近し旅のプランを練るグループ　登志実
牛乳瓶に花が咲いてる水子塚　つえ子

サークル榨檬(前月分)　友碇　雅子報

内容はどうあれ飴をしゃぶらせる　智恵子
合格し明るい歌がはずんでる　千代女
一人だけはずれて歌う同窓会　三四子
飴細工ふくらしながら犬になる　登美子
手袋は持っているだけ白い指　雅子
庭仕事虫も軍手も冬籠　美子
ゴム長手今日は働く気でいます　美緒
私生活かくして華麗な顔作る　今日子
手袋をしたまま握手する別れ　泰子

尼崎小園川柳会　井崎ミサ子報

野天風呂湯気のむこうの国訛　勇次郎
歴訪に毛皮まで抗議の的になり　五郎
混浴の岩風呂ギャルが占領し　悦代
亡母と来た温泉　娘となつかしむ　キク子
温泉の湯気をもはじく若い肌　芳子
訪問着汗かいている銀狐　修水
あの人の本音が浮いた露天風呂　夢之助
ワンルーム毛皮が二つ掛けてある　伊三郎
よく喋る毛皮のコート着た女　紫香
短足で毛皮が憎い試着室　弘治
温泉と言う名の風呂が街にある　六浦
そわそわと男が弾む露天風呂　歌子
宣伝の通りではない温泉地　ミサ子

川柳塔社常任理事会（3月1日）

▽会計部から3月1日現在の同人数・誌友数について報告。
▽前月につづいて同人・誌友を増やす方策について検討。
▽編集部から投句締切日厳守について要望。
▽全日本川柳和歌山大会の日程・会場等について太茂津氏から報告。
▽直原玉青氏の作品展に対する協力を決定。
▽平成2年度の一路賞・各地柳壇賞の表彰を4月本社句会で行うことを決定。
▽本年度の同人総会・二賞発表本社句会を10月6日、大阪府中小企業文化会館で開くことを決定。
▽高杉千歩（八尾市）片上英一（同）稲本凡子（大阪市）北山好笑（和歌山市）の同人推薦を承認。

日本川柳秀句集（第五集）
日本川柳推薦句集（第三集）

恒例の日本川柳秀句集と同推薦句集を出版する運びとなりました。今回は一年遅れての刊行であり、一人でも多くのご参加を頂けるよう、積極的な参加推進をお願いいたします。

〈参加要項〉

発刊予定　**平成3年10月**

掲載内容　日本川柳推薦句集　約3000句
日本川柳秀句集　約100句

応募作品　昭和63年10月以降の作品5句以内
（既発表・未発表　雑詠・題詠を問わない）

参加料　3000円

参加締切　平成3年**6月末日**

選者　渡邊蓮夫・亀山恭太・西尾　栞

申込先　大阪市中央区谷町7丁目1—39
新谷町第2ビル206
日本川柳協会事業部
日本川柳協会

第6回　国民文化祭文芸大会

〈川柳募集要項〉

課題と一次選者（各題2句・1題2人選）
「水と緑」　大野　風柳・神田仙之助
「広　場」　斎藤　大雄・吉岡　龍城
「醤　油」　亀山　恭太・尾藤　三柳
「暖　流」　時実　新子・佐藤　正敏
「空　港」　山田　良行・関　水華

募集期間　**4月1日〜7月31日**

応募料　1000円（郵便小為替）

応募方法　200字詰原稿用紙（B5判）に各題ごとに記入し、同形の別紙に郵便番号・住所・氏名・年齢・性別・職業・電話番号と大会・懇親会参加の有無を書いて左記へ。

送付先　〒280千葉市亥鼻2—5—3　千葉県庁亥鼻別館　第6回国民文化祭千葉県実行委員会事務局
「文芸大会・川柳部門」係

分科会　11月23日（土）正午から

会場　日本コンベンションセンター

二次選者　浅田扇啄坊・安藤亮介・伊藤紺矢
川崎火呂志・白井花戦・平井吾風
河野十九人・松沢敏行・江口東白
加賀美白英子

賞（予定）　文部大臣奨励賞・知事賞ほか

作品集　応募者全員に配布

本社三月句会

三月七日(木)午後五時半
メンズファッションセンター

急に春めいたせいか、九十三名出席のにぎやかな三月句会となった。

はじめに竹原市の山内静水氏の訃が知らされ、一同黙とうを捧げた。続いて三月三日の「川柳大阪五十周年・金太句集発刊」記念句会が盛会裡に終ったことに対し、比呂志、金太両氏からお礼のことばが述べられた。

「おはなし」八木千代さん。沢田千春さんと二人はるばる米子からの来阪である。大阪駅到着後、ころんだり道に迷ったりの失敗談にはじまり、さきごろ病気でふせっていた時、これまでの自分の川柳に対する姿勢をふり返り、今後のあり方について真正面から考え直したという内容。そのきっかけは、番傘の森中恵美子さんの「あなたの川柳のポイントは?」と問いかけたハガキとのことである。

雛の月にちなみ、選者は主幹以外は全員現役(?)のお姫様という趣向。佐藤奏月さん欠席による代選は西口いわるさん。月間賞は九十二歳の山添眉水氏に輝き、盛大な拍手で祝福が送られた。

(進行—天笑)　(受付—美房・笛生)
(記録—金太・月子)

出席者—笛生・利武・柳影・悟郎・喜風・武庫坊・年代・右近・杜的・芳子・諷云児・萬的・二南・栞・幸・柳伸・達子・温子・三男・満津子・典子・〆女・茜・太茂津・金太公一・眉水・比呂志・保州・寿美・岳人・しげお・恭昌・千秀・雅文・章久・小林英子・鬼遊・正坊・ただし・照子・紫香・狸村・トメ子・柳宏子・勝美・射月芳・いわる・はつ絵・みつ子・シマ子・光子・たず子・勝晴・智子・小路・重人・房子・規不風・友熙・美房・蕗児・千代・薫風・千春・千歩・庸佑・一二三・美代子・白兎・天笑・月子・磯子・愛論・吐来・東雲・楓楽・透太・文秋・白洋・冬葉・洋敏・元紀・弥生・恵美子・度・結実・憲太郎・寿子・凡子・頂留子・信治・朱夏

席題「姫」　西山幸選

春一番おやゆび姫が目をさます　朱夏
消費税のお釣きっちりもらう姫　杜的
成人式済んで姫様おとなびる　美代子
清姫のような情けに囲まれる　太茂津
休日は昼まで寝てるお姫さま　金太
一姫がやんちゃで太郎畏縮する　千秀
たんとたんと稼いで姫をよろこばす　天笑
おてんばの姫もそろそろ適齢期　諷云児
玉手箱開けると乙姫の雫　雅文
辛党の姫が酔うてる春の宵　月子
姫様にきっと速達など来ない　度
姫様がうどんをすする映画村　狸村
雇用法どうあろうともお姫様　射月芳
冗談が姫にわからず真にうける　東雲
清姫のような女はたんと居る　保州
ひめゆりの塔よ無言の半世紀　吐来
親の目から見れば輝く姫ばかり　シマ子
佐保姫の足音を聞く春の風　正坊
美人だがお姫さまにはほど遠い　太茂津
世が世なら姫でも今はレジを打つ　房子
乙姫さまも油の海をお引っ越し　結実
姫鏡少しゆとりの紅をはく　茜
ワンルーム姫がひとりで住んでいる　いわる
作り笑いに囲まれ姫は生きまどう　千歩
大奥の情報くれる姫がいる　弥生
姫さまが玉三郎に逢いたがる　典子
華やかな舞姫傷を抱いたまま　(小)英子
低音で姫を虜にしてしまう　天笑
男とはこんなものかとかぐや姫　ただし
窮地幾度共に過ごした姫だるま　温子
花むしろ姫は一歳にて候　しげお
そのうちにわが家にも来るかぐや姫　智子
桐の木が育ち婚期が近くなる　鬼遊
竹藪をきっと忘れぬ姫だろう　恵美子
それからの乙姫様のヒステリー　恭昌
家老だけ姫の勝気をたしなめる　二南

チョコレートの返しを姫は待っている　元紀
靴を買うときはお姫さまのように　智子

人

姫さまのご機嫌のまま弾む毬　年代
地

姫の絵の中に白馬があらわれる　千代
天

姫に生れて姫のかなしみばかり抱く　恵美子
軸

姫君がだんだん鬱になるめざめ　幸

兼題「咲く」　西口いわゑ選

善意から善意へ花が咲き乱れ　柳伸
わたくしの小さな梅が咲いている　螢
咲いて散る順序を忘れないように　(松)文子
梅咲けば咲いたでははを想うなり　荒介
重い荷をおろし心にバラ咲かす　理瑛
飛鳥路を古代に戻す桃が咲く　萬的
咲きほこる花のあしたを考える　白兎
人妻と歩く山吹咲く小径　正坊
咲き誇るバラのいのちを掌に受ける　凡子
梅みごろ仲良し組を誘てみる　月子
名も知らぬちさい花咲く今日は吉　みつ子
パンジーをいっぱい咲かせ独り住む　はつ絵
遅咲きといわれてからは慌てない　鬼遊
いつか咲く夢を信じて靴磨く　恭昌
愛されていますきれいに咲いてます　天笑
花が咲いたらと暗示をかけてくる　智子
胸深く咲かせだれにも手折らせぬ　結実
花凜と咲かせて好きな人を待つ　公一
温室の花は負い目を抱いて咲く　柳影
カンナ咲くわが血の音をきく如し　栞
晩年に花を咲かせた立志伝　利武
花が咲く小さな旅に母をつれ　〆女
うどんげの花咲く時が別れどき　房子
七回忌今年も父の梅が咲く　温子
咲けば散る神のはからいかも知れぬ　年代
一花を咲かすつもりの紅をひく　正坊
万作が咲いて農家に嫁が来る　シマ子
神さまの約束抱いている花芽　はつ絵
咲く事に生命を掛けて散る桜　芳子
菜の花の暮れずにおわす野の仏　栞
咲き終えた花へたっぷり水を遣る　保州
子の代に咲かせる種を選っている　一二三
春の証が欲しくて梅は咲いている　元紀
散る覚悟できて牡丹の美しさ　鬼遊
大輪が咲く奥の手をもっている　弥生
梅一輪咲いて寝たきり喜ばす　典子
耐えてまた花咲く春に巡り会い　満津子

人

菜の花が咲いて石仏目をさます　武庫坊
地

木瓜の花も男もゆっくりと咲かす　恵美子
天

咲き誇る花のあしたを思うまい　結実
軸

咲いて散る花に情けを頂きぬ　いわゑ

兼題「新しい」　神夏磯典子選

新しい帽子が春の風誘う　多賀子
新しい便箋をまた買うている　(松)文子
ニューファッション着て試着室出られない　多賀子
新しい服が歩幅を狂わせる　荒介
新鮮な瞳はまず母の顔捉え　公一
新しい駐在が来る過疎の春　(小)英子
新しい事に挑戦する若さ　利武
ピッカピカの一年生の春の夢　吐来
新しい流れ棹さす一徹さ　庸佑
ヒントヒントヒント煙草つけかえる　重人
新人に負けてはおれぬ胸を張り　金太
蔵出しの酒まろやかに紅たすき　憲太郎
心機一転出直す彼の太い眉　柳伸
買いたての三日間だけよう磨き　柳宏子
新しい日記に誓い立てている　智子
両親を招く新居の木の香り　〆女
新任地渾名が先に届いてる　三男
後手後手の捜査をわらう新手口　美房
紺スーツ爽やかに踏む第一歩　達子
新鮮な空気に飢えている古参　金太
新しいことが良いとは限らない　保州
新しい町にも閻魔待っていた　結実
新しい帽子なじまぬ石頭　満津子
新しい命が急かす毛糸針　諷云児
新しい一歩迷いは何んだろう　結実
新しい言葉をコラムから拾う　透太
丁寧に書く新しい日記帳　射月芳

新しい服着るときめき老いてなお　右近
ニューファッション心はどこか飢えている　朱夏
とれとれのトマト故郷のあたたかさ　柳伸
新しい岐路に佇つ日の面を買う　太茂津
新しい話題へ小石投げてみる　比呂志

佳

新しい朝がわたしを待っている　螢
新しい花芽は明日を信じてる　狸村
春食べて風も光も新しい　みつ子
新しい答が欲しくレモン切る　楓楽
新しい紙に向って墨をする　鬼遊

人

新刊書机の上を光らせる　いわゑ

地

新しい花に目移りしてしまう　はつ絵

天

恥かいて新しいこと知りました　保州

軸

新しい靴が私をせきたてる　典子

兼題「人形」　松原寿子選

ふるさとに母を残した竹人形　鬼遊
人形の愛はひたすらなる無口　美房
雪国の哀しみ秘める竹人形　狸村
訳ありの人形とことんついて来る　シマ子
ロボットが人形でないときが来る　敬
赤い靴はいて人形ごっこする　理瑛
人形に徹し切れない胃の痛み　楓楽
人形にされて有名人になり　東雲
人形の花嫁はもういない　正坊
橋を渡れば好きな人形待っている　太茂津
人形を脱皮した日に走り出す　天笑
藁人形よりを戻しに来たらしい　しげお
人形に金銀の帯重すぎる　幸
人形になってお金を貯めている　典子
人形に電池を入れる寒い指　恵美子
ケースから出て人形が吐息する　結実
人形よ娘の代りしておくれ　月子
文楽のここが見せ場という動き　庸佑
人形ではないと離婚をもちだされ　洋敏
マドンナがとても苦手な武者人形　正坊
抱き人形髪のやつれがいとおしい　千代
竹人形かなしい風の音がする　萬的
人形の恋は哀しくあやつられ　美房
人形と瞳が合ったのでほしくなる　智子
本籍はマッチャ町です雛人形　金太
人形の目は幻を追いかける　天笑
裏切りのマリオネットは糸を切る　愛論
紙人形　夢二好みの目鼻だち　雀踊子
マネキンのポリスが立った魔のカーブ　雅文

幸

ノラという人形が捨てきれぬ　月子
人形を味方に少女春を病む　蕗児
紙人形一夜の夢が恋しくて

佳

フセインの武者人形は誰が買う　東雲
人形の個性に疵もいやされる　千春
人形になりたくはない起きあがる　螢
男弱くなって人形でも抱こか　白洋
紙人形の紙魚　過去形の恋がある　たず子

人

女強くなったが人形変らない　白洋

地

人形の箱から出たい夢がある　〆女

天

流し雛女も罪も抱かせよう　恵美子

軸

人形のひとみ魚座と響き合う　寿子

兼題「くるくる」　宮西弥生選

はらはらとさせてくるくる回す皿　右近
日傘くるくる備前で夢二生きている　金太
くるくると決心つかぬ遺言書　公一
吹いている顔がおかしい風ぐるま　鬼遊
くるくると予定を変えるから困る　〆女
くるくると思想を変えて若返る　千秀
くるくるとまるめて捨てるエゴすてる　敬
くるくると回り戻って来た紙幣　雅文
糸車くるくる母の忌が巡る　信治
万華鏡くるくる主張など持たぬ　楓楽
くるくると舞う花びらにある迷い　みつ子
渦の中へおんなくるくる消えた夢　白洋
軽い男でくるくる変わる主義主張　たず子
猫の眼見てる決心は変らない　度
忘れたいことへくるくる動いてる　いわゑ
くるくると器用な指に嘘はない　千歩
明日の詩くるくる紡ぐ糸車　千春
いい風の方へくるくる風見鶏　しげお

日傘くるくるおろかな女くりかえす　幸
とんぼの目くるくる命乞いをする　結実
地球儀をくるくる旅に出たくなる　月子
くるくると矢車男の音がする　比呂志
ボールペンくるくる過去を書き変える　太茂津
風ぐるまくるくるいつも素直です　(小)英子
くるくると水　悠久の旅をする　天笑
お見合の日までくるくる気が変り　小路
ロールキャベツの帯くるくると誕生日　栞
生き上手皿をくるくるまわせます　幸
くるくると働き痛手遠ざける　典子
くるくると黄色い傘が弾む雨　元江
死ぬるまでくるくるくると寝て起きる　螢
くるくると変る株価の過労かな　仙吉
象の鼻くるくるくるとはなし好き　恵美子
定年の男のネジを巻いている　智子
玉乗りの芸でしばらく食いつなぐ　月子
供述をくるくる判事鰐られる　一二三
走馬灯くるくる消えない過去がある　萬的
もう一人の僕がくるくる意志かえる　金太
くるくるとよく気が変る赤い爪　(小)英子
運命をくるくる神がもてあそぶ　悟郎

佳

文化の灯くるくる村を変えていく　照子
環状線どこで降してくれますか　透太
くるくると弾む時計を鎮めよう　結実
走馬灯くるくる鶴は休めない　眉水
ぼくの意志に逆って風車が回っている　白兎
ろくろくるくる土を愛して土に生き　信治
くるくると動いてさびしさから抜ける　智子

人

よく笑う髪をくるくる巻いている　恵美子

地

この人も生きてく街の皿回し　雀踊子

天

くるくると自分に戻る帯をとく　楓楽

軸

バリュームをのませてくるくる好きにする　弥生

兼題「玄関」　西尾栞選

玄関を開けて今夜はカレーだな　射月芳
玄関で昨日の顔を切り捨てる　寿子
夫帰る日玄関へ耳を置く　はつ絵
玄関で出ばなを挫く電話ベル　凡子
玄関を路郎の色紙が引締める　狸村
コロンボが玄関のぞく白昼夢　みつ子
堂堂と玄関を出て空巣なり　結実
玄関に声から先に来る男　光子
お隣と玄関だけのおつき合い　保州
おばあちゃんのおしゃべり玄関開けたまま　杜的
玄関でやんわりいなす京言葉　朱夏
玄関を出て行き先を考える　三男
玄関であんたあんたと言い過ぎる　透太
半島の玄関に舞うユリカモメ　正坊
さりげなく玄関で見るコンパクト　いわゑ
玄関をあけると赤ちゃんの匂い　茜
玄関に車待たせ見舞客　光子
玄関の寒さ身にしむ核家族　勝美
玄関の顔に愛犬十余年　温子
玄関で別れる人は手を振らず　(松)文子
玄関にガラスの靴を置いて来る　信義
玄関でもう顔色を読んでいる　紫香
お勝手のやりくり玄関知らん顔　満津子
玄関で客を篩にかけている　天笑
玄関の灯り許してくれている　しげお
玄関の犬に隣だなと気付き　小路
玄関がいちばん好きな猫の皿　千代
雲流れまだ玄関に亡夫の下駄　千春
玄関でしまい忘れた尾を仕舞う　幸
玄関を出たら話はみな忘れ　公一
履物がきれいに揃う雛の客　柳伸
啓蟄の玄関をはうなんの虫　恵美子

佳

玄関に殺し文句を置いておく　楓楽
飲み足らぬ鬼玄関で待っている　武庫坊
三月の玄関少し隙がある　智子
玄関に千利休の下駄がない　岳人
玄関に杉玉街道筋静か　萬的

人

玄関に莫山がある美術館　狸村

地

玄関の下駄は詩人かちびている　太茂津

天

玄関で顧問弁護士と立話

軸

玄関にソクラテスの妻が立っている　栞

（清記―楓楽）

柳界展望

編集部

★NHK学園川柳中国大会（**1月27日**）で本社同人の2氏が堀口北斗選「酒」で特選と特別賞に選ばれた。

コップ酒おとこにいくさつづくもの　藤解　静風

言わせたい言葉に寄ってくるお猪口　信本　博子

★「川柳ねやがわ」の平成2年度の年間成績が次のとおり決定、授賞した。①山本礫②吉村雅文③里小路④岡良三⑤河合時弘

★川柳塔わかやま吟社の平成2年度の各賞が**2月16日**発行の柳誌に発表された。各賞第1位は次のとおり。

・あおい賞　小出智子選

足跡に溜った水が澄みはじめ　玉井　豊太

・たちばな賞　福本英子選

思いっきり泣いたら海が風いできた　上田　宣子

抽斗に切手貼らない恋たまる　同

・課題吟賞　松原寿子選

夢売りが来て綻びを縫っている　染道　佳明

・葵水賞　西田柳宏子選

吹き溜りだろうか風が温かい　三宅　保州

★川柳大阪創立50周年記念川柳大会は**3月3日**、府立労働センターで開かれ、盛会であった。本社関係者の秀句賞受賞は次のとおり。

・大阪市長賞

信号無視きっと訣れることになる　高田美代子

温い言葉で満員になる母の馬車　池　森子

苦しみを延ばす命を延ばすため　谷垣　史好

・教育委員長賞

遮断機が降りてあきらめさせられる　稲葉　冬葉

戦争のテレビはいやよサザエさん　東野　大八

のび縮みしながら生きてきた夫婦　松永すすむ

絵馬は満員どれに軍配あげようか　高田美代子

包丁を研ぐ情熱を失わず　玉置　重人

★ふあうすと川柳大会は**5月4日**、兵庫県福祉センターで開催。宿題は、気まぐれ・自由・許す・合図・偶然・挑む・拾う・長い（各題2句）会費2000円。

▼訃報▲

■羽原香苗さん（羽原静歩本社理事夫人）は2月16日くも膜下出血のため急逝、77歳。告別式は18日に行われ、薫風理事長らが参列。

■都倉八重さん（都倉求芽理事母堂）は2月19日逝去89歳。告別式は23日に行われ、紫香副主幹らが参列。

新同人推薦

稲本凡子
—薫風・天笑・智子推薦

片上英一
—鬼遊・シマ子・章推薦

北山好笑（よしえ）
—紫香・太茂津・幸推薦

高杉千歩（ちほ）
—薫風・鬼遊推薦

川柳東大阪	27日(土)午後6時から 呼ぶ・あざやか・進む・一瞬	東大阪市立社会教育センター　近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西5－6－23　桑原喜風 句会費 500円　投句料 62円切手3枚
はびきの民会市川柳	28日(日)午後1時から 水入らず・蓋・ユーモア・(上手)	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8－31－11　塩満　敏

★特に記載がない場合　句会費 500円、投句料 310円（62円切手5枚）、各題3句以内

原稿送り先（締切・毎月20日　予め決定している場合は何か月分でも結構です）

〒597 貝塚市地蔵堂53番地の5-1-401号　宮園射月芳

4月各地句会案内

	日／時および題	会場と投句先
尼崎 いくしま	5日(金)午後1時から 茶・美しい・自由吟	サンシビック尼崎　阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号　田淵定人 句会費 300円　投句料 62円切手3枚
堺川柳会	7日(日)午後1時から 切る・わくわく・恥・自由吟	堺市総合福祉会館　南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593 堺市堀上緑町2−9−2　河内天笑
西宮北口 川柳会	8日(月)午後1時から 門・ありがたい・貫く・自由吟	西宮市中央公民館　阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9−4　西口いわゑ 句会費 300円　投句料 62円切手4枚
八尾市民 川柳会	10日(水)午後6時から テープ・躍る・出発・影	八尾市立労働会館(山本)　近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1−15　宮崎シマ子
川柳塔 まつえ	13日(土)午後1時半から マグマ・中古・臍まがり	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686　恒松叮紅
川柳塔 わかやま	14日(日)午後1時から 盛る・潜る・戻る・萌える	近鉄カルチャーセンター2F　JR和歌山駅前 〒640 和歌山市駕町14　野村太茂津
もくせい 川柳会	15日(月)午後1時から 四・似顔・ミルク・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5−801　田中正坊
京都 塔の会	16日(火)午後1時から 色・育つ・炊事	京都府南労働セツルメント　近鉄東寺駅西徒歩3分 〒601 京都市南区西九条開ヶ町41-1　松川杜的 句会費 350円　投句料 62円切手3枚
富柳会	18日(木)午後1時から 空巣・姉・洗い髪	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴町4−1　池 森子
高槻川柳 サークル 卯の花	18日(木)　正午から 冗談・駅・耐える・自由吟	高槻市民会館306号室　阪急高槻徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3−8−8　川島颯云児 句会費 500円　投句料 62円切手3枚　**各題2句**
南海 川柳会	19日(金)午後6時から 出発・スーパー・境界・即席	玉造老人憩いの家　JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15−18　寺井東雲
南大阪 川柳会	19日(金)午後6時から 反抗・拙い・焼く・楽観	寺田町高松会館　JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1−5−2　金井文秋 句会費 500円　投句料 62円切手3枚
川柳 ねやがわ	21日(日)　正午から 手ごたえ・イメージ・快適・自由吟	寝屋川市立総合センター　寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9−9　高田博泉 句会費 500円　投句料 62円切手3枚
岸和田 川柳会	25日(木)午後6時から 与える・板前・うつる・襟	岸和田市立福祉総合センター 南海線岸和田駅南東徒歩5分 〒596 岸和田市上町7−36　植山武助

編集後記

★平成2年度の一路賞・各地柳壇賞の受賞者が決まった。一路賞は今年で2回目だが、各地柳壇賞は昭和48年度からスタートしているので通算して18回目ということになる。ただし初めは若本多久志、次いで児島与呂志、玉置重人の各氏の個人選であったのが今回から3人の選考委員が共選し、主幹が最終決定するという方式となり、その第1回の授賞となった。

★川柳塔社の賞としては、まず毎年10月に発表される路郎賞と川柳塔賞、いわゆる〝二賞〟があり、これはそれぞれ5人ずつの選考委員が3回にわたる中間発表を経て推薦句が決定されており、ご承知のように本賞と準優秀作第一席、同第二席に授賞される。その歴史は古く、昭和41年度からだから通算25回となる（川柳塔賞は同42年度から）。

★そして1月に発表される銀河系賞と茴香の花賞がある。茴香の花賞は銀河系賞の前身である愛染帖賞とともに昭和62年度から設けられ、両賞ともそれぞれの選者による個人選である。このようにそれぞれ特色のある六つの賞が年間3回にわたって授賞される訳である。

★これらの賞の目的は、言うまでもなくそれぞれの欄の入選句の中から最も優れた作品と作者を顕彰することによって、質・量ともに全体のレベル・アップを図ることにある。とすれば、作品本位で定評のあるベテランを推すか、あるいは実力のある新人・中堅の発掘に努めるか、一考を要するところだろう。（正）

●建て前と本音という二つの世界を持つ大人が嫌で子供のままでいたいと思っていたが、気がついたら大人並みの歳になっていた。入院中で本人不在の時に決ったらしいが、発表されてから断るのも大人気ないと変に諦めて、本欄を汚すことになった。諸氏ご推量のうえ、ご寛恕願います。

●若い頃、職として数学図書の編集に携わったことがある。数字の一つやその順が違っただけで零になるので、校正には大変に気を使ったが、勝負ははっきりしていた。文章やことに短詩文芸では文字の一つで生死が分かれるという気味合いがあり、それだけに校正の難しさと責任の重さがある。

●死ぬまで生きても数十年という転職を煽るコピーがある。自分本位で刹那的・世紀末的な現在の風潮そのままである。終身雇用が必ずしも良いとは思わぬが、後に続く者を信じることのできない社会に未来はないだろう。川柳塔社も還暦を過ぎたくらいでは若造という感じで嬉しくもあるが、高齢化社会の名を免れぬ。いつかは滅びるのもよしと思わぬでもないが、後継者が育ち、活力を持って存続することを死ぬまで生きて見届けたいものだ。（射）

○中年を過ぎた頃から「近視もまんざら捨てたもんやないな」と思うようになった。子供の頃から大の本好きだった私は、乗物の中はおろか道を歩きながらも読んでいた。今思えば、よく電柱や車にぶつからなかったものだ。車も今ほど多くなかったからだろう。

○当然の報いとして、高校に入る頃から近視で授業中眼鏡が必要になり、度もどんどん進んでいった。それから不自由さに耐える日が続くことになる。なにぶんうら若き乙女の身、美容上普段は断固眼鏡をかけたくない。そのため外出時、知り合いに会って失礼することがしばしばあるのには、特に気を遣った。

○そして幾星霜――妻の座にどっかとあぐらをかく頃から眼鏡を常用するようになった。相変らずの本好きは、〝活字中毒〟の症状に進み、布団に入っても必ず読まないと眠りにつけないという有様になった。

○その頃から同年配の人達に老眼の不自由さを聞くようになる。片や近視の私は眼鏡をかけない方が近くのものがよく見えるようになってきた。悪い癖なのだが、今も〝寝ながら読書〟三昧の日を、近視に感謝しつつ続けている。（ふ）

作品募集

6月号発表（4月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
銀河系（3句）河内天笑選
茴香の花（3句）小出智子選

課題吟（3句）
「楽器」岸本木魚選
「ロマン」松本文子選
「慰める」津守柳伸選

初歩教室「合鍵」（3句）辻白渓子担当

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌友、茴香の花欄は女性、その他はどなたでも投句できます。

7月号課題吟「七夕」「泣く」「斜め」

お知らせ

同人費・誌代を郵便振替で送金された場合、領収書を発送しておりますが、会計事務簡素化のため、4月からこれを廃止しますので、ご諒承をお願いいたします。

川柳塔社会計部

定価 六百円（送料51円）

平成三年三月二十五日印刷
平成三年四月一日発行

編集兼発行人 西尾巌
印刷所 藤原童心社

〒545
大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所 川柳塔社
電話（06）六六―六九一四番
振替口座大阪8―三三三六八番

本社4月句会

日時 4月8日（月）午後5時半
会場 メンズファッションセンター3階
中央区内本町1―1 電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車（3番出口）交差点西南角

おはなし 河内天笑
兼題「薬」吉川寿美選
「紙屑」奥田みつ子選
「杯」宮口笛生選
「電気」阿萬萬的選
「海」西尾栞選

席題 1題 当日発表 各題2句以内
会費 500円
投句 柳箋（4cm×19cm）1葉に1句を書き、投句料310円（62円切手5枚）同封のこと

本社5月句会 7日（火）

兼題「城」「重い」「休む」「誓う」「古典」

NHK川柳作品募集

課題「もしも」 橘高薫風選

ハガキに3句 4月10日締切

投句先 大阪市中央区馬場町3―43
NHK大阪放送局
「ラジオセンター」川柳係

発表 4月28日（日）ラジオ第1放送
午前11時5分から

西日本文字放送作品募集

課題「料理」 森中恵美子選

ハガキに3句 4月15日締切

投句先
〒540 大阪市中央区谷町2丁目2―20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送 川柳係

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成三年三月二十五日 印刷
平成三年四月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻七六七号 川柳塔 四月号
定価 六百円（送料 五十一円）

賃貸住宅の建築・設計・仲介・管理

売買貸借大きな家から小さな家まで
住居の事なら何でも相談できる店

豊津住宅株式会社

代表者 大 矢 喜 一

豊 津 店
〒564 吹田市泉町5丁目11—14
TEL (06) 330-0006(代)
FAX (06) 388-6102

関大正門前店
〒564 吹田市千里山東1丁目9-21
TEL (06) 388-6166(代)
FAX (06) 388-6886

泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた
男のロマン

オーエスケーの
紳 士 服

株式会社オーエスケー
〒540 大阪市中央区南新町1—4—7
(06) 941—8018

雑誌 05703—4